岷江入楚

箒木

825
.G18N2

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

帚木
十六歳
光源氏君之称号之事　源氏為中将　就人少将為次中将
夏雨夜之物語之事
次中将見源氏之君之艶書等事
右馬頭式部丞参就御物語事
女房之品定再往問答之事
右馬頭物語女両人事
頭中将之物語之女之事　夕顔上是也
式部丞物語之女ノ事
翌日源氏君退出参上宿所事
其夜為中神之方違一宿紀伊守中川家之事
同時始見空蝉君事　空蝉君ハ故中納言右衛門督女為伊与守之室
小君初参源氏事　小君ハ空蝉君之弟也
小君傳源氏之書詫空蝉君事
源氏又為方違宿中川之家事

空蝉君不見参事

帚木　以哥為巻名

はゝきゝとはそのはらのふせやにおふるはゝきゝの
源氏君の哥也

或 河をとりて巻の名とせり此巻の夜雨の品さためハ源氏十六才中将
と申せし時の事也此品六月はかり（或ハ五月とも）の事也桐壺巻ハ十二歳より事
有故ハ八十三四五の三ヶ年の事ハ物語に不見計但桐壺の末
の頃より此巻の始の間の三年の事ハさたかならす

弄 源氏十六歳の事也
巻の名の事

ははきゝハあるにもあらぬものゝたとへにいへる也此歌をよ
是則ちあるとハ見えて行けハなしとよめる也はゝき木とよむ
也の事ハ抄物ニ見えたり
ははきゝと云名ハ此物語の大意にあたるせり此巻の巻頭の品定
多くの浮橋とも見えし又人の心も皆はかなきことのたとへなり
一部にかゝるへき也桐壺の巻ハその前なり
紙はら云此巻をはゝきゝといふ中河の宿にて源氏と空蝉

よの綴者の命にて付たる是則ち一のまきのことハ見えてある也
思ひ分ていふへきことを出るなし定をまかせてさまざまの事也
みえとハ見るへきとあるへけれどもなるまゝさまへおもしろし此巻の名なれと此物語五十
四帖におよほさる名にこそあれハ此物語ハ作りし事にてあるへき
まてハあまたとも又昔あるへしかれとも々あけおもてありけるし
桐壺の見えしとも逝去ありかことわり先源氏とよぶ所以なれ
若紫ハ物の跡とうつし葉中の行跡を様をあらはしなもそ也けり
つまらぬ事されハことごとく似たる物しとこそれハ事なき物ゆへ
ともされハ其物ゆへ一部の惣名し 天台にて四を立る中に
亦有亦空門此物語にあてられ夢浮橋も一巻の名とし又
一部の名なり物し物語は上下の人の様をかいたる
夢の内の事をのへたし其上人ハ荘子か夢に胡蝶となりたる
ことをいへり又胡蝶か荘子となれるかとおもひしも此物語ハ此
への夢なるもいひつくし今の身のうへともさらにかはる所に
夢の世のうきを一第末の世を出しされハ此ふ式部が書したる
やれ多深くおもんはかりなる物し其心を見るへき也

箋云箋同前略之
如 桐壺巻ニ十二歳までをいふてあらす但同巻の奥にいたと
あるかぬかりし後ハ書又里の夜ハ源氏の秘記つゝき宣旨の
ありてあるさき肥るとみえ都てハ十二四歳の事ハ桐壺の奥に説
侍るへし

巻之名之事

河海ニ云ふ本の名を記して此物の所々に名をつくしてあるを作る也
その本をとふ名出てハ源氏一部の名ニつきて見る也此次第続
に同し河海略之 或説此巻ハ桐壺の巻の並とも不用之箋同之
此巻の題をたて本ににかへしけり夢の浮橋までの題をまる
と見るへきなり
闕書云此巻を清花の一巻におく見るし桐壺をいふに序
にあても不及是を清花の開端無量義経に准らるし故此巻
に始て夢の浮橋まで終るにこそ
此巻を序分といふハ物語一部の作り始の大意をあらはせるし
又此巻を法花の二ノ巻ともあるしされハ二ノ巻の始ハ譬喩品し

此巻を似て此人の名とおもふ人もあり事なきにいふべし
もおほしつきね雨と多帯末此人をおもひそれなりけれ
又桐壺と云ハ光君といふ名ハこの事よりの終て也てより
名たてそより此書の始そ光源氏名のことし出しより書
はしめまりつゝ以下を不用と

光源氏名のことくしうしいひなされのこともおほりんなりけるよ
は光源氏と云名ハことく去て中の巻にてあるよひよ付ていひ
きさ事とかかはりしとし名のをことく去てと後切ていひき
なれのの以下を以へ名のまきひのをりと方人ききさる字後つたを其心を
む　此發端ノ詞桐壺巻の終に光君とハ源よの後そ中にてといを
弄　名いとしそ又いひなされのみことも在りしといふ義句論なり
紙絹云名のことく去くとハ光源氏と云名いふあしうと知也
名なりこしいひなされのふとおもりとハ世のまゝの名なく
如　かまれば人をも世上ありいひきけなしひし
何ぞ名のことく志うとよふ切と可能但よのとつ本ても
くるしからさるし人をそしらぬよりいふをいふなる人こそひ
きつるに拘し是世のみちに守し花の弘徽殿のこときあよ
まいひきけなりともまされても世の此人のいひなし　箋曰
名のこと　箋云老子経云道可レ道非常道名可レ名非常名註云
夫名者三才之總稱有富貴尊栄高世之名有自然常在之名常
在名ハ如嬰兒未言雛子之未分明珠在蚌中美玉処石間内雖照

昭々外如頑愚無名天地之始有名万物之母又云其在人心則
寂然不動之地太極未分則安有春秋冬夏之名寂然不動則
安有仁義礼智之名故云无名天地之始其謂之也昭以為此
之喩也既有陰陽之名則千変万化皆由此出既有仁義之名
則千條万端自此而始矣天地者非ス專言天地　論語子路篇云
子貢問曰郷人皆好之何如子曰未可也郷人皆悪之何如子
曰未可也不如郷人善者好之其不善者悪之也　又
未大奏者不疵小泥　私義ニ老子従此下を引ケリ此光源氏
此名をはしめてとくいひあらはしたれは世にあらはるゝ
名になりし　又云名ハ万物の母といへることもいひつへし　又論語
りて千條万端此ともいへる人をあしとへんなり　又論語
を引る心ハ世の中の人の心ハ一様ならす善悪さまさまなれハ子
貢を人に皆よしとも惣らほめられてもよからんかと孔子に問に
不可と云そさらハ皆にくまれんはいかゝと又不可といへり
よく云ハ悪しき者にハ悪まれよきにいはれてこそ人
此人ハかたの事ハなくねし給ふよう見ゆへしとかきて

あらはしいひたる事を聖人のたとへにいへるなり世にあらはれてをかし
人の源のとくをいひあらはしても世に名あらはれなとも云
大事をもとめて小微をきらひもしたとへはと云もたちまち又
此まへの人まおほしめてにもひるかへりてなきとも又いひつゝけり
とこ光ハ頂り夷蛮芳契々ことに世の人色好みとらるゝ
此をも好色の事とのみ義ハ恨し　已上義ノ義也
いつくかの家も絶てしまると　光より好色の事に　秘々
義此詞より好色の事をいふあまたもとひすゝめを好色の事をいへ
家よりいつくの字を色ゆへに　光源氏とふたりまれ多くかはれ
の事にまさしく多く此色好みとふかたいたゝ好みなきとかくも
てあつかはれてかいよく色好みをいひ法をとめて源の性ある人につかん
ゆるされよう　とも絶てくは漢書李廣傳に教字とある
かすれなりと絶あまたへとなつ　此段猶見ノ義不審
ひなり又かくうてなるんてと
祇注に源も好色の人なれは両方に実否ありて下に好色のならひ
私云いひかけられはなみにもあらす数々好色の事を申すつかひ給ふ

人をおもひさるまじき　不良〈サカナキ　ヨカラヌ〉　悪聖
かやうにおもひなす人多かる事なども紫式部が筆をつくしてかけるし
又ゆゑある此筆者は人のこゝろふかくかけるさまなど人のおもふ
事をやうにおもひやりてかくいひつゝし
作者いひてゆかしう　思ひのまゝいひ出し給はせて作らせ給ふし
世をいとふ様ならぬ上に実なる事を立ちのかして
まめなる　〈作〉皺眉〈ニガミツ〉逆仙客　皺眉〈日上〉　直立〈ニタクツ〉
啼てしきなるといふ　上にも実事を作りなる事なし
なまひとた　〈作〉羅しんやつゝたになるとてきめんなるかし
おもしき　笑ありあそびたる顔し　源氏の人に実をと
なきこゝろもかちにかくやうにあるこゝめ紀風流なるにはなるてし
こゝ野のおはりい　河ノ義木富の器く
〈花〉宿の御名花宴にて物語の名とも出たる所にて源氏物語と
いはおほとせ又この御のおほのびきなるあらく光のおほなとい
おもしとい又野分巻にかく野分のおほいなるとすぎし紙の
ためひをえらひ作らるし見えたる不論ならおほとふ

物語作る上にはそれにてこそなりぬべし　作り物語にそ物語の
例にならへる筆意又一種なるべし　彼物語にも中納言の事をと
さもあらむして作りなす事いさゝかや作りなん定まりていふなれ
まての事はなほ不及なるし　祇注にかくいふおほい事なく
此義作意を作り物よりも野分の注といふ人の言ひ限なし〈ソノミ〉
光源氏といふ野分のおほとは同時にいたる光紫式部が今でもいるし
〈秘〉かくい野分おほといふは物語の名に付の細事は梗概にまてかいふ縁い
さ野分おほいなる性格のさらへうけるへし此源氏いふ人にいさる
くて下に好色の心あるさ野分おほはに見せてなし好色の尼かき
やうにはなる花物をも源の人に実事を立てる笑ふんとし花色は也論〈初〉
まさ中納言と此物のゆゑ　〈弄〉夜よりまての源の初と　〈秘〉
此時源の高安中納言なれども光の事をと後に記せる所にまき
此字を書きし文字アリ　義同し　祇注此書にては内編中納言
御をまさ中将をもにかへし出て書ていた事不審なる事
紫式部此物語を書る歌作りある物のやうにあるさ
まして也しかし事ありてさきらくに傳へ事しうちといひつ

しるしてとりあはせ一部にしなしやうにかゝりさるかゝりたる巻
の末おりてこれをあつかいせらしかしの事にいへいまた中納言は
ものかたりしの巴去のさかひなれしるへい伊勢物語に業平
の極皮貞観年中にかきかゝ後撰集平没後に伊勢か書る故に
極皮を書し甚あやまりし此義をあおもしれハ末の書如斯にや
秘抄ノ説なし
からまのとはゆかりひょう　　内裡にのとさうつひかし給し
箋 桐壺巻に内侍のとこゑまかしくおかし給ふ声さうつひ給て大夜
まニうるなとなえくまゆらてのつとて　秘抄曰之
おかいものりい　葵上死又也去にし　弄ニ禅詞に大夜なる人
へともおかい夜といる下なとめすいまて通用之た詞し
思ひのとこれやと　河奥入に吉日部にまつ書のそうる給と
さのみ死とこれかきりさくれを
内裏にそいるなこそこれなるおつひゆんも葵上かくに是ひと給
となるらさくさくもしゆもと耳し花宴に菊つ下まんつまり
ますとそされきさし　つある　極りて　いとしとおかし給ふ

箋 これはおなし　又川舟に及たれとこと
ことしもあさめをき　箋 花宴ノ箋帖し
るさとひとつし如と源の御けしきはあひはぬをまへにつとめ給
事なれな姓なりたしりさもあらぬとたる御本性そて
と書捨く乱ましての給いなしとりかゝをいくりまりかやうし
詞とりし捨て至るも此物語に多りきさうたにふるまてゆかしなつかし　箋月
秘 此段ハ惠皆源の本性をあらわし侍也源の御心を色ものちて人を
しにも見るきまへしと給ともつゝし源の一生遊びの心もあわり侍るし
まれ小ハ行かうちふ　　祇注にはりといふひきやをおもきる
ぬ御心なれハ是非心あきらかなれと又時に家まかひきうきゝ人
とのまおりしそくさんとにしりそれことなてなをりしきふ
あまひともあり名まえかゝり事をもみるなくへし
なりあらしれもよるのき　　秘 死六月とあきされたる月の事なりし
箋 祇注同し　弄 霖ナガアメ 余雅云二日以上を霖と云ふと
私云定家卿の一字抄の百首に霖ノ字を夏ノ部におかれたり
しかれはさみたれとて訓ずる也又何をもそて五月雨に用る也

一義花に六月とあるはあまりより降つゞきて六月に晴るゝれ
られ御物いみ　内裏之御物忌也
物忌之支何妻　伽毘羅衛国之大毘神王之名也誓願利
益畏生若人宅物怪悪夢木之時書吾名立門他害毘神不令
来可令守護と　義浄三蔵説してあるを略して書し
内裏御物忌の時に幕ゟ人ハ世ノ時より幕ゟ物忌
御ノ字シけれ　柳の枝を三寸つゝに切りて冠の纓に
さしぱ式又ハ花の御袖に白紙に書てつけらる又御房の御簾に
これを付但二間にハつけし背ハ無かならぬ物忌とりさりて御簾に
つけ冠にさしあるまじき事なりてつけて見え参りて留し
されハをこころちよろしきかにてありしやうのひやうあらん
かさねをもとハ冠にさし取し其ゆかりあるいづれ白くそうしかうさし
わものありにつけありしかる事なり
御物忌ハ誰陳にれと立御簾の君をにも物忌さしつかふ也紙に
て所宿の人々とてよろしく寝ぬる人ハ気うれ主上御あたく簾
おのりおのありれ毎日の御物忌を御簾をあけも丹后の御簾ハ皆
まとくく物忌と隠し二戸切り簾出入の君にハ宿申し来る小蔀を
るそとをこれ太后の頃の御房に参りてこうあき申書通
なかへの御ぬ元御物忌の間化の御ゆかり御物語り御簾中
まそこに通ありて四方様に八東庭へ出御直房と云神朋天皇を
殺させらるてしともと　以上禁秘抄之義し
又御物忌数日つく事ようれたけしおとうつきハ庭の御座に
ねをもハ禁中の御後にさかなれ着ハゆるしまそもせし事し
いとくおかりみ　久しく居給し
門にのさまつゝひくくとやさるにつきそへいつくとぞいひつり
おかれのまおかつるを　是又禁中御見の事あれ中をみつけまし
御よそひ御ぬきし　物忌来以下まかれ事何ゝなれまでとし
后太后にはさいうつゝりつきまの御し
てつらいつく　　調出し
御むもを子の君ろうろ　后太后の君ろうろ
見こそれ吉との年ホ　　源のとのみ不相違し
こあつまれ中将　后太后の嫡子相違出す親へお騎とみえし人へし

母ハ桐つほのみかとの御いもうと也 後ニ致仕の太政大臣
と云葵上の兄源氏といとこし仍他腹の太政大臣の子のほまれハ
あまたありし中に
万 将家の嫡男なりし也　　清慎公ハ中年まての嫡母ハ宇多女
江 蔵人少将　忠仁公　昭宣公　信懐公　謙徳公　定義公 基忠
右の大臣のいまたりうりしつき　弘徽殿の妹とし
二条桐壺の時右大臣し　此四の君中将の室
此君を　源氏の葵上ハうとしまやうり此中将ハ右大臣
此四の君へうとくし　とノ字のあやし
里まてを　頭中将の父太政大臣の室し
家のうちのきよらのひまもなくして　料理 世仙家 室礼
太政大臣の室頭中将のかミまな きよらにて居所ハいし
君の御入し給ふ　源氏葵のかたへおはしますことに御入あるへき
学問なとも あそひ　何事ともなく只心中にまおはしまし
また菊の世にあはれまし 是ハ面影の物語の序なれハし
おさしくいこそしれを　源氏あまたところの出なりあらてのかくまし
浴衣　優長　精日本紀 花頭し　義云夜ハ浴ノ字の浴室
の心とし　於何に妻　頭中将の源氏にこはれとも おさえしおとい
また内にもおほしくしこのほうもくさつれ
故 虎そてなくもつまりの君のつみとの礼儀をも是れ
てうとうのあひ給ふをもことうとよいハ無礼なるへからぬし
是不さうの物語をのうらさけあるかは好きあるし
つまをとほくなして　数日は内の御所とうりて
一日降夢にもあやしもやかての雨夜の物語も雪の降
物語をるしか雪のはすて折々あまくもくもくもさらに　云寄もり
寮上てもたきしへもされは　内裏の夜上し
此あふくハ頭し寮上の君をそ物語にこひしへまうなきし
御あみ亦を是いかりハ　源の夜居所桐壺し常にハへへて
きみつかひ女つへなともなきさる 御物語によしらるなるし
おほむかのつちはてみれ　灯をちつもてし此へへハ字
問か子の文書精の事し又ちかくとハ切灯墓しこと義
ちりまち御次し　御厨子

多くはことなるのみ　数書し文体ありあるへし
さりぬへきをとこし
源の羽中将まうやそてとしさもありぬへきをいふせんとおもふも
かくうちなりへき　旧 伃倫 頷カタクチニキし
如 其中に見ゆるしきさまあるへきと也今は興ある人多といふ也けれは　弄
拾のうちとけく　又拾中将羽し
かくわなるつきといふらさけぬるみなるへしと吟ふらむ
救あらう称と　拾中将早下ノ羽し
りまうつして　如 只大らるれは拾中将なんへみてうれつりてらし
そのうし　旧 各自慇 各競 日本紀 八雲云まれく
是ノ四も恵心僧都之作之極楽讃に多くしをみて各ゝ志
そのう四つりまうせてしと云のし　旧青三首有 男し
義云へものゝ志て四つ有 一には又にと云心二には深と云心三には家く
と云心四には各競と云心　そうる此志しれまうや 各自深しと
思んも仕く 怨也 是ノ注云悉し服し仇し餓し邑ニ云し
うらむの四しえんもれは多くもおろくこ也うふ四つとは好 如何

祇注さりぬへきと云より源氏と拾中将との東の羽まてあるは
まつ四し仍り但えんもうれなといひもそてある次に源氏の羽あるへ
きと又拾中将の羽とみてうりんなうるれはら人おもしさうあるう
面もうにいひもそて面う此物語のなうひなれはそのゑ
くひとみくをう〳〵きにもを
あんてもるく　一ゆん源く如くし返へまえりと云し
おほそう　大おもし　大極成なしと云やうれんし大うれんし
これは二のまられ　次のまうもと云し只身一まうくしまうへき
みそいあくし　源氏まてあゆんと云し
んやをきなるへし　祇注は拾中将源氏のうたに数有
をとえんのうそてとる羽しんへうそてもくうし如しとえんもを
そこれまい面のうへんとし又あんてとなくといふより二の町の
四ゆをきなるへしといふまてい幕の子絶しともうるへきまや抄は
おのえんもれもそいひもそてぬるまて互まや　如箋
るいうつて尺うる　拾中将の尺るしくさるくなうは同羽し
何あてなり　旧 八雲をとしつうりなるを

中にいひあはせける事もなし
　みのうへを推量して此中将のいひけることもなし
あそちすれぬれ人の
　一向さそへつらなる人の心をおもふとみえたるにや
てきくのみにて
　源の内證奇特しとくにてしきくのみそ推量に
かしみてあるの人事をはつかしと此ある人はいひあつくるか治定
に似たりとおもひてかたちの事
祇ここにて　源の詞也　河ニ足下ソシカ　少し推量にくらし
也足下は人をさしての詞也以中将をさして此ゑともなきにそ
しはみは思ひくおもひあるとおもふてはけなのりひつくしうく
あきと源の心のうち
御らんしはあるらんとて
女のこれは意に思ひなん
　中将ノ詞
　これはとしとしもやめたらし
こまかに源氏と中将との同齋に一段おとくしか一段中将ノ詞也
箋秋に花ノ箋に用し
見けさの此一段中将の詞也
足つと詞のなとき　いはゆるまきれたる
箋云慈恩大師之弟子四例大師梵網之古疏之女人身中有
十悪変從生至死不得自在ツ

やうしなん　祇注以中将心にくゝはあるなり　やうし次第也
　世上の女のさかをさたむへし
それより人の心のさまにしてかくしつきたる
うらみさうつくしてそれたうなるけしき
私　うら人のをさけなきなとしつきたるにしうこし説に用ひたるは
とさこのなけなく云ここそ心のひか程かなるし　弄同ニ用ひ
は　其の書の祇の真字は人の衣冠正しき祇注にいへのきぬもつくし
竹の人のありく祇注をいひけ此奥にてもちまうれ
なとそさるへしとりねたらんにつけの事さし
祇注女の身の事又定めかたくしるを
折ふしのいろく　祇注我にかけて
きいあんす　時ふしさんにさうゆへ
たかうりや　おかくてそよかり
おもしきこの　されのとかか詞也
　男女にあひて人の心つひ志趣をとらや志あれや乃ある所詮し
私　そのうへにつきて撰せんにはいつれと　祇注ふかに志をとりて

まう坊ハあまてゝのこし人ときるへくもなく青経とこのみきて
なかれとは事し必をと云字の略しその名をつけて此人のこ必を
いふうをやうなるかうふ給すなるへし　祇注是より先さき也
此君さこめ給すハ世の名ル女の口とおもはくもあつまる人々源氏
男女ともなりて世をはいら給ん名もなる女もすぐれ気ある口ある女
もみなと云と語りもす事しは中納の世をゝしく知り給ふ給ハ今まれと
源氏君より八まさりしこのことまて女もの御事ともよく知り給ふ本語り
のまうしたるこ此表ハ人のねうつうれしやはかん毎ゝ人え南時も年知る
人ハ卒の六十の給男の事といふそそこの人々の口さうくこそを
しかさやうふとしそ待りしかとはかうてぬ事しかれは南時の人々の
ハ前の人々の口を何もなまてし此理なりとつゝまんかうひ名也
まり口ね手もなる　祇注是もあれつきなれとやうに人をよくし
如　何そ六とは知りさうぬあまたハ家々てさうひて人と何もなりいわて
女給ふをし　私云女もらきうれいかのかりなくへし又々それなと
うまてハころつかしきもまて　なり
中文忠か知らぬ事と家とち人々ともうしめ弟也源すなと知りね有て雨ハ安
のさし

おやなとも申らるゝ
おいされこの御家宮のうち　年一段なり
菌　楊家有女初長成養在深閨人未識　注 尖菜（シイサキ）の生やかの来嫁此女子とくらう
如こうかと　注 片方カタカト　廉　日本紀　ともにそうるといふ事也
少侍ふへくの口をとかくさるかもはかり　如　寄なととよきと翠のをも
川きのよとしるすと一局し志いつるする此まふうとつくてし
九世界ささあハ治りなく当世のわうとかる人々のあまる田々とへかされ
とかし物語の中にあまる人々の性の性川合てアんうて
くくちおしくうちおかれてき　注 穏ラタヤカニ今序のをくるの口
たかしてきハおかしらなの御し　きトか道し
まれなつすへき　何をきうやんてもあまたし花ノ義る寄
ならなきをさみ　注 なのさう事し
日をかさ同もし
いへつもて志いける　注 由緒しらしあゝくて志いつるし
如　来つゝし此翠あさ引のまつをかまくて源のんなととめ給ひし髪
自死一藤ハ人のまし志いけ家事あそし

ある物ハあまたあれともよき人とよふへくもなく青緑とよふへきも
なれと見苦し必ましと云字おほしその後つけて此人の心必を
いはうとやうなる心はかりなるへし　祇注是より思さため
此君さためれは世の人の女の事をおほくあつまる人ゝの源氏
男ははかなりて世の中のうはへあるゝ女もあまた見る四注の女
しれると云と語りもすゝ事しれ中将の世を〃とくしく知りける〃あまれと
源氏君よりハ〃〃〃このまゝて女は〃〃ともよく知りは〃なる語り
にてしたゝ〃此奏ハ心ねかくれもや伊ゆんなとゝ人は当時も年のき
人ハ昔の六十年以来の事をいゝてもその人の心〃つくゝそれを
しかさやうふにしてはりしとといふゝて汝まちに〃は当時の人此
心前の人の日ふ何ゝさてくしく此理さもとつたへ〃ひ〃〃〃し
祇注もとおほれ〃〃〃〃〃やかゆ人をよふし
五月雨のころ
如
何とて六と川知りさゝ〃あまたハ家にて〃ひて人をほうちくいひて
女此くなし　祇云女はうきゝかれいつゝなりへし又こうれなるの
うちハこゝろかしきまてなり
男女ともかくゝ事をも家ともう人とおもしめ第也源の心を知りぬなし雨ハ女
のよし

おやなとたちそひ　第一段なり
おひさきこもれる窓のうち　注 尖茸シノササ 此生もの末嫁此女よく〃〃し
菌　揚家有女初長成養在深窓人未識　未恨事
かたかとも　注 片方カタカト　廉　日本紀
きゝつたへて心をうこかすこともあめり　如 青もとより琴のねも
一かたにいつはりすれ〃〃〃〃〃〃つくろひ
此君まこそハ語りそろ世にかくてゝはゝ人の〃〃るは〃ふとさとされ
とかく物語の中にある人の性は性川合て〃〃〃し
くちおしくおもひて〃〃〃〃〃〃　注 穏ヲタヤカニ今序〃〃〃の〃れ
たかくきハおほくなるへし　きト可通し
さかしらて〃〃き　何ともきゝのんてまかきし花ノ露に富
なるとききてさゝみ　注 なほさり事也
まことに同〃し
ゆへつくろて心いひける　注 中ゝ〃しく〃〃〃〃〃ていひなし
如
末つしの琴のね川のうへてきゝて源の心をとめ〃〃しなし
自然一藝ハ〃〃〃〃もいひける事なし

君か人をうらみ給ふ　細 中将ハらうたき人のくせまて必将にも
男のよきことをつゐをぬかしてハひたるにもこれらかふ所うち方へ
はべりけりて　さうしをとかうちまはすへきとハてしやへていひおこし
思ひにいて　されはやうにハわりしと根本にいひこさんハ無御し
されハまことに君ならにおりてのまして待る物のおしや必ならし
紙絵をハ君さまあの身一しんハ人のむなしあのうちおもしくさら
やうなりやうの人思ひにのまことも きいりてさされのならといひて
少へつきてとハ自然笑用なるてしさやうなる人を見のことかな人
ことくきていひて物をみやとこうもる事なりゆゑをいひて此段ハ末
摘よめるらし末摘ハ著をとく但あるの不おとりき取ることを又関ひ
しさと大宿氣めの源氏よ語り申みし事とく仰をつる又此段
のおかり物をうちおもしくわりやりなるおかりていひて末摘ハうち
あつきくしちかの直にかなれといとしく仰かうのハかなけまた一段
まれて論をしひの思の　似かるべとハもれよおうるとなし
箋云末摘のお帰とこと　箋云しめ末の　聡目の志ちとこと
うめきこえ

あつしきまかは　　弄　頭中将れうし所事ちかう候りてさし
うまうちしひさき補し　　種玉頭中将の知らいひあらまて歩を
めのつやうの事をおもしてかまふかのうつしくと頭中将の
人事を源のそひのをのうりのやうや時哉いの親決ノ細よおもてかう
いとなへて　源の心しおほしくいひんのゝかねこし
まれと　源し　花　身二陸　源の人細し
うちかりおもして　源此補し
そのうこかりてなき　源の細し　前よもそうれしろ京おれいハ
様なうやうの人農てとをそへくつてもひふよあふをいか様も
そのやうにないもしうくうつりそいおもしと源の　やかの
まうさまれ　頭中将細し
いとさきうのあもん
花　之段しさいうとハるのうこかりてもなきおもてへいかとし
きゝとれ　ぬきりう時しわし
まとうけていひつく様なうのたちありしひをし　前よいくるてもしをおもふ
さうかうとあらくちゆうひこさつてい へなりとおかめりつるらうされたを
時もはなれむらう　花とうかさるもいれしき いものてま

ゐまゝ人をしのぶ優なりとみえけるとハあらでよき人をといふなり
あらしきよき世のうち此二の品ハおなじかたにあらうべきを云也
まろうきとものきれて下らじてそのかたくはつきてあらざるなし
義云論語云上智与下愚不移 注ニ上智ハ不陳於悪下愚ハ雖敎無成
又班固古今人表ヲ書ケル 上聖人 上上 中仁人 上下 智人 中上 中々
中下 下上 下中 下々 愚人 秋収日
上ゝハ聖人とおもはれ又人ともまれなる物し
人の品なく
花 いつよりハ人の品をさへあらちて先種姓の
分けときゝ上中品の人のよりをもって
或抄ノ説ニ任分けき人ハ段下よりてなほよりて後の
とおもふそうわろきことすれとも何ほどよく見ゆるなし
なるの
そのうちひ 自然しきれんに
こよなうなへ 氣ケハイ日本紀 形勢 新猿楽記 景氣
なおしてこの世なきて 無此世之 相違春ニ こよなうとハ大かた
中品なりけん人の 花 これハあしてハ上臈にあらんハ

又あり下臈にてあらぬ中品の人し
抄云 人をさてうらうむ事をかけたり
おのこも 或抄の説ニ中品の
一の人なりし 室町中ノ中にて中の品なり
ありぬべきことなり 花 下ノきハとハ下臈の種姓といふ人也
次うしよはやうなきも耳にはかなし
抄 下品の人のうへハ人のうへにあらぬを見るなけれ
あるなきをしるべし何ぞに残しきハ耳にとまるなれ
まかるこハ数よりおもしくと品といひ述なると
くるなけなる 以中おもひかくれて入べきなめ
らしき 稀と浮の中しくて又向なりける
抄 あしうに皮をうしと品のあくなく
そのまゝやうに 浮の品 花 卅四段
いつまでよさの品をきまてゝ 於浮の品高さとりはかし
後など行まで上品下もき通遥家ないつまでといはれなるまでも
ゐられまするよ 前さつきまで浮の品し

是ハ将経ハ為家卿の孫なれと世々におとろへて官位ハ申しく其為家卿
松 上京の人の為にまちさけるをもつて位ことに加へと選叙令に
位のうしろにふる早ノ字をつけり申しき由
又彼人のりんしなりせん
花 なをとしき日なれ　伊勢物語云又ハうとく人そ世なれし友不知　旧 直人訴申し　中院亥書云ク
うつろふ人とハ将経申しき人といふこれとも此世にめひく友位なく
まさみのかりうるといへる枯の二ますにハ申ちまひにつきて
二度ゆある事を云次ニうまるて以下ハ人の経歴に三界にある
事と今又二川よりて以下ハ将経なる人の友位もなくされ
兼ときなる人くいろうらく存分もなきし
秋 是ハ法実なしの時を過て浮身に昇進をもしてなりをまて
如昇なる人にし　此二の事をおもふままと思ひまうて
もちぬ ヒタシトスルヤウニヨムヘし　旧 法月　独月ノチモルヘし
花のむかのこと為式卿也せう　花馬頭　為式部卿し
秋 此同巻也云御申に或人の為にし
此書源氏中将なとの為法よりハ俳り人をちこなる事ハ似

合りねとさやけれとこといいてせん存ハ此二人を書おせつめてし
世のきくものそて　此人ぐ如又此るまる故世の人の人をを
よういまの弁機の道し申らし
中納言ちらにして　中納言馬頭やと源ありて批判をゆるし
此うれし　源氏ハうふ二ケ条の毎し
いとまこれきて　初 物語之作者ハ毎し初し
関書云少ちきまるると云れ　源や中納言とはのふひゝ花ま
おかりくしとまひしかまほし
年 まふ批判し源の法よ蒙らし
なりとのかれとも
蒙云源氏二ケ條の思ひの内始将経なれ人の如かれなりとい
中ようべの此ゆ昇るとめまと申事の蒙い申きみ如のかり
あるとやて次りきの成るるきと蒙ふ是も此夕の偏筆の
ちうに二月つうる附接の四ハを先蒙へし次よ始也問を蒙ふ
例し其人自跋りかりうし　と
蒙 非ふ也蒙用其身にまきるなの様たる始為内分夕也郭し
祇ほ秘抄ま同し　前の源氏二ケ條の思ひと中将の批判せんと

すへらくは人の五欲十二ある哉の数生死の人をはなれて定さためかたし
るをなかれたる事なかるゝ人はなしといへ三界の人にはこれもゆれては仏の道にとりつかすかし
十八問答 巻一 第一段 雑事 上 第一
菊地如の物かたりにいはく世の中には御門のきさきなにものにもかきらすおなしくおもひさためかねたる人のうへをいふ 私云
このいつくしさ隠るゝ果をはなれてあるにはひとりの人にもいはれぬへし 祇注 日記
私云さいはひの事はかきりなく人にすくれたる事をいふにもおなしことなれは世の
人のきはの人にしていたつらにいふにも世人の人と語るへし
又すくれたる人はなにとなくしてさまさまのうきことにもあるへし
うしろめたくし 東橋は夢浮橋の事 蜻蛉は中納言の事にて侍るへし
書きすてたれの事なり 同 後撰 万葉に
世にあるものとして
人はみなかくして 世のなかの人とよはれてかくれたるなるへし
ようひかたき このさまかはるも人のためのさまなるへし
かくなかれとおもひかは事にもなり あはれなるへし
秘 又巻も東橋のかたり 西行の歌にはさまをおもひてつかひけるも
つかひなれはれたりしうちの事をしりけるも 祇注 同之
はかなのいにしへよりも事なき人の侍るなるへし 初之
うらむる事もなくてありて 何事ともなくて中の思にも
不受也とおもひて中庸なとのかきりを仏教には空假中の三諦をたて
まうさむとするに人の心に 又中の思ともさまさまの道を
以此事は国土荘厳の事なとをかきりをこそあらはし
聞 祇注 生不断の人の心をさく 蒙又同之
秘 此四諦の数しるのことは一色四ケ年つかひてうる人の心のまよひのたくし
東勢とつかさとる人なる身しる衆生の心の所は極苦なる人々
愚案受仏といひて人のたくひの句を切て読つかれ 或 抄師説の心の事とは
見たる所の国の衆のあはれにたくひなき人々とし
蒙也書本付箸 第一 私云 但見たるところもおなし事なりといへ
人の心をしれるいにしへをおもひいたす
まつさきはたゝ人のそれ 受仏と云 物あはれなる人々の事
ある人々にはこれにもおとらすかくれなるへし 物の中に
其しうかあはれ 下すかた人のあはれなる事なれはいふ 又惟光は
あはれなる下まてもきこゆる事なれは読へし

異
一禅勘云大ゝさんなれ物ハ字ニ何ゝゝしても清めて濁て書ゆ
よまずやゝわらしとゝへきゝとも女房のて集つひとゝさらゝそ
その日をゝゝゝるしきなり
えゝあれへき　中の人ゝえゝあゝたゝまいとをゝのれ
立所の人の娘ニ可然あゝゝしまや
なゝしれんとらめ　をかゝくとハ物の有ゝのとなゝのし
娘ゝてゝちゝになりゝる名をいふしゝゝしひのし
河　生ゝゝとゝハ称し　式なるゝくり　兼明抄
恍参議の四位とも　をハ着よりも中納言までを参議とす恍
参議とハいまし宰相ニなるゝのへし
議云太政官のゝと恍参議ともいふ　二位ハツ三位の数し
私云大中納言宰相まてを参議と云ハ太政官まてを下政と云
りゝたゝゝて云議し然ハ然して八省政官の名ゝて八宰相の
これニなゝゝ四位ゝ上ゝならゝのりんゝゝめハ太政官ニなれる
人の但ゝ政官ニハなゝゝしして二位ニ位ニ加ゝゝとゝ議さの後し
世のあゝし　蘭州のあゝし　ゝゝゝし

いゆ　ゆゝね　将作を下着たゝね人へし
やゝゝゝに　異　りとの称さ　いゆゝゝんのそいゝ明不入各ニ
ゝるゝゝ　秘注秘抄箋曰　えあゝのよゝふゝるゝゝてゝゝ
政官をゝハ除て守の屋ゝ外を恍参議をゝハ参議ゝの宮をゝ
ゝりゝゝれや　河かなゝゝきゝけなゝのし人の志けゝゝを
くれゝゝゝとハ志ありゝゝゝゝ云ニ箋ゝてゝゝゝへし
箋さゝやりゝゝのし　少ゝ曰そこきれいなゝのし
りゝゝきゝゝゝゝそ　宰羅なゝゝし　私云史記高本記曰
諧アワラカニと古本ニ点をり然ゝハ調トンツト云四の本の綱ニなゝ
ぬゝとゝゝ　ゝゝさゝゝめゝゝゝゝれとめゝゝし　諧ハ調しト注セリ
ゝゝゝゝと　ゝゝゝハ物を着ゝセイリャウ略ハフク
少ゝ云ゝゝゝへと云ハ名をゝの羽まて物とあゝのゝて羽とゝゝ
もてゝゝゝねあへあゝゝゝゝゝゝゝゝゝねゝ事を志ゝゝゝゝを
ゝゝゝゝといふし家のゝゝ不足ゝゝゝゝにゝゝゝゝゝ着略をゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ女ゝゝゝゝゝゝゝしまゝゝゝゝとハゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝりて　ゝゝとゝゝる人のゝゝゝゝゝまてゝゝゝゝゝゝゝ

おもしろく　みなもてなしつくまけてよくあひ見し娘
かたちなとも見ゆるなりしかよきにあるかるに
よつらつはおほえて　（鈔）桐壺の更衣の事なり　諸抄曰
母親もしらぬおもひくたし事し
まへくわきまへたに　（む）第二段源氏の詞
鐃 ニキハシ和名　新猿楽記云冨饒 ニキハシ
然云上件乃評論来人を聚落の家をハ引く中の品に
至ハ武ハ文家中の落つるなりの家の娘をハ品ニ仍彼詞に
あつて源の批判の詞し
これも人のはいかん思ひゝ　中将の源をさして申詞し
（鈔）源氏ハ好色の身にして此詞のみを似合いぬとし
（同）好色なる人の思ひみなこみさりしきたるなさ何かね
女のさのことちふましめかはいらいぬとし
相手の見ハおほきりてまことをしひおもひにはあらねとも先名の人の
よきとりて男のまゝ道なる人のいきん思ひにんゆきを作りる
と中将のいふ詞し

（む）これは中将の詞なりにハ哭れなりへかいひかねし
よしの君の世のおかしからめしゝ　（む）第三段馬頭の詞しよしの
君の身の世の世のおかしお前の身ハ思はしめさいへると云つゝとし
（抄）（弄）女三の宮の事し曰
此段女三宮によく南まの生雇橋もの皇女まてまします
とも身のよしもちようらをわかてとられ身の品多し
うちあひくもく何身のんと　前まゐりの君時代のおかし
うちあひといふと得て云し按宮ハひん描のまゝ付てもこれ
身のきんをしまそのへき事しと詠しくハ寄なりてくれるゝ
ましとし落をかしの事なり
なきかし如　ある段家を指て云しるかしそれかしとハ家と
実名といふ義なり
（む）ある段ハ源の主もこと上ハ及ハぬ事なれハうち事をし下ノ段ハ
源氏の君の身をも云に付き落すの上ハ如きを見分いひても聞あ
くましく見えぬるとし
（鈔）かなしとハある段ハ自身を指て云詞ハ身に在てとまとをいふかるれ
とし

さて世のうきにたへぬまよひ　これハ女房上の心歟
むかしのことは　白ゐ又うらみなき人もありけりとハ八年むかし
しのぶことさやうなん　此哥の心ハ
いそいそうちいでにひとりうらみなきん
あまりお遠きことにてはず
業云伊勢物語よみのほしきをのせてよいとてもしるしてすかれ
いと深く歎し此段下ぶれ人を云ととし
父のとしたか
寺　前式部卿のいのち　これ歎し
祇注是ハ称せさせ給ふ人あるを中にて紀少人きりのみ人きと云心也
業云前式部卿身上をあらためてかくの居なる君の中将
式部の父をさしめて君なき忙満の人なへしせうとハ式部卿といふ
式部卿の兄弟の女をといふ事也
かうとてもいと　仕おかうつてありしまでしかるの
中宮ともいかなる人を思ひし　此云思ひ居りこがる
きん人の思ひ所によるさかなよりして仕あつかんいつさ
北はありしかども兄孫を奇特めと回の務りんと云ま見ゆる

むかれてきんなさ　上れへしひおしそいつきつめたるさそしかな
いしきそうゝた物もそおるんとひとく高位の武夕の方をとめてし
弄抄御説に文のし名をとの歎けにけなるかをすまひし
わりいりうともに　式部の宮式アトいのりたに近きおるし
家の人をとふて居られ思ひはともおひしらぬし
也
身四段　前式部卿の内の事也
如
いとやうふれるこそ　これハ源氏の君の御事也
祇注君ハ源氏也葵上の父ハ左大臣母ハ御門の御妹なれハ上の位にハ
なりひらけまして源氏のはにふえかあぬみもしかど　紹抄同之
業云是ハ葵上の事を云　源の四をさ候してなる頼し
またさ御そもうなしかなみかけり　源氏称し御そらしおなきぬ
とひそり但哀の抄哀の君まにいうハ所ともえんへし
居はりしくあぬみをかなへしい御たもの哀し
弄
なとうりいうと　秋語の事かれハ知ら居中にて抄見ゆと
畧して世哀のいりを引く所の句緒一往
如
一禪説のみをおうつ直哀の事をうちひきあて給さる

なり御しもちりとは云しさしもめでたき説を侍りぬべし　箋曰
知る者もうちもそへく　小細（コヒモ）とてを但しふのを一説の
式抄御説ぐらひの事の説の本なし古今の寄に見えられと云
をしひとの事なし
拙者其説よりう付て云々といふ事に於て説前を云し僅見
を流のうち付けて物語を少々付し
りひあし云人哥御かりけ　りひあしへのひ見ゆるに為ぞとを云
人ありけむ説あまたもられば優なりし流外はしられ侍り
河　史記 日本紀 君子嫉の羽ぞうきあそびの見ことなと彦に
附出て出かんそあき文と見とりして云説しけりとて又別影の事の新
抄　花ノ説的人し
女　まへ立ち事の為かし　祇注源氏を女に家の属して見へ
知て於て下くらひなく占めんき哉し此下ノ胡にあるべし
箋云女にそて云ありもかと以ん哥あより雨て云々し良は
見るの人の女りかりて源を見るそにそありて又源と女になりて
ことうれとの人あもあるし

此流あり六上の如くと　此源氏にお為の女そ上為の上をと云り
いそとも指示となり人きみのよし
おかしるの世しつけ　元来ゆ為陀し馬以ノ胡し
抄　秋の物て撰さらしへきんハうる元とし
やり其段又的要し　箋云元人と云害よる所を順ふ施手
とうみ人とも色去りしまて事二而に為を事をいふんや
一家の骨肉とあひらるもへきん百人の中に一人をえらしとを
又孔子之門徒三千人に出る七十二人此内よりまえらむに十人
とえらひて十哲と云其中に顔回を殊とさるに為るとは伴身
子の中にと十大弟子をあく之又舎利弗を身一とは必
人を排成るあし
おのこの大に在けに　おかしやけいは公庭し 細庭し　ヲツヤケトヨム
抄　此段的要し　此人そて世のうあるともう人まとてとうおもへ
ま人を可る元事し　式抄此段的要し男の宮仕へに此て世の事と論
箋云士者事し　漢志学以居位曰士　禮記云卿論季士臣二
卿大夫所考有花行道藝者

其乃ち先　箋云殷高宗之得傅説周文王得大公望之類也
まことのうつはもと　古実也出れけるためし
されとりしことて日をうつしして世中を度つつうち
花　天下の政をハ太政大臣とそ見をとりおこなひ百万機の政務かたりよ
しうて云れてを執て目ららしめしまうつこうちもるハ政務
とも曰也ちうつうらハ用らうことろうつころハおうとちハてとう云
ん成乃首也とうら度し
箋云孔子之門人之中にも　徳行にハ顔淵閔子騫冉伯牛仲弓
言語にハ宰我子貢　政事にハ冉有季路　文学にハ子游子夏
十哲の中にさん出らうしておつと無てうらいなし仏の十大弟子
智恵第一舎利弗　多聞第一迦葉　神通第一目連なうして
めうる仏うのことくそ及るよれ人をゑらひて在く織し
まるしててらをおこなひ人を度きおりや守ハ法令安猶るし
うとハ下にゐるそけられ　上合淳徳以遇其下々懐忠信以
支其上ハ史記　於河ようるし　同　適毛詩　亜を治めんと云の
せを先家のうられあるし

先家を治先家を治めんと思ハヽまつ身を治るへし
詩序に以一家之事懸一国之事と云り　毛傳曰詩云刑于寡妻至
于兄弟以御于家邦　詩大雅寡妻謂大姒也言文王之教自
近至遠也
花　天下ハ広しといへとも諸人力を合ておさむる時ハ中々やすき事也せんも
き家の上ら乃事ハおのし一人のちからひなれハゆるかにして
あるすならは也はあつしからうちる乃事をいろ　文曰
奴　はあつしハうしろさま人をま女あつし此事しうけ給ハりてハ家中ハ
治ううこれなの
箋云夫かたに第ちら及よ世そて家をとらて
とあまりたうらうをあのかさきうかさたに
旧古今　於人ハまつそこともいかうつうしはハあるいひきつひかのさきうさに
ハ它ゝ於にあのかさきうさとハ及ふろうし花ノ義語まり
顕脈の往まあのかさとハあへつき鳴もきうちさてハまさ白しとさ自ろり
まりをと云曰しとをろよ加ゝきうしあしといひたうゐまきうのて後とせ
文絶黄門をさ周ししせんとをうふあちうちへ於れちうのけ

ねへるにてとは且詞しさなりしと云ひてそれは人のこゝろさとし世中
にはことしまうたをあらは後撰並四季のうたに其さしあやいと云
へとも後ぬる人出る所なりけり　をも此詞に関しきれ
祇注云人すらは哥の心に物を作解せる所しさやうにしてよ哥
ひとかの人は哥のこゝろは人のやうにやさんとするは人のこゝろなりて
哥なりけるさかなさは従さる其言のやうれ事し只ことなり
なさ物にちる世の中にひしられと世れる人のこゝろはなしと云
へることわりしことをよしと云へはうしこゝろの事に引寄し
箋云つれなくと云ひさうしめてとかくてかくにはなしあれちるを
いふ哥なりの　花の詞おやゝまさる
なれゆんしまさる
是はこゝのうきに云ふてもこゝあしき
事のあしきものあまはは人のしれたものいふちしまるのあは
といなかさらにとしあそしこゝろ人に詠みそするれしさ人心も
なれ如好色るる人にて女をあまさことなつうらんと云ふそいな
それとも知して物人のあるまんお引しくは哥の字を文てか
をさしてもよ自然にあれ人の心にうつかやう　なかりゆゑにこそあ

なれは心をはなてるもえつゝりんなるゝは形ちしりなきやさしきまて
こゝのなりそあさるといつて
箋云なのあは針し一文字に直するは十分し虹殻に針なるは
十分にはあらされども大概にこゝろへてなり
なりしをも切ち云ふに　并　此詞はもとうしとる男なるべし
云ふにさるゝね女とも見えてゝ云ふ人に男の事と云ふ　如箋曰
祇注此詞男女ら人のこゝろは君臣朋友の中にても一切の詞し
ゆゑにあやうからぬ　正首　或抄　河　真　実なる男の事と云
されとなりつゝ　如何なりしやと云心なると但されとも誤切て何
こそ詞は云ふ事と見てこゝろと云し物人は女のなさをいつて
箋云されと何の句を切る此一句六字上ノ詞を改めて右件也
てらん人世すなるそいやきし　河ノ箋似し
私云されそなかなかなれ人は世にあるんと云し
世れをさ国を見れる人あけもさる
何りをよみし　箋云此句さうに記せるし
箋云世の中の清濁のましなきね境界なる世
をあんなりめてゝ人は畢竟世ならは心のさき事なきよし

式抄雅香祇の類し玉ふ定れ撰られ事々と伝へ世上を継ぎ凡
歌よみのつゝき事ハなきなし
思ふられうとなけりたちえらひ　香衣おほかれ人々の上を伝へて世
小野人丸女のなれ事とも申さんとそうし三乃深草少将なとまじし
西行法師の歌なりて　祇注是ハ香祇の家の見し事とも云し
西行法師ハ上臈ハよろしき歌をたしかにしるかへしなれ其歌
いせもきき義し翁いさ歌ハ西行のつき事なきりしめしてれ
人ハいかいつき歌かゝしに三事ありて女そなき花の心をしるさねすめ
あらたといひて心をよせて句を切くらへハ清ろぬ類し
私祇注は如何し程ある義に遠き
義云西行ハよそのあめかしに曲流本意類あり句も切上之ま
てしらへし五人ハ清らにしかる人をもお歌なからかね有りも西行ゑ
独し今香衣歌ハいかにそて世ずを広くもをし中にて四季女ハ
なきとし
私云式抄御説此類をあそばされしき宗牧ハ書つかハ
されし所月見ん本あて此類なしとそ

是式以彼家本校合仍るに此類の所多本にあり河内本と彼是
御当家代々の抄に祇注に此類なく内本ハ無之ハ青表紙に此類なし
と宗祇ノ家本にて此類ハさぞされとも今ハ只本よりかしとえ
かり侍りて後ハ是を代とくゝて入用新しれ
かくらきゝるけなくきゝやりなる類の抄のうちく
弄
一類し又此外あて可用なり　私同之
義云抄の本之類以て之此歌ハ名義の字お当まり加へらきる
なけれ事業人名あつひひて歌を定めつらぬ筆し
ちりを清らしと　祇注此歌の心ら塵もつゝしと歌を守る事し
みをりとをとしてえらむとしてと云ふ九六条九御祖流にまつ
見へしてえうとハ類とえらし彼九御是不其見ゆき上にま
ておかしけるし婦の歌とれとハ第一の歌と云彼し此歌也ん
つき也其一歌なれと云事くれぬものめにそこハそれに
られハこゝ是に似たらやられ事あるへし
私
塵もつゝしとハ歌をとりて清浄なる心也
義
塵をつゝしハ風流なりてまつるへしつれてと申人ハよろか

さりとて間にハさする事なきし表裏無別しきつかうて給ふに五つ又
一ニハ身行潔白清浄 一ニハ多意ノ心のまゝえんに 一ニハ思ふつまか
ねんに 一ニハこゝろめハみちをえんて深きにハつれ 一ニハ物いひつゝに
といされ事のたにいさいまうすとをもつし 皆是 慮偽ナクして実
なはあらぬ事をかしき内とまりつゝに あひちかく所を人
やうそとけてん心底をあさき御よこれ内りうさう第一の難し
日ごろ心ハ女宗の家の内ありさまし 亦さゆるまも此段の
会て無両の難し四よ風流の色なる人のこゝろてなれむる
ちかとしくら見るそて女のくれ要よわく浮き情のあらし 花ニ一
郎の事とし まうせとハよしとらぬやうにつまて 情そ
ついやうてみてあやまわり 但か此字あり
箋云 此一段一郎の身のさし まうせをハ数多の中よれを遁
秘よみをハ文つさなしとものゝなりとらこう第一てしそ 言ハ文
なとりうまていわかつうみたに行てあらんともれハまへ子
くまうせてたゆく出てあらそう所るに何ひらひて物を
おつさる御し文みかのるすれてさやうするとも こくやとまうすや

もくなくとか 孝悌無使之無為 私云 セン カタナキ心也
私云 箋ノ義妹よあけよりて釈せり 後さう説為奥ノ義 朱
点をくわへらまして 妹ノ義よハ朱点なし 後の義をとこの男の
おそうれなりやうとは下に好文なる女の人よ実するを
見せくあしき詞をもつかうの てくみきし志ふすやうなる
ありれ色いうふてせめ志て伸う入めつてる 振なる人のへり
とうよまてこれ 法白あるこめき 好文なる人の志を先
一番の難さ せんとしこうろうさい多ちめ道ハ末好の好文を何
らさして両徳なれなり
こうみに 箋云 ゐ中にし此段猶抄 語ありて
花云 てうなる難ある中にせん三目をあまくう此事よ
あれ給なうまし きん人めうしろうされうさいハ
箋云 なの他ハ鈍く鈍なりハなかあかりぬしなりあまも何
らぬハ西無事し 私云 是ハ馬ひなる凡の教あらぬ
身よれ書よ陰ん れうこうまをおきうせそて 郵しくあるすをと云ふ
箋ノ義うしうされうこいりとよめと 切是ハ家の中のまうするへ振

の書といふ人のこゝろ筆しきやうの人のおもての義知りかくしてとい
折花の花の葉の情ふとしるさ或いはふしかなれらいふへし所
あるはしやうの事ハ平生おもてもなる家書をみるハいつくさる箋
あれとも錦りに通暦なくらしうとつきりよくとちて実
のかよふもあしきとしきゝへと次ノ細よ一揆文いひ述てう
け箋箋ノ曰 詩抄不遠 仍不載之
箋云け限そもしもとありうけあるへくそ知るし

まことあめくし紀をちかきとてく　箋云み字ハ後見にハ
ある義ありぬしとふ細ありあそてみとなし
花
花ハまこと歯すてしき採んのこといつうなと知りてそれかの事
まはのとこれまろ人をひとて
みかさとうちふ　如　髪の後を身にかくむしとうは
ろいたみうたにまゝせて家多とおもしろひかしき補し
るなハゆひくて如の数なり
いさうおもた家ならし　いさう　げに字あまりさ　かゝろ於

箋云貪桐なるとしなりたハつけ字のし負れなとといふのかなさとを
事けもの細し　侘傺 タサイ 侘傺なるとしといふハ侘傺なるとし侘傺ハ失志貞
離騒上 恨鬱悒余侘傺兮吾獨窮困乎此時也
箋云如在ナキトモ云モ同之 私抄曰之
いさとうハ家童子しけてあそる書しけノ箋略之
うらとけあるくし後をつゝう
折花よつまくるる情もあつし只家中れとろまゝるあひいつく
新名いふくいつきり　我ゆれおもへなり
おかやけまるくしれ人のいさくしとひ　禁中以下私の称
舎まての人の妙通の称なとし
まさとうちまゝむもんやハ　かく人かくにまゝやうれ事とくるうゝハ
なきらね　なり
ちくてらん人なと　書通の事し
如
世間のうきとしもみさかてより何らても何のもろく家書よ
しそ語り合せんとひ示すてつゝてらいへ人かなしもれをとなし
なきしても何しくとし　字のまる後のきてしもさし

あはれなりける事也しく　凡公方事に付て家臣の道し
如　主人なとおもふ人のかれうたれうことをみ傍輩朋友なとに
は情を出しおきしなしにいろいろをもてなし
なはりまうせんと　　箋云うれしきの女ハ三昧法師
て人のそ恨をもまきまへぬなり
何すそ哥もなけれはさしかへし
箋云清はきまたる人の補しさしあつきは何し扇よりあつかさし
よりあはれ補しつきもちをもなきまる自し此段て取り拾ひ女にあはれ
あはれは何もなくいまき補し何ゆ自しきなきて云懸朝し開き
祇園此段るなかゆひかひかへ女は何なるしされは彼女は云あはれ
ちかきありしうを身をといひてうかひもちして哥をもしらぬ
りもし大臣はまにつけてもちとありうしきる事なり哥付句
き女なりかにいうひもをいひるきあまりに思ふおもひなしもう
きまつり情をひしあはれなきてうすんてうそれなきて見ひ
て終りまいひきるとみてをあはれともといあはれわかれ
なかりて述懐のあはれなりひしきやうに男のあはれみて女のへなき

大臣の事にそあはしなとよりて見ひ出て男とも思ひ
なともへき事なれとその哥をなそくそなしなくは何そなき
あはれしくいひくさしもかはらぬ補にて情あるへきなり
くち如しかくもね　　くちおしきし
身ひとつふこにめきそ　　箋云此一段ハ上ノ段のうしとそ
とは事後の事をうたた大やうなら人はらへきやうなうは一向し
何ぞ永しこめきは巨し大臣となれる臣御と云る太小ノ箋し
如　おかしき所はいし花子おさかなきしき補ゆともやまね
祇園花は所ん花にて所は所なれは所なるへしかれはやま
くなる情とえし紫上のあさきなひなきてもあるは...
又一段をうつしこめきは...
し女来よい雪の頃十四歩まてなるしにて...
りしう吉めやうにおさきまへんあるへうれ
男とそなしとも　　是は大臣も抱やうつる人を殺これ
てきんは今日れ申しね而なりとも...
し色ぬるより...

くるしむひてらんかしてハ　こゝあるか人をたえてハよりくれ
とも見らそふ雅ハよそてあるへきか見らいられていもやさしる
れそらいね事れあらんハ又くらをしりるへきをしるいらよ
き所にまろきことのましも見をいふか
箋云上件の段よ云ひころえて事論の取面いつまる人とに
云ひえらゝ中よりたところきて云事にさそていとふゆる事
あるまん人ハこゝ事ふかさそくまとらしむゝへきこと
かり思ふといふ　女の志いらすれるあられなれとし
人をも物といひつきてさほふいうらゝひろる事まてを
かれハ無もす不便なるまいかきかし　箋云
その人き事なきとや
或説とらや翻しりり偈こにの用之
彩くるりもん　箋云我ノ字ニ作無居なれ人のとれる
一しというし此能始ハ男子の都来者遠とるし
可きをもこうてもくさて　ものなるかゝらとかよれとハ
とれよ罰してそゝしゝしきハありまし　思れつまさんとい

くらかしきれたんの思まつるとうある人の下折乱れおそ人の心を
るとハうつりひれんそて人よ及さる事此を似し　気まハ数も虚
思うくあるくれるし　弄蛇箋云大円之　仍略之
祇須の事よあられてあるし他のようかるね事なとあり
く夜あるき為ひを　く夜なれとハいれ猛を戒とえひ猛を戒
りすく思とめくるしいふしさやうれ人のまさにめてくるし
うらゆ事ゝ　恩以の至あるに何とてあるへき事そするとあか
まつひあつ秘なるへし
いまかゝゆ志るふてよし　求とハ精好し
人ハ只んもけとかくれ千しまを見らとこれをまんし
手　三界唯心万法唯識之心し　源氏一部しれんこたよう
此詞一部之肝心也と花鳥にも在可孫し
秘　此詞一部之肝心なり　花鳥よさらそつか可秘
箋云一部之肝心此一句し　三界唯一心々外無別法三界唯
心万法唯識之心し人ある心性を談せてよんよれ人所はたよれ
白後れん一つまて事くあるれへしての上よ弥る人まて思宣をあらす八

せうあるゝ經何の本ふしとぞ見すそらひ人かとれ不足なれとも
日人の一門實にて所しくは自余は自然の座数なりとし
いとくち於しく猿ちけなかしき　河 佞人日本紀 佞 子イハ
諂(ヘツラフ)也し　折調する也　論語註云佞人口辯捷給數為民
所憎也　又云佞口也し　又云佞人假仁者之色行之則疑
花 口きゝかなしき　人を猿ちえ人と云のはもろきんをいふし
河 かしこ山のことはうしろの二おりてゐふくうにを猿ちまへ人これ
これてうしつたとうと云本し此本は紫の也不明にてあるを
ちうきへもとしられと二面と見しあらこ他へむきそくちの
いひもる人に似せるしこれを猿ちまへといふ
ものまあやうの人前りする　如 葵上紫上なと人のたくひて皆いぞ
姓人よし日まへ　まかと云同し その徐のことも云すし
わきうのゆへようしとは地まあやうに見前りする人のおもしき
あらんなとそとしてこそれのゆへてもてようし深きなう人のちんおて
へゐもんは句偏にまろらいはこの人もとうしとくれぬるを　書う
ちね所えるうんとも ありらうに趣にてしめ人へしとし

うしろ面もしれらけれきとかにのなさとまうと実し家何ふつよ
くはうれんの信を自然あつまてとたうるんとよゆやけ学
まは深まる義の義と同し　おのゆうしもてつけつつきと云
あうひのようよあしまう
義云三界六道之九生れあさきゆし生死の本まは老德これなし
品あまもようしといなそし　地獄餓鬼畜生天道　人あふりこし
境とをてにそそも本来具足の佛性は金剛の正体なれはさら
またいたれといへ高見し 他いくは他の一門をもちかはまえ
えんよ物ならして　数し又一種の性し
弄 夕白上の影しえんよはらくしくやさしきし
如 伊勢物語によくいなそもゆうそしれ云のさとよもていふ如此
うるこいのへきてるくとそ　如 論語云匿怨而友其人丘明
恥之丘亦恥之　見なまさもろき躰し日まては恨と深き心あん
とむへねあうまて憐愍もあるし
う人は里なくこ深不つうらう　河 むらさき紫のうへは里なき
うくにうそ物けうひさ深くといふなれ

を
あしねはふうきもちら人よそに道をまれ下はえならぬこれのこゝろを
今案見さかつて思ハいぶかしみぬれの事松のこゝろを
いふて露雪もとも紀ノ貫之に常よりたとへと云下の詞に見さか
よせて清ゑきとけふとてありてつたるねんし
箋云 こゝろハ不変し 操し
生得の不変易しいろもつけうねんし　私云 松のこゝろなといふハ
のそこハ変ぬに変もなくとら人そ こゝろかなる体をもするを
見さかつて内をなへし假りてこゝにもちゐたり
いかなる人にもおもひあまる　是も又人に一根をもかけたるに
哥の中ひとつにかなひあまりといふ
いかんかいふへきこゝろまてこの集
あまれなるうたをとよこまさま　此の心こしにそおもひそめれ
ぬ色その人をよわり見こし成り
これなる人まうしるみ　或説は随久邇にあすると云につきて
けふハ玉つの事とこそおやまりなりしこれも人慮り

らちひとりにれぬものに縁りつやられ事をおもとし
或抄に伊説に男子思ひまんとて髪のうらときりて独至
なともする やられ事し
ある紀山里によそられなり
たのみしともひやせんと云し　箋云は随伊勢物語にいそいる 女の影し
祇信は物語には夕皃上是にあられりこのすゝとよみ玉女
つまし事ハなまれと大かさの人ありそれよりて後のへし
あつかしと　よそれなりすとハ此世のあはれなるかなる人
ぬまれなるかなたちし 伊海類 又海濱海頭 伊勢物語古六名本
にいつに伊勢し時　馬次かまうしの時の事し
物くらりみつりと　物語字にかなうくと 女と帰[?]
なれの中のしかられ女の事なるを[?]ありと哀に[?]原
みをおもひて露をはへ帰りして実にしと云へハ[?]濃[?]
ちらひなる事とおもしくそそれてうるひハ又なるちもし
まして清のる小児りわかるのし下にて地羽にもてをかり
をも思はてりちらせをまんとしてさうし

人さしあふかりなん　是ハ女より思ひし深き男に
深き事　此男の女をころしつる紀事の不便し
人の心を　女なれと深くおもひこそハ知りかねこらし
らぬ身なれをころしつるをとくとめてみけるれて見き
し深き男なれハおもひまさりやんともちさすくハ真実な
独ぬ人とも深くに思ふらんと見るし
なりし女のおもひ　是ハさやうなる人きたに男なりと思ひ
きるなとまれハ女の後悔有来て此思ひまさし是なきき女の性し
宇多院伊勢物語の女の事なとおもひてと得し女の事と念し
心あらしやすと　右是れを君をかきの後にあるしはなき
めとこ川のあまとかふき
人見ぬ女のとうきめところれと頼し女の歎し
あそれはかなみ申さハ　人をおもふぬ一念にちゆくと見なと
ともかさし人深き人の常にある事し
おもひ身川なりは　此きりし思深しくおもひ立し必ず来と
まぬ時のくせし思ひあるやらしまつる事なし

くる見えくくも　女よ御かりかつのとみえくくてなれし
いくあふかな　知是ハおもひしまるへのきとうふひて此女よ
いふも葉なり
ひとしこよらしとをしおもひなされぬ男
此女の心よ一向よらしともおもはぬ男し前よゐるやうよ女を深く
思ふ男なきをしのつうさとうちてんさん身も行てうれきく
かりしその男の女の忘よかりくと聞て深仲られし
つかへあり　こうらり　つかへハ何よそも此女のつかへしん
こうらハ後生と女の思ひなし年よりたるよか女房ちかくの男なりた
と申り居かたる男の御心のはハ男の心を今をかりて去らひ
ほの物を棚もあらる浅もと捨る鏡たりとしるめしく世よをそ
むき身にむべ来て男の心をもと女房よ作りきらしと此女も
おこうらしとをおもひそれハ桃花なり知られて後悔れ
白来くらし後しられ事河よくもし
うらひく知りくと　見れよある女の独し物をハ薄見て
数をなしひ鳴食なるのやうにてさき人身しさするよりて

額髪をいさゝかとあへなくはれて接物におもてあらし
うちかへてもあり　箋潛　額早し
(注)イタヘキヒソム
額戚足　文選　八字云もし事ありかけ申す術し
箋云額早ハ眉戚足し　平則匂し　潛ハ濟流貟　詩潛然出涕　去竜又陵下貟
易乾卦云初九潛龍　潛隱し　潛昨塩切　説文　渉水也又水伏流也
一日蔵也　揚子類子　潛心　仲尼竟潛
乾卦云魚潛干渕　詩云潛然し　箋云潛陵下し潛ハ蔵し
字相類をもていへとも各かし　下にきこえて身へ下る此
陵ハいまさくさかれまへ面とうけ事し

思ひまきて　操思にもれもしらひそをひかくとま
きりいしあてもれとも陵のこかりし
おりくこゝにえ称んしえ侍　これの前に分りる世の趣
ひともなりとこいふ事し
かしこ事か中く
かしとい人も　此女ありあかんの給ふるにやる　箋云一日一夜のあ象のくるしもつう

中くノ字よく服とつて通し
かくるにありあ得より　祇須此川奇
蓮葉のかくるにありぬのそあらふ賓をあてあましく
此奇あひ申すとも見とぬとあそ根の節かし申さんは蓮葉
此申川かくりにそへてありも事のあのし尾に入る地ハかこ
のかにあ申ね尾るあれとも人ハかくりにえさる地に物へりの
人ハ蓮のかくりにあるよりをなるかひなりくきの
されてあしき方みも申しよひめくしといて
如
此川奇初もりをとるし　思そちらきしいふんそうまき世にそ絶ハ
蓮の淤泥よまりて陽に申すねとをや世を一変されてえ偏
思わりハ受てり陽よ寄るさ侍し
箋云不染世間法如蓮花在水し何と露をあとわさし此本
寺思姿の人ハ本もに淤泥よそこるかて抑をおり趣尾の後園しとし
和しねまへ世何さりとて　祇須是と同し女の事といふり
或ハ尾よかとえ尾よあさてとりかへしても皆よまれ　かゝる事ハ

おかしき事しさうたよりこれ詞よと何ともなかりとよらん刻を
と見るもしらぬ中にてなかなか哀なるめでたかるし
尼うりもなさそて取りうかうんをやりてあひそひく
此段絶ぬに取りうかうんもやりてそのあひうかめしきは
あり乃まんやありくもよくてもあひそひくかの此あるうち家の
本此集に見るうかうかの詞あしされとても此詞を尼に書きて給
とうかうとも一とひそしきありうつと云ひおもうろめしと云ふ
日れあうてはありしとて云ふ事し
師も人もうしろめたくのつとうきしやは　祇注さうのこゝろたく
あひそひくるもさやうなるまん女そうしろめたくて日くとよれ
ぬすみ出でまして此んと見も伊勢物語に業平を捨ておき
女の文にひかしみかしとてらさかりしくおかしくて業平に
あるんと云ふ日れうらんにありしより守にありてあしきと
よろしや其部しそへて紫式部をさつまんとみゆるう　肖聞
義云彼のねさうせあさりてそ尼まもあすさて取りうかうん
とやうてあひそひく家もんへうし給めらく日おくきしや

いとあはれなりけるとききりらんきさうみとも見るところ中にそ其
ことりくあはれなりけめ　義云此段新書主見一作ノ文様し
肖柏大臣御講尺の本ありてへとハ嫁来れとうしもへし詠るを一旦
れはきとそりまそ日のさうしまうねへはたとへそうひおきさせ
むそいかにも業平のおりく家日と云ふあなてもみいつまに此明る歌
そしりんと云ふりくるらん偏に乃人きれみし
又なのめしらつろふうさわるまん人とは
祇注此段は日さしすくとこしらたにしてそしきうらしろき
とそうきはみおとこあはれへまそうつろうんへとわるしやうは恨を
そしるは男はおとうきしくと云ふ事されは男のこのけるあと
あまりなかし様もちうありとそるて講尺もへきみれんし
女
あのめかうつろぬはなるとさうらけろかし
義云日おさ女うさら今日捨るへき義と云上ノ段ハ人のさし在男
よりてこそひあひきてとしもう　在此段は夫の日さしや
く妻をうけれさにのやうにまうれきうあすうく見んと尼
なうにあるまん今のあはまん時のおとこにまれかやしとこひ給

ふゆのよへしとまり時は男上にゐてふしつれはゐよなるへしさ
れは服あまり引かるとも見えすしねさめしてさむかりけるか
て袷かさねてもねられぬへしとし
かはらのふとろとも見えすめり　さやうならんにはかなき
にとは男の身のなのあはれけるほとにふとさしていて男のかは
のうらうふるほとも女のうへにまり見えわかぬさめまてはさへは
されうまれとことを見えあけゆくとてもわくらてすゑの十ふ
かし江市しともそのまゝ色さんとし
きつくまつりの事　散してと云つし　又早き心し
紙注も入てと云はおのれあまるはぬるともいてわかまよふらへ
まやうとりけるし此段の後へぬは寒上なしの新し
寿 上つ見の様し寒上の新し　箋云此上を一文まつ羽し
ゑんもへき　騒し　ここに云しものにもることそとと
きつらしうみのまいろうとこ旅
箋云匿怨友其人左丘明恥之丘亦恥之
うらしんうらん　箋云是は恨のうらみし深きうらみに用ゐたる　此語ヲ引ケリ

みつからはのよその鳥　箋云みつからの羽奇特し　侵顔不諫し
箋云此段は寒上に高まり但若華表に世上宮の吹すは一云し服ねを
おりふは思ふ心よりも見る人かる　松松見る人とは女の事し男の
ゆる女のおさめやうに深うぬへしとし
あまりもわけよらうゆく　ゑんもへき事などもらうとの
おかのはゆうかは心うさへらうゆきやうかれと御は男とあ
と云ふねは似なれは市しうろきうたにおかゆきとしつ底へ居
おうね身のうき心ゆうにきたとへきなるとし
祇注是又女の物えんしきを見男の心に恨むせられん只男
とふつねそ何かうしとうきうたてぞれ何かしいうらし下の詞
まつかりね身のうきへゆうなりしとは身は浪のよ里なとゆん二
そなたるうれあれへつれし事するれは身のあるかやうれよ心との
のなりね身のうき心やうなし
○観身岸額離根草　論命江頭不繋舟
古人釈一同に此詩を我作の難え其人自ら結と為逢もるし
詩者以見無常に身を入しうり自結には深誠のんし文選云浮平

若不繋舟 六臣注云 又賈誼鵩鳥之賦云野鳥入室主人将去請
問子服曰去何之 此ノ心也 即以鵩見勘得之潜通作者之
意趣皆自愛云々 九禅抄云文選第十三 大臣注云 賈誼鵩
鳥 澹乎若深淵之静 泛乎若不繋舟 注云深淵無波
教舟任運 真人用心不搖動無趣向 亦似之也 同注云鵩
屈子曰泛乎若不繋舟 鵩鵟ハ鳥甲也 奥入以下仍
ヨリつゝみさなりかなと云詩を引ケり 河ニ始テ泛乎若不繋之舟
此句ヲ川リ其後一同ニ此句ヲ用ル也

如 女の縁り男をさりしゆかむにはなれまじき千里万里の波上にうか
ふ舟とも いかにかの纜(トヒツナ)をとゞめて行なきことゝ てにに男の身を女
の身をもつれなきにもしへきし 窂云 女の身を舟の縹
よりさへも嫉妬なきにつれなきもあらす
私云 見ぬ人の家の内にもいたさぬもひとめをも前にいふなるへし

中将うなつく 乃中将也
旧 點頭(ウナヅク) 或 頷状 漢書 頷許 淮南子 頷許 游仙窟
花 第六段しかれとも中将の歌の縁にまとはす神也

さしはへてありしともあはれなれとも 私 第六段也
故中将詞也 花に云る夜の何とぞいふありやまほり男のへにまうて
従あまりともいふ女もなかりけれ 朧月夜の歎也
祇注 朧月夜の言にありまほり似ぬ事のかりそめにあらぬ人
よその事なれどもおぼえにしあはれ 朧月夜の歎也とぞ
つきぬ女の胡に似て これは男の事のしけなきゆえ事とみえたる
或抄作説に是を花る 第七段なる夜の胡とみせかる是は故中将の胡也
又男の事とぞ是まめる女なりけり 同頃注にあそれぞもせめん
女のさせる事はもなき折にひなしてあしきの事揺
おもはん事なかりけれ男のあやまりなりといへる説
てとかんとおもひてもかくし女のいはさもあらしとはみえや
我か思ふやまちなりてもしさは 男の思ふにあやまちなりて
私の思ふにもおもひさりてこそ不信此段男女ともに心頭にいふへきにや
祇注此は身の人はまかりしとも其かへりの人のいふへきまはる
きゝとおもやまちのなる恨也 てそれをとりてたに絶へてはいかにかへらう
まことはまことを飾るかたの如くにまことあらはれぬ家のあやまちなりて

見も色さハ母をひてさん根をみてもなさハ忍ひなくしてさん〳〵の心
それさしをあらし　心不佣ふしてあくるか女ハさしとあらし
とゐし　下ノ詞よとかくをめのへきうしはかんとのとやうなれ
思つんより向を事ゆゑしの給ひて妹の葵上をかあ見えし
さかくをし母よへき婦しあらんとのとんた見らしれらん
む　是ハ女の男のをうひしるをみゑと服之えんをろしてを思ひを[illegible]
葵上の母しけられは叶ひ侍るハ中将の君我か妹の姫君ハこれさ
めふりさひ給へりと思へとし紫上ハえんもくきまでハ見給へ
さ向よりひあなをも男の仰まてゝあさましやうし是を女の本極よ
まへしこを次をみうる婦しあまとも見とやうふこゝ思ひてるし
くもうあらえんみのをもねし是ハ上臈のまてこしきく思め
中よへし紫上と葵上ことを女の本極ふてなかるらのし
評　早売の理しとりかくをいふよう趣きてれ批判と見ちへきうや
是ハ女の男乃さうひめを服之えんをみて見思ふをゐし
家ハいかしらの姫君を此さるめふかきひのへりなを
葵上の仰しけ是よ叶ひ侍るハ中将君家の妹らの姫君を

河　むら　ひらう

叶さらあめりけひのつりとみへるし
評　此さうと給らう叶ひのへつとハ早売ん不定の事ましや
加　とも妙くをし家まて思を次へして〳〵事詞し
箋云此段右の子の事也なり
見のらう給ふつて　私　葉の〳〵源氏を妙く忍ひのふれとし
或抄源氏の御事ある此段より葉上なるすへをかたのへしと
次中将のよひあかすくへし
是ハ葵上を論のように候とあかせハ源ハ詞と中せ給ハぬし
私云次中将の母ハ葵上の母よりと候をとえハ源氏をさや
小なあかんり詞をもませ給ハぬを源の父母何を給や云つてを
ヨまて此段あきかんとゐひて〳〵りて〳〵て給ふこと
るは抱さゝ給の〳〵をかなりてひらきあらう
河　物定の將士此名同見例来動得似今物之会之判者同事し
軒粒　日本紀　京極の枕詞　北一位庫子　自筆本にいらのつうと
みちつうハの此をたへき一説云暗のうちもとりのうつ附加ぐり
て羽をとうをうつうしとて又云ゆらきあつうりとて本は

日々にとりて鴨のさへつり啼あしと悦ぶはかなしき啼し
を　一切のことなりしと云事なりされは以てすへてなり
博士ハ転変の士と云なし
如　ることは博士し　集賢学士名也　注云掌通古今
古今をひろく通ぜる士と云なり　知るきハ多く羽
とはくきもろてくに於ることも術なり　弄筆日と
此てこりひとなりんと　以中抑の内はまて関わりんとあひともも
弄　あひらひ居もて以上一日の徳と　論人ハ一日の分としと
よろつのことによりてくらおかせ
或おかせとハおきよるそくへて作おおはまてしかなり
も　両夾の用語妹ハ女の名のこと書のうちしまとありともく
もまうのたにのまあり　此段より入文書の名條ほかに書此ミ
の藝によくへくんの誠を偽りすりなとまて山下の條にハ多
姉の事也記さもしやすんとて名をもしまりく事まくと
多りひに語りあるを世間三段に書わりの細のつきミ行に
法花経の三周説法のとくとをまつミ周とハ法花一周喩説
一周因縁説一周法説一周ハ方便品し此品ハ直に妙法の名理を説
まふて上根の舎利弗に聞して心にさとりを法花とし云
次に喩説一周譬喩品し此品の始まハ法花説の述成授記なり
とされも舎利弗に聞して説法しての法の條なり三車一門
のたとへとまうて之葉経に一乗に論ともる趣旨を素にて中根の
頭因須菩提加旃延加葉目蓮にかうもしむし信解品薬草喩
品まてに喩説の述成授記し次に因縁説一周ハ化城喩品し此品ハ
已去久遠却に大通智勝佛と云如来の法花を説のこともすへの
中此退屈の心ひとおしてい小乗を修行せしはゝ今の衆生の説法を
しめて四仏向大の都関となれる因縁を説て下根の子二百人に
次第に授化し法ふりの法理を直によくとまとへとりて以らせ
色かしりての因縁を説とせたる因の心まゝこゝ今の相伝の化りにはよ
説　おほかろし世俗の文字の業狂言綺語の誤りとあるくためてと
佛事の因縁転法輪の縁とせる同し下ノ到に申ありいこうし奥
て法の深の世のてとりかとまゝせん玉の内りと云此理をえて去る妙
常との段の心ことさしむしまてしひのてまてえしうりゆへくよう

てらこ木道論示す絵のことをきし美のうを源氏君中将の君子知
らせんためし此道みて又あはれ也まれて知るそてハうすゝ子ましきゆし
みよう川のうらは一切の事のうちぬ家川し
本の名のゑし三云　少中云大工かしたいあって木の道とを
ある人みなおなうやるれあらしゑるろ工ことおるあらしとそう
れ云唯に何をてりまんとは木うさて作り出さてあをといふへし
さ匠の下にけをもちくへきし

曰
良匠如削木　帝範
箋云帝範云明王之任人如巧匠之制木直者以為轅曲者以為輪長者為棟押短者為拱桷无曲直
長短各有所施明王之任人亦猶如是故良匠无棄士不以一
惡忘其善勿以小瑕掩其功

よろ川のあやと　是ハ木道のうらへの美のあし
その物を海色ささまうぬ　是ハうきんしにむろあきハ宮れ
ゐ紙なれある何しをもろしとされハ志能とし
それつきされををゑゆるも　側付兎角をるとしゆうきらぬ徳し

宿　日本紀　宿老月　宿雪　宿月也　集之凡彼ハ此道之事也命の名
ゑまとい成てらしかゝね緒なり　後執に伝す俳諧方ととされ尔の
とかうされをしゑ川まじきるきゑなり　下畧て
或佛説ニもされはとは左の礼と云思しりそあまあらぬ其
なら祭をいつへしれ極定らぬあそうえゆらしてる名そう
こなるたこしら人ゑをうて成てしにつけさ川為てしとめう
さうやうなる事色ろうしを付くやうかうかいはあらしきる
めれうつるし是をさ我川の人へなそのらへ手ゑらへくう
躬棄周鼎宝康瓠　弔屈原賦　賈誼
大事をして成てるた　和　是ハ人のなぞゑいはなう人よ人を事と
へるしそれハされをとおてきなる人へハなるゆましきし世はなほ通
祇頭る川しき人のてうとのりきをハ人の家あうらしいそる
勿き女れうゝす　ゑろ人いうて
む
さるこゆうれ君やうみそうふくれのこもこやうれそ
花よるにくれのこえこやれあるとハ倜儻ハあうれ蚕の花葉の花と見を
私云綱夜れ中にて定まるに屈するをあると疑ひもなる
よ

上手ハ一の上に別にあるへし

河 ゆかりつきまハ更難し

ゑところ 絵所あり　是より絵の事をいへていふへし

花 西宮云画所在式乾門内東腋御書所南有別当五位蔵人預

あまたありえらひえられて　河 下絵など先墨にて書て其上に色とる

なりし 物をよくよく見ていかにもめつらしくかきたるを次の事し

一流に墨絵の事し多分に絵まことしきにあつらへてもすへし

墨絵をも上手にていふときへぬし

平 墨絵を下絵の事し人のさいしきとは絵そてまはつかの絵

いはゆる中にも下絵かたまなるといひかたきは唐絵と墨絵

に筆勢いとりかたし　一説

秘 彩色いまた見し事を墨絵にて大事し　祇 同じ

人の見およはぬ蓬莱の山

あらうみのいかれるうをのすかたからくにのはけしきけたものゝ

河 韓子云客為斉王画者問之対曰狗馬最難鬼魅最易狗馬人

所知也旦暮罄於前不可類之故鬼魅無形者不可覩故易

文選云画鬼魅易成好画狗馬難為好　三都賦注

秘 後漢書云張衡伝画工悪図犬馬而好作鬼魅誠以実事難形

而虚偽不窮也云々　箋ノ義同之

祇注 此絵のさまさまの物をもかける女まてをかしう

書もの似さる絵にもさもありぬへし　是まても此絵の事を云

いつもこれ熟なる物のかたちハ実に似せても筆のいきおひ

なとさまてみえへく 目おとろかしきものハたとひ

めつらしき女なとの書実にたかへはいかに見所なく見わる

よのつねの山のたゝすまひみつのなかれ

前に引て詩をいへる多くの絵そらことのある所にも上

手はことさらめて見えし いかにも此人のあまりあはれにて

近き人の家ゐまてなつかしく見ゆるさまけにといふへし

すくよかならぬ　河 傔スクヤカ　すくよかならぬ山のけしき

絵のあしくそれはまつきていて

或抄云すくよかなる山とハ険山の堅気しきをいふなるへし

とかく何も俳連てもよのつねの山のこゝろも有ひていふてまこと
よろつのぬと見えたり　夜はあるさ山なるへきれたる絵は
は山の姿なるへしゆかしき大事也
私云すしよりハつきぬなるへしもとしよりけれとハ夜の
羽まやいくひとり有をとうきゆかしてあさきのれ
呉融畫山水歌　良工善得丹青理、輙向茅茨畫山水、地角移
来方寸間、天涯寫在筆鋒裏、日不落兮月長生、雲片片兮木冷
冷、経蔵胡蝶飛不去、累蔵桃花落不成、一片石、數株松、遠又
淡、近又濃、不出門庭三五歩、観尽江山千万里
よまれてあるへくこそあれし　雅兼ニ記云天永元年十二月九
一日仰邑房しきまいりて云絵師　金岡子云望也　云望
子深江しりう子廣高し云望云忠上手と深江ハ廣高よりハその
名をえたるたかりの時屏風とうの人まて深江見と見て廣
高とむてをしらしむ廣高ハ名者し深江か云様ハ此時にも安
如くいまてん中に廣高のあけりと云又此屏風淡又及へしや廣
高よく見たく又叶りしれよし　と申深江か云是ハ云忠か絵也彼

人屏風の絵をとりてこれに是てものうるは着のちからはりて見を
見るに其名のうらの時の人深江そよくは此道を知りけれとは
金岡ハ山をうつしもつ十五重廣高ハ五重し
今案墨の濃淡をもて其山をあらはしたる
全岡　云望　云忠　深江　廣高
宿にうつまゐりたる　※前我をとりて
そのみまうして　日　我をとりうまうしかをいへのとし
※因つひたり　年　月　是ハ人なれ有感のおほき人の相し
或折ふしまうしひを見てもと云字をはと云字にうら読み能し変と
しもいつもし
是絵まのそ　　かまをいひつるり
もとうきあまうて　※是よりまの絵をいって
あまりはなくてし云上果なりけるを此時の様なりける見を
見る宗はさまの人にて宝にもたを云してんすもしの宇
なといはせあゆきさあの神し是も前の絵不思あまり人と自

賀しきたまへるにハ多少ね事をつくろいてる神し
粧まてハ筆ともつ夜やうにいまたきうかハうち人の筆まして
むきゆふハ物かゝりなりし
如問筆法於柳公權云心正則筆正筆正乃可法　是ハ筆法のこ
とを問ひし時の返事なりしに答へしを云り是を筆陳と云
少史に打成實方と同時に藤原上人とてありし時藤原上人にて口論し
時實方短氣の人にてやありけん行成の冠を笏にてうちおとさ
れ給ひしに行成少しも騒がずして正しく立直り袖の紀あらため
實方に向ひて是ハいかなる乱罷にそやと問はれけれハ
返答もなく逃さりぬと御門御覧ありて行成に感じ給ひ
三度與列の者抜けれバとて實方を陸奥へ流されけるとぞ
ほぼまて遊去をとられ行成にて筆法の妹果として家
卿の御受けの名ハ皮筆流なりけり　官大納言
よの物かはり三蹟人のとりて一条院御代四納言の一人し
後賢　行成　公任　此四人ハいつれも皆書道職務達の人
りとおぼえ又大納言しも名ハ業にしるとしても小川ケり

今てひろうありつくられたなかへ少なんのかりなれ
亭名をかれてみしかしき様ならしなめありなかいらんとも
とうなりて見のありうきさいんの卒のすの先へ遊ぶある
お前の聖の思ひてあるとおもしやすきちあるまうかのこる
の奇と思ひあつ後の聖の道のにかねまちいまやむらん
のの月の狗と云ふとさる玄しくせよ婦をまうかの聖
でのおいまうなる様すりしとくゆかひて吸しゝ今にてきれいまう
のの云ハ少まあのしなりとなん何の名かすりやりとつたへし
峯牀吐ひまう萬も月を　　　私云此書ハ名繪も絲の言なり
車の角も人へとうとていうるは花の何ゝ誰かうるね
　　花
まの名繪ホ久書ホいたるなきなしされ
角不實うりよ重ういるんやへの行やと言ふし
紙漉の古人を云ふ事るハう源氏卿世ありの女のまさ
とうまるうかひとおをまうきまれとをまうとし見かう
おもしもせハ真ろまのてとつうとそうせなけいれやと出てて多く
くりていろし是のうへ女の事をもてのよ其の源氏君み

中納言ハ世をまつりごちぬべき君達なれハ世の人まで世ある人
ならぬをえらびてまつりごちし　白氏文集云大行路註
借夫婦以諷君臣不終也といへり　弄曰之
中書王は仕へし人のつらからぬ事ハあさき事と云し
そのかみの事　是法花三周因縁を説し
弄　前よりあしくまじりしといはるゝ事ハ今の身とて神かけ男にもとを
大事にもあらず物語し馬以て翻しつゝ候これハ斗と
宇治物語あらゆるちらしちかひなり
君をしめさむ　源氏　君ハうち猶かくてとを
まゐらしくれんとて　以中将ハくらしめつゝ　一段申して入て
あはしらむかしとおもはれけり
法につえ　河　吟苦支頤暁燭前　白氏文集
法の師の世のことわり　弄　花鳥に法花三周説法の事見えたり
源氏君を世をまつりごちぬべき人とさしあれハ世上の君要
なれとくるしき事かも也なり人きく事あるに称と仰らし
弄　因てうに説法の初めて法をかへしし花鳥に三周説法の称あり
白楽天てけふ定まる出口まで云中にてかへしハ玉曲しみ寄年給ふ
今すハ弟ありしこの今も初めあらしく世のおほくへ人の上まで
初めのことにし此物語をとらえたハ源氏の時代より初めとへきし
けふの今の世よ今ていれハ雁延の頃る出りつゝし安定の所立
との事とし見えゝそハれ骨を捨て業平の事にもきゝの本の御事より
とをくとよるまて時の時とあひてしめしを中さハれとて見れ
法をとろよその時かりもとをおきまして見ゆへしとし
もの也て　河　親言也
ちかりしまゝし下らうに仰し　花鳥の説るところ翻し
河　ちやうつきて法花に云翻しとかへしの事ことに今がたまで
またそ仰らるゝものとかく
弄　弟云同時ほとさし下の膓なりし時ハよし又因縁説の略と見えとの不膓
と云し
馬以て見えし事とつくる　なり
あられとたの人　ゆびくらし　世の事と云し
中のしまかセつうやうふ
むとまかれり　弟云前り　あさうの見の家にて云其意の事と云し
或抄ま志直　カ

一 にほ 丹穂 万葉にまかりといふうたにしきしまかなるへつゝかゝりけるなし
私云 丹の丹穂と云正称にもきよら穂しるかといふ名の
ちらうひまつ附上風すゝね丹穂を引ゆし
箋云 中あらしよしなくともよし中義応三ニ詩聖門跣女夢
それをも丹のゝすれしてもとも茄のまなかるなのをとらに
是ハまあそのんかに用ゆし
万ニ人丸 あるちやなかの丹のかほすこて丹のまかすて妹にあをこゝしゅうを
是ハ丹穂と仰ても丹をもと謹し かをおとて候す
家宗 一丹人とまけかのうちれ又なかれに中ゝやりしかの男もこうれ
かうれかうれむさき日記 私 丹実の本意とハ云ゝゆうしつゝ
されまもよう人とはこひし
とあらにもこひ 右うたは日ゝは人をも恋しゝ婚源の書とて云ゝらし
さうしきこて 寐寛 サウサウニ カヒシキし 閑日 何ともさひしきし
箋云 此約常にさひしきし宴ハ此女をとゆくうひこつし
同書云 此女のうちきかのよろしね恋にはひんへつゝうさとかきもはぬ
まんともらいんかなるし きかしき日よりゆるし

とく日きれ 日よりゝねかにおもはされて御ことも此女の出ぬるねの出し
私云ん しかと 此女の物語るに事ある見むしかり
うつきなく 閑情 姓他家
人にも合姓女の御も嫉妬深きハ男の人つきなく思ひきはし
おいつゝ恋しきうハ 弁 おいつゝハおもふまさし又御しまし
箋云 なにとつゝ同じ心の
文書云ふ やうすゝいそ云んし
うらひ給しをもうかきくて 男の口に此人を以て先出つねの人のや
うちに嫉妬すと深くハいよいよこひうしむ日ておくそも是皆人の数
日とかくかすゝれ男と 就うとて是のかなれもの人の思ひ
うくかんすゝぬ男といふそん 私云此川寿に不及
私 いまさ恋も深くて年ともとろき男とハ何とて是かなそてハさ
れそてつゝゆかしきゝハまなかそとし
ちわんにハにきあらつて 私 よそうにおめつゝ日にたさもうるとし
此女のあかや 箋云こんなり 此女の本性をいふて
ありひいつゝさうかなる 日の段いね事まんて日に付るし

これ人のうへ　此人をいふは我れあしといふことを女の心にて
我か此人とハ馬にし女にかゝりて見れと我を此人といひて頼ふ
されはたゝもちれ　我か身をしれよりやすからぬ身を頼ふ
なしからそへる我の為を云ひし云ひかけつとかゝる人ね
を頼ふ身しなむいはし　勵(ハゲマス)し
とにかくにつけて　免角何事に付ても我の為を云ひし後
見るといへる我の賢妻はやゝやの事につまそても實に家の主入家し
もし然かること　もしかんからすることし
もしめつといふなかりきこゆなれ也れ事し
寺
さしつかへし一度もしめるくとハ聞し又は遣しこれ家つ
弐抄語とそえすむとよめうたにそのひゆきといへハもしめ
け了牧也書にしもしめるか奇妬の嫉妬の方はもしめる
御説にもしもめるとハきこゆるひとしもかるはもしみるにくら
私云一本もしめかくとみてしもしやハ一本とあり上事か
もしめつしと或り此書にハあまりに男を云ふ目也
ひてうとしてもし給ふを用へし

さらにたなひきてあしひゆき　第云善悪の筆一方偏によらてあそて也
此四は語源の田源きりしありてあそるの第しやゝやうた語ひ
寺
此女の為の事なりひし　花為ニハ女はなひくしに次の詞に会ていふ
語抄花の義あやめ行うとて
見えてきこゆらりとも　此女のまれとこゝちと早也して此人
女とハみてる語しといふと同しと語ふらくらやそもて語ひ給
実で家うし語れることもやれつくろうてもはよって
てをおとこゝを大切にする也し
うとき人は見えたん　何 かへ人不覚々庭實(ウトキヒトタニハ)　白氏文集
見えてる我の本書といはれて他人みてもなをさらに見えてくる
しかみそといふくともよくて語いくみるし抄へき日物し
みなてあやそいかをよこにたして係よい勤し
我のいさんとつゝり　馬我の初よりしにやみの聞んとも
たゝかくし見んさかみといへとりくしはくるりしきと云
常に信はつひせしこし
日も字ららふ　性しうし　字しうなれいよ起し

われさかんにも　嫉妬のこゝろ　如円之
ことさらハつれなさめんなる故へすへしとし　此女何事もなる故ハ何事もなるか嫉妬の
柴のうへ思ひ侍りや　なる故の前後をたてやうやうきこえて
下臈よ侍り時も同すし今なれハかれなれとあらんまへのあかし
まつりまし此の事すれハ家の挨拶をふ別かしあるとし
からあるから　此女何事も何でもなる故よきさひ源切子之ふ
今の時ハ何もそして左からんの事たとして指をして嫉妬の
私 大事なる故り日ノ事ふそして思ひまも　事もやめんとゆるを制しうるし
方ものかゝと言う所も見らるゝ事をやめんとあるを制し
とゆ思ひとなれまたなき性ともぬよりのかれハかねしてらん所
由てにしすゝ思ひて見るねつきましきすハ　句さ
義云此女嫉妬の前後して女の何のまゝるきれ侍て退屈の
まるさせハ女のみとあのあゝめて嫉妬のものもに家にさる
ゝるし年来家事よりへよもはかめる此ほ事もとし
ゝゝしき言ても心のふかしいつはりし

かたらひ家によもさいのはすハさひかるさきありんとふかへつゝ
義云よりつゝてこゝれ侍りて家り其をふ心志実なつ心し嫉妬
の先の事　平生ハ大かたハ口まよ心きぬる事なれかし
ことさらになさけなくつれなきさまを見せて　又侍らハつさとし
例の腹をとゝわ事し
あいのをゝゝからゑんしゝる　例のことに左馬頭の性なき袮
とゝせうれハあいめてしゝ女のいつりめてゝ腹ゝらゑんしゝるし
かくおそましくは　何故ソヽと　文選
む おそくさまいし
私 さる故鋭し女の鬼てしをそきしきし　弄同之
なもてきさ見んし　句ゝ切　弄 又ちくそ物称ことをつく
やなく後てきしとことさ見えまてことし
かきりと思つ　前まれひてぬおそましくハ又あき見しま
きれたにそを限り思ひつ嫉妬ともせすして左故の前のゝあく
ゝしてゝ御よ後のたきおもなかつくハてにそ女事事ていひなし
りさ見ゝゝ見ゑんと思つ　私 かきりと思つて嫉妬ともせよ紙

ハ中々人頼みにくるしかるべし又此まゝにひさうしんとおもへば此人
をやめておもてむきのつきあひも猶捨置てなをざりにも
みえて後のうらみのおこれるのみたちもせずして一段大切にあるべしと也
人のやうにもてなすべき也　此段の私ヶ異をなして立身出世とのぞまし
まもるべし人のやく　嫉妬の心のいさかひなきやうにいさめ此段も割りすべし何
ひとつにてもうらみて人をかまへ宮仕へもうとんじと見まかしくして
その時の御心をかるかなる書なれはあまつかへあしくとし
かしこくして人のつかふる　此段の心は物いひひとつにもつゝしむべし
箋　云此ふの斗墨を多く人にかゝりと自傳の中にあるをよくみるべきなり
私云此女の心のいましめにきはめおきてひさしき事をいひきかせて嫉
妬をなさせんとのことし是も人の言つかひは人の心のいたづら
を智恵をつくし是此女の教へきなき事なれをいひきかせし
のとかにやすらに智恵を得ること　うしろうへはまれなくいひき
かるくうしろく自傳し小ノ字法度をもし
花をみこゝろしらで是れ多くつゝまでも猶に是れ多くあるハこゝろし
らへ人のかゝりなしとき　　第二とし人のつかひて可用之
まれ多くきまし　家此事とばかり多くをえらひて錢つかひにいうて
いひそらしハ何に言殺しいひころを殺し　詩に着殺（ちやくさつ）慙殺（シンサツ）なりと
あまり御ぶつ御信し多くの事
異　つゝしみのなり
またうちまちひて　箋云女の勤顚かるさ神にる此無て正す也にある
私云是ハ右の此段の雑をつゝしひ申しかくかはり女の是怯の
さるしまうてつくまるしさやうの心あらくもとしへし
ある何にうらみてあきれたと見えるしてのこすべし　女ノ朝しる此段の浅皮不足の神
とうさんのあとし上ノ朝より人の心をよくしれ心そいかにも朝をうけさうにて
人のとなる世にや　数ふる時のうち道をあらそひと云ふなるをはかし
くまへかれハ宮仕へのあらそひてる此段の人めん時にはなれしと
いかなるを論に女の心ある是ハ己をしる此段の言のいづれか家にあらそ
くあうんとおもつかひいくつかを何しいつれもかんとハ宮仕へかるの
人のめん事ハ女の心のはいなるぬしやまいしくなとハ不肖の
時の後見なしくとまいらせ　後悔ありなまかとし
つゝき心とおもふので　此段のつゝき事を女にはかりて是事ハ

とハうとうけてしるなれ　つるきんハ家ハえんみんせしとし
年月をうきうん　人ハもちなきんまきのまれ
馬にのるをまかん事又人ハ枚よなきん時まてなまあらし
あひかたきなとハ　箋云人の花せきうくと称字し
弄云ハひかれたるのとて云宮しあちきるれ宮し又無極之
かくしにをむしきめへき　来し女は乙かうかひうと云つとひ
申の族さうふなれを出てをうきうと云う所しに中後ある時と云し
称なるなましいか　女ハいうても勤韻をとれる詞に腹のなへ所に尓よし
三家稀こと室にいか時かの時れ宮なれよしとて
あらぬましくありて　箋云馬次乳非八斗器よちらうつると
角てしにうれてしまた同音よぬくてる詞の太文度ね遠去く
あいとそハ宮する　腹立し
みてる宮有高す　生にあるとゝいつしるけれにて称もし
腹ハあつる摂よとひするとし又家の口とうけましくきるとひの云れ
女をゐあるゐめちえてとんひ日とつを
箋云そとひきて小ありし　は　ありひ大梅称とて
此読とよめへし

女は事と馬乃にきくらの句なりか嫉妬わさけハ坊んとまいりおあへかと
あらうくまて　しらて　てらくまてる詞の女をとりられし
うさきへにまあまいいとしまていらひをもへきに宮あされ
なる詞は見すなくぬかりてみしへあり
有うしめ留ふめる　前ま女はらそて有ね宮まるれ称へをと
いうたはあうそてなる詞のいうらし
女をとうむしきめへき　さいさ人つきか道ハ今まて出家入道せん
男をもめ人まと女をあらしいうて
このそとよひをと　女ハくひし小称し
まくとうて条へらしくとうる道ハこれそる尾の家あうきよ御
右なる詞の句し　伊勢物語とくとせいひつよけハ為よちよ
と云云の上句門をたち物語のあらし似合へ身れハこた尾わかりけ数
は
請君屠精数　こ　白氏文集
箋云上句ちちのと用る此勲あるし下ノ句また見うきよてハ代
一事にうきうれとつこちてうし
えらうらしるのと　女今ハ女をねうううしとてる詞の云し

物ごとくはしきまでとゝのへていと細し
されはよろしかるまじきとて　是又女の性してとくもてかくれし
まさるにもあらぬなめりさる由なり
うきふしを心ゆとりなきまゝ来てこそ我身をおもふべきあり
其比直衣して参りつゝ此門をとゝむ人ついにいそひつゝさへ人をかし
つかさ進やらる人もあまためりとしいひしかは世俗引き
あまたありける翁の数し此前どもをえらびける時の庭上におもはるし
晦日にかりの人も　あまたかはまつ真実これを限とはおもはさりし
日ころあるまてせうそこ　日わたりかくしつかし
みなうきたる翁まていとやさしく　清暑とい
あくる日まゐりけるに　馬ともたらしあるへきよしの下知あるし
保时の祭のそらくに　賀茂臨時祭也　臨時の祭の調楽
同十一月午ノ日北陣ニ構テ屋有ニ儀式ニ有ニ饗膳獻盃ニ等也
箋云構小祭是
私先賀茂の祭四月にあると小祭と云臨時の祭て月前し
賀茂臨時祭十一月酉日先兼日小試楽調楽なとあり

當日之儀式御禊庭の屋あるに御清のすりし庭の座より使舞人着
座以下かさしの花をと使舞人の冠にさしたる献あり次にかさの
けの事あまた社のうたのためて使舞人陪従の進みて舞ふ還立の
さしに御陪従さしてなほ直衣に御手洗をかける額の間より出
御させ給ふ階の月のよそほひの庭前に二行にならびとあるて使舞人
ならびて南殿の前に東の座の御出御
ありて御座にいらせ給ふ階のもとより陪従以下
立て使以下と云勅使をつて御前の庭燎よりさしあたる御簪
との駒まいるに庭燎をたきて舞人それより長絶陪従の御祭
まつる綵あはせまつりておこなふ事ども宇多の御代よりはしまりける
なり御時の御たに御よ旁そもとかへる事なる
太政の御前よりはして臨時の祭に及ふまで下官の
ようしよのうちにおほかる御つかひ御門人したるに也
させ給ひしはなかりてよしとてあらせ給ひて後して
およそこのよしを院とつかさとりかれて寛平元年十一月廿一日始て
臨時の祭とてはしめ給ふ時の使を中納言の太政時平と云はまさに右

中将にてつとめられけるも前の年日調楽ありしことゝ
十一月下ノ酉日臨時之祭也　江次第近引時於蔵人勘日時
延喜七年下酉職有同月廿日行　同八年久有様十二月二
日亥日被行之ヲ
箋云宇多院御代の事ハ始て此義あらハ此物語ニハ代々の事也
此物語は義をこちらに殊は延喜四年十一月廿三日丙雨雪ニ着深
履ヲ　小山抄此物語はいとしらされたる院時を以て此の事に新し
賀茂臨時祭
試楽ハ前の日する　調楽ハ先ニ日　江次第ニ載之
出御儀
出御清涼殿御川直衣御草鞋着御々倚子公卿着座円座簀
参議長橋座殿上人長橋二行敷畳舞人陪従参集楽所陪従
参進献物舞一舞二人進入露臺舞八拍子次ニ他舞人求次ニ東
相合進立駿河舞畢テ自上退到竹臺下ニ独右ニ進ニ御前ニ舞求子ヲ如
前畢退
いとしくみえまさりしかば　異ニ夜ハ枕を傾けてゐたり

こまうど人のまゐりて何かと　ことに人々の宮の
旧　踊アカル礼記　念ル　分散領別ハ雲　あらそひ給へ竹の
異　かつ御し　字書別るしさハ文字作て給へきれ　一勘如此
或云何かハ退出しゝと　箋弘未別しこと
聞えしとはゝ　此は在ほどの事思ひやられたるハ当た
かかれ附のあ家様と打休まんとくハ此精喰し女院をさすて何なれ
異　定むる人をまたもなり
私家あちとハ宣家をさし　定ひる事し
旧　いまさがなきし又あをき御院ニく
まさなかりなる
思ふニ常まで撫合せ甚又なかりつゝとまゐりをかうてまづと
甘る給ひまじきよりきるか但又なかりせんも給へ
うちとけての御方のね　内裏し
宮ゝまさなるあかりかぬる給さしくちなり
花ニハ宮の御をさなしくあかりハ給ひの女院事しとを申ひ
くわし女院事とゝ近此義あやまれり
女　ちなの事と物れ思ひに何かくへとおりへしもゝ又花を来て更給也

荒ハ末摘花女也しこれハ何とやらん気高き風流なる人へ
恋をしかけ給ひしにやさしく何とハ遠くして何ハさりとて何とも
しれぬ事ゆへ付たし
義云源氏の末摘花女なるへし
いつれ人ゟと　精合し女花ハいつはりて様縦もとそ
家とものさけハ言の中なかし
なる人なりてはかり事なれと　松ならぬ寄ハ付し
箋云腰しそもかくも附しはかりん定ハ仰られても
からくも稲なりき付とみてくり
曽我日ならしき事世俗に名付也と云し
こよひ日比のうらミハ　宵後の事日比の恨をハ此宵とかいふハ
て男のさかりまけく来りけるに女の心とけけるんとおもひて
火かのふ入りにむしきて　女の家の前面白かり人ゟ様し
旧　燭を残ル竹堂壁ニ歌　白氏文集
たへ人ゟきねともあけこえん事　此云衆の被なとの
あつかきねとハ常にうちとけきかへ衣しまし知ずしかるハ

まされありく入るしまされ入るとのつうちんを人居のひさまの
お人ひなるこまうちかけて　大なる篝し華あなりとしる附し
色はにほへつき出ぬくるひの　白氏帳の惟なり
床下なるの御をひきにほく給ひつ付なり
こよひなりやとまちかきさ事なかり　宵後をこと一ひなきや
もつ仰し招しと見ゆるし
されたまを男のころせるかたさむしとハなし　旧正男　万正気の事しき
花　此女を家を給ふのとろあしくて男の心よききまゐるしゆかへり
まちしにいよくされいその方へかなうきとして
松　家なりし
箋云東ハ主人を正気と称する故人と
おや此家にこれはとなきうんなりぬる
松　若く此女居のふ親とおもしもと育新の家へなりけり
花の気ぢやまわり何不成親の家へと自ら何となく
世んなる寺もとも由の寺きき　ためあなぞって花の
精合し女の附し　宮故のせはしよちかゆてしゃしせかはそりしなき　附し

服とうへやかゝこのやなきもいうんちゝしきをあらし
箋云此詞ヲ己憂も恨も述ぬとしひかやこゝより いふは云顛し
せうとこハ消息し アリアタナ アリカリ おとむ先の文よりきて詞よりて云
それ二ハ此をみていふにもおよいにとるなを見ゆ人ねし
許に評やこまり直解しにハ字あまさる一説理不足如様し
さうれゆかしとかれしをつれをうつしねと
此御とさうゆかしといハ馬場よ云ひうしとまれてよまへ
作るくとこひまかてまてあるなれとまた人云けし 箋曰て
人やかまきかいてや見ん思ひうかしんやましきまかれをや
うれなりかし 許まして多めにこうひてせとし
まり人きあつてよりと 許 折とこれ衣裳なり
如 二人をうるひと云ひうれてる程の衣裳あるとて為様に云れて 述
比 此女あらしにいうれおとこれまうへきあるて と接見ふとこ見よ
つきもなどつとめて よとまきるし
錦とせ云ん接をさく 許 折に女のこ云ん接まてを云てとし
或抄頭書に取る見えたし接まて女の述なるもとに 無説行て 可見

さりとて銘くまひてまりけり ゝれ女のうらが何で国よろし
無をうとて女の一ちうきえてひまもしと折る程の折も又衣裳
なりの接見を折に入るよそ折かつふ男のかるを云ふかし
如 さうひ行しとりしきもまれをうら ましと いさんたりくれ思ひまと
記しきもまる八男の男の裳くるようこうしり見あやうとや
又女の男に答まてたくれんたりくれ思ふかしに云ふ説ある ゝ如く作る
江 娘を母とふへのきぬつきあるあるとひいまうめりて見とて男
の思りとも見もまうかとゝもうれ思ひてもうか
如 おえをもとれもつれ物あきもるしをさうりて答まして
代まんたきを見しきまともれとハ伊勢 説もとてきうし二義
の内折花ある説をもまへきれ 箋云 あるつのむくと云し河ニ曜力ヤウ 異紙
うやうかくれ
祇園称のゆゝあるて云ハ只むつろし為程よ恒へ不称をの思ひ 秋日て
あるあるしありへ 女ノ詞し為程の思としてもあつうめハ論へ
きとりて 見ゆく使ようしきもは女のるえ像思もしとし

あつ身めてハ汝れ分をあつさあふよし
さるまとも気ひたりれし　如るやうに女の心さてわたる
さんれ分て馬れ乃四足あつ身やんとそいふわし
つる分きて　などて馬のつけをまひ出る徘し
奥
川をせハ身ちにそよりて表題のつるひきよる分ハ多つきく
渉ハ時寺ハ行る川つるひく八疾妬の分て
如
女をとこしおうさんとて渉れまさとのけひまてしつつ
のぬ義し川よせハ身ちにそよりて表題の心のうそいて
箋云此川水汁出羽かりて目かし　假令つすひまとハ彼ハ
つれハかうへまされハ我のかうへ川ま手にうかとわかるに及なり
みけまうる汁をよれ身汁しされを縄断しかり用ひ取皮
あれめれハ縄とい渉をいはしてつるさとしうん表れ衣受
佼成て到羽云身ちにそよりて表題れ心のハ及れへろすと言へ
いるし芝ハかうへまて縄を身断汁といるまろうらく丈かれなり
まうるく如佛し　女れもあしくぬし
箋云蹲の魚ねかへりされまくうへき事りさ縁へうるれ

史本白さうあり佼まそうのしめさうまそハまへうるれ
身ハ漣にハ汝ん佛りし
曰
あまりめるとのとうそうあひきし心ハ身ハつれかてまきて意
祇任身ハつれかてきの心れのしあそんとハ意をと髭面女気曰を
こうさんとし身かハそそうつれよう日かたり
箋云此川有日見りて是れ羽奇翰し寺　前尾お組眼して
日云此依ハ費と墨直との二川をいましめくうかる汝の胸ま處
佛れあや渉りのを芝　昔曲かうれまもあとを汁をも女ハ実
あうとくてもうかへきらんかト及てし
おうんへりうらさのく身めんうさ　実て参なかうのくるたに
まつろんまんとおりひあるとそかり
まうるきめさこてくを被て見れたるやとも　曰かまよつけてて
うひくまきまれまかうへし
身川ハ雅　曰　地を深有見事れ七夕ハ氣絶んて
後
乃かうに秋も也かつ於田雅お栗そむとや山のてるうん
葉くまハ佐保山の秋よるとてもおこうさかり山の書れ分みよせて

春を染る神といひ秋ハ龍田山の神よりておこりて紅葉を
染むる故ニ秋を染る神とも云し又龍田神の名也但龍田
姫の名の下葉にも桜の寺に又云ゆきハ七日に拝して竜田姫
出現て紅葉を風にちらしぬ　秋のさほ姫とは不見也

七夕の手向を　物のさかゆるなり

日 あふにハ七夕つめに恋しくて手向るのまさにおへをまてる

花 董永後漢人家貧傭力父死就主人貸銭一萬以還遇一婦人求為永妻与倶詣主人令織縑三百疋以償一月而畢辞永而去乃曰我天之織女也縁君至孝天帝令我助君償債言訖陵空而去

私云 縫事にあふ(?)を以てまつりくる紀蔵せらるし
うれさく　云本此河海にハうつせしとありて注にうるかくしと
弄にハうつさくとありてうつりまし常のうつさんと云にハかはらく
武説あるつ伊もれに有てものむまハとあるてつしまでうけし
此書にもうるのいき　同し伊勢物語にまゝてうつさしとはいへ
もそうつしと此事同し　祇注にもうつさしまし云はし声ノなし

此歌伊勢物語にありまさにゆかへしせんと
私 河内本にうつせとことは河海にうつすまかしとあり
私云是表紙ニハうつさくときて龍田姫うつさくハ伊勢物語の
説云あるをさへるうけてものしますとあるてつし可をうつし
とあり其の日に思ひてさりて拾ねの日の

七夕のうらめしかるを説のかさねて説うてかさねてあへまし
身十限中在の詞しのまありくハ竜ちめかしきとハなにをうちけて
うけらね説うにあやうらせてきこし河へ物と云ハおゆかりあとうし
ろ在の義と云ひあくうちそ中ねのくいを詞しあちめかへしそ
あへをそのまるとも云ハ説の丸なうる事ハ七夕ま恋しくそ
そうらめかすハ七夕まてのねとえし竜ハ竜ちめかしハ似され
ともいわれさかく後のあるとりて本寿の何まうまつり
是にその龍田姫の事ますそまさ是て物河にし
是つ物あるしとハてる代の書の物のすあひしくさせなりすまさ
多くいはあうやしまく字をしとあるるし経と花々まさなる
めすうとも龍田姫まいまうともおもしつましまさと云しめ多

かくある花なり人の鏡ともなるへし

ちらすき花なと　如 春の花秋の紅葉は造化のなせるわざなれは露の

ことしにて花も実もなく咲ちる花も色ありてなさけあるをこそ

なれのみにして人のさかしきおもてのちきりなきはなさけをしらす

ぬをはかなしとは女の心はかなき事にしてあはれなる色をこそ

を花なる花の色をあはれふかくしるへきはいとをかしき

あのこゝろさまをいひてこゝろ得へき事也

我かむ御説にをかしき事なりとて露のあはれにあらはれて

をかしきこゝろさまなるいとゝ人の心をもゆかしや

露のたまし

　ゆ　緑　光　葉　夕葉　無見　日本紀

自然の花の葉さへ時をしりて春夏秋冬の事しは女の心にさ

れはきくことなかれはにあらしていふ詞しはなれはまことはかなし

さなりけり世とは　世のならひ人のなさけいさきよしと申詞

さて又おなしは　紀　第十一巻又鳥羽の詞

如 又いのちをうつくしみ　古詩の女のことし

我か人の前女よりもとよりもなさけなくもゆかし

見るかなくてもいつまてもあはれなりけるよし　ウワヘノカザリ　タルムトクタリ　宮の内とは　フホカタチ　容貌

風雅をしらさるはまことのいひなしは言語の内のあとは容貌

としるし様容なりし女よりもあはれなる人のなさけ

をきそてあらしくしあれはこそのきし色又人のなさけありて

まつはくちつき　何の顔色をさなくあさましき

見るかきてもさて　再　悪事はなきあさき詞しまことに見えし

秘密西行の御農瓏川の寺合に往来て判詞にもしるしたる

よろしとあるまゝにありて一所にあらはれたることいはすしてもおもひすてな

しなきかにあさき事し

はさるものと　む 指さし女を得る物としいひて

うつくしけれ見る物さへはいはすとむかしのことを記したる事し

はかなく思ひしれは　さ又人のならひいふにこそせし

見るもまた家の物のみてとしりて人の心のはかなき事をつゝしめへし

あはれそのつまの色あらはしき物の身としまた前に指合し女の嫉妬を

いふをもはしさなる人の事なりけん

此人者おほかたの女よりも中々後ろめたしと
これ人らせてのち　　おほかたの女し
きんくゆらなりたにハ　　木枯のらへ細しりし
日　こりく
藤し　散みうきめる心あまりてしし
えんまことなりしきてと　　木枯の風流好色の色あら称し
色かる方のんまあかねみしくれはよりてららのもへくて
うまてまかよりしきらたに又かうりひへてそろまそりし
甚事ともあそりつひのつるし
ろうらへ人きありくこ　　此殿上人へ絃をみそのなる方の俊算
なりへし内裏より退出し　さ日よ同車まてろし常にへ
のこきまろとらろへともこそてあと思ふろろうし
太納言の家なり　　此大納言を殿人とや云なる方の文の馬頭よ添
あろへかりへし只大納言といふなかかつる所しなる方の文人や
何なる方の文よやとさてあかうやいう極なる方よ添ふへかりし
報云吏部のなりて云なる方の文なかへしとあるよ又さてなる方の大納言
なりへの方よと申へしをはよ木枯の女の家なるし

ろうら乃殿上人ハ木枯の女よなれまてつまてろらうらしなる方の
かよふ車をきしめて
こよひ人まつらん宿そあるん　　弁 彼殿上人へ女を戯ひろうや
を 月面白き夜なれハなをさうにいの極なれと此女よ心とらて給
この女の家　　まうし乃女の家し
よもれれ　　太納言の家へ行とて此家よとまりて時うつね方し
以 吹風よあつらへつつ殿あけりハ此一句といかよ此女にいとまゆし
如 来らう歩ハ色の声あろうとよりきてのんきつてやつつかへと
あまたありくなりをう川ま　　ゆのちとも此の文とはふれて
俄かへありあらんとて　　いのちといふそれして折めしろう宿
拾遺よ浪うり月のあらかろと読る　　木枯の女の家の事さ申し
をとあそておうらへの月もてて家のやとるく行とれ後し　　伊勢
水龍と云詞寺なとに面白う凡の遣遣流の下池の水と白と
切く新なて月あたにやとりもことくかそとし申まる此従へ前
箋云ほは川ちひ柳のたたきつうちひるのけとをは掲なく
よしてハ水龍とハ旅さへうし乃も

弄にの新面白き朗しとみゆる
きるんつりせうらりや　前より此殿上人の口つきともみえたり
なりけるを此様をみんなりてさらぬぬてことも此殿上人のなる殿の
物のかたりと云事も此女ハ又なりけるとつまてたりとらるを知らぬかし
いうてもまてて　役人を仕へき事し、
まうろきて　箋 坐[スハ]ロに心おもしろくうき角の袖のんし
須のこゝろけ　黄[スノ]子[コ]の風うなる物し
さなるの月をとらる　まつくしいうりし
兼いとおもしろくうろひかうりて風はきまちしる　万葉の
万の古由云信級し面白き雲れすきも袁と八歳のかを
まにとハ殿上人の心まて待ちまうる様をる校のまおかし理をとむかへ
笛うかきく　殿上人し　笛河よくつし
けもよしなをとつてまうりて　はかし紀をさ渡し
あひなるやまりいらへし新めりしみともまきしき角くさて
催る手佛し属りうハまへしと云四りよらうて
杙云月中春事ハなのまれにて新まりしと云をとうりていらし

瓊[ケイ]花[クワ]ハ玉[キヨク]英[エイ]ナリ

苑るみハ太和風花るけれあるうしつけもよしとハまれ恰
流しまもし　みとり木とハ室るしうる人はにけ
聞くうかふきなり
あをうみれ身のらけをよもりふ　木れ振し　凡ての宮に
ふゆくさハるをうるうからかてさるあり　一統の月あるみハ京て
あるは渡秋し二条万里山源ま云そいあり　かとまらハ味かれ
文選大人賦云噏瓊花ニ嚵食し　文章を口まてあはとの
芝云そのつきもつらむひを口ひそつらふをれハよむとまるね
箋云前漢司馬相如傳大人之賦咀嚼芝英兮嘰瓊花　嘰音祈 小食
花るも文選にいひらいあやまりる
或本にらふかすいれうもを嘆らうふうて綴うえるて　箋少不同し
よかとうまうらんと　淂　和琴を従巧多アリてぬもらてにめてし
和琴を伊弉諾伊弉冊尊の古時つくりとしむれのたちと　仍諸
楽笠之上に置しあかりまてとくいうつましてをし　鴨長明記云
和琴ハもとハ弓六張をとりまてくつかつと後に程にゆうし
件弓ハ上総国の古渡物し彼国の古注文云弓六張　神楽の歌ま

式抄等を随まゐけ神しかまする見とさしきて此巻一の終と
言ましうハあらしろし　　さしうあるさいあしうくねし
律の点ある人ハ女思ふ　　　花鳥并ハ律の吉し呂ハ双調律ハ平調
女 律ハ秋をとつるさとは又律ハ陰なれハ女の事し　時花を神月
かれハ新まめつるし　　荒昇小同と
物風いろきよ　　或抄帝説ニ見ゆの点ある人ハ女のとまを切く
ものやうかにとあそてうけしと
とのうち　　簾中し
いまさんきこうなもの数　　弄　古和（ソニトコト）云ちれハ今出たる物とこと
又変経も昔より何人ゝのる事ハさつらしうれいまたらうにめ
流りしきぬ女ハいつてくうすし
義云加現ハ月日の数なれハ唐の手ニハ和合をたりしてのちは
唐の手に合奏もありしはいふめかしとして
女 只日本まて俗なる物なれと今免てとしてことしきて
つきありを　　古今俳諧の詞よ人今ハいんつきのなるの母
はとよあるハ女よりなる事をつきありといふ言す月の

あまきろうき東なれしハ流りもうる見しつまあうしのハつまあし
めてう　　は 感情 こふ 日本紀
ものりしらに　　簾下（スノモト）し　　かく去云見ハらうにふつくらた
あくの簾の下にきさんの　へあゆきよるし
庭の紅葉して前も知ける跡もなくれなしと様こまかにし 活
白秋を具ね紅葉を宿にかくしきぬ元てあて思ふ人まま
好子夕ニ又励ハ十二又一統不好語ある説し様をまれとハ庭出れ
紅葉を以てふ冬なる緑すき旅まなまつまめ人あらしと
此原上人の思ひく様こまぬし見あやまれる説し
む 庭の紅葉端なうる緑すきとハ男のとつめと云ていひて様
冬なきれ見ハ原上人の歌ヶ細く音信ひされなとひて
女のさうの様ちむ風うふいうん人の見又女す
女 様なまれと云動夕ねうるれの端な冬の跡のあらんてそ作かよ
ひつれんと様ちむ理ある人なれされとも見ハ此女の正人別の人
よみて次てよろし由てふ人ハまても冬やうれ紅葉なしとてと歌
ことあやりてうちやし律進てし此ゆりて女す様こまする

人やまことう紙上のほにけんそうえたり
祇侄寺 箋 両三度の出書ニ一同ニ此義ニ用ふ
唐土人女 とふの狩て月もえみすゝめ宿ありつまにたき人まつりやすかる
注 定遊て 本ニハ兼もえみすゝめとき 新行 本ニハ月し
なし 此寺ハ四方ツせり男のよめりしつまりす人とハ本の男を返
祇侄寺の事て月をさるひなきの宿ありける事つまりあれ
人とええやハ気さしあ花折花を歌して海の家
なと暗てて見んやしまれとい四方九ハ狩にまりの義せし
月と兼ニ物まるあるといまて打りしいえなりねとなき
身ろかりし清遊ありたれ人とハさしめて行人の人しとしされ
狩のりて狩つハ万葉を暗なて寺ねとし
或抄云此両抄新説にありし又狩野月の此まで月行来遊ひえ
又東を拂りてよりき身る寺ありハ月を兼て昔了いくれ行れ
古抄兼の説て行ろ人をの寺て兼ありとく人身ハ新添ある
古因まや物ハ葉ハ行ツえたのねとハ若所宣身くひしたり
兩説しえていたはと云ひし又文字ニハ捷勝とありしきの白意ニハ此の儘

此義於めす 宛まやとハ ひきやかそふあけらし
ちろうありまのて 文猶いありハ男の心前ニ女と云のよりく
まくのあかまうし見えすとそうかけていらし気又此義ハ三の字
此義をとの人し肉書ニ云のを早下の詞し又
義ニ寺を早下の詞又女を終りこならしてえたす
なといひ身ハいまろくゆ身あけのとたし行をよりと
今一よ見まくもやをしき人
なし 男のうらしつよしまて女の
為ニ古枯ニ吹あのひめ家第のありといろ 松井家あり
如 馬ノ承を康上人の記してつて女そる所と知りさる人へ
すなのこひあひそ 手かあしあひそし
あされりまたと
清まし同る 何文字ハ云人物 旧 飯アサシ 直飲ヲサシアヒテ 協語 鮮 あされ候て
或抄云よしまくとも思ひへきすへハ身いつましうる詞し
俊成の歌ニ桃偕の人をされ身と云ふ身いつていふし
己上妾 女と見いへいけるひとく やまとニ風流なさうたち四ろ人ゆうう
木りもしふいそうれ花の都の名をりとむしつきての家をなすさ

如 箏の事ハ別にならへるへしとあるを委くはつまなき琴をハ此
らんにさかして承る事おほかりけれは何となし（きこえの箏の琴とも）
私云二ノ句以下別紙に在て此段に吹ありと也箏の事ハうたかひなく
う思しさやうのかきりの事なりけれはとてひとつ心にいれて申させ給
祇注に琴とよみつけられたるにや
河海云この箏の琴ハ箏ならんといふ事もあり　此女うへ
なをさりにめきらかなるによりて色なるをもちて
まゐりけるを琴とさせ給ひけるを此女のうへに書しておもしろ
ゆかれける
并序列箏形如琴不知孰　風俗通曰箏秦聲也或云蒙恬所造五絃筑身
箏施絃高箏々然　或物云漢恭帝使素女鼓五十絃琴悲
帝禁不得破琴為二十五絃　一太三尺秦始皇時破為二十五絃
為十三絃今之箏是也昔以竹造之其後以桐造之也
あんしのうへ調
今の世に月なれハ両調子を引し平調に盤渉調　盤渉調　箋云箏之和調子ハ平調なり
いまめかしく　箏云上手ハ和琴の名物ともいひなからも

調子の名のりまてはことにすくれたる御手つかひとなりぬるを
しなれとハ　一りとて見まてハあらたまし物にうとのみ
いまさらにかれ後へゆかぬ齢なり
まかせの　中の宮云　諸り事をよろこびとして
和琴をひき出のしらへならするを人になりに又箏を弾しゐたる
方にさしよせたてまつりしかは内にもすゝ
私云　調子の手にて琴は男も女も引ものなり箏もひくなれ
哥なれはとておきてもことにさりしをこえてこそ
まてにみゆる女の絵をかき　其人なれ
寿　箏にまかせ給ふなとの
よさにまかりひいて大ゐに此物を宴に用ゐまいらせ
すむとかくひとしてこれをなれは
如　とはかれ古人よりたかひそのたかひのきよしをとて
とそ宴に用へきとの事にむかし箏より皆此心にて
式抄河說に女基此事も
箏にいろ／＼なりても女はひとへにもと面白し

如何なるも家あるしにもへかんへりいかめしきこと
その曲なるにもにくゝてこそ　前上人ヽと木枯の寄
つけし多る時のあし前にて此女とる段の二つの女も
めふつね米みるを心りし風流あるとこりあるを
折しもふやうよ事とさなりて中後なるし
此所の事しと　木枯の女と指喰ひし女とし
わらさ所あんめり　る段今よりかへてめらし所なへし
ありいそ多る　木からしの女のさるし
指食の女よくくへことし指古指の女は指をくはへるとし
いふまゝのらか　る段の事て手のよる　指さへの事たり
人のあるう女ハいや中よおりもの事ゝし
此人の事に　る段つ源氏の中将をさして云し
そうえ落あへき萩の露多るつ清少のんと云余さる上の
はすて見え落て表ふへき此萩の枝さへをにと云頃白露
いろにゝやうりハらん所のこゝ清しや思への云さ此らん
紙に萩の露あきしれ貴所為二川字とあるさるにあるまき

事し云日ハうれしくやさしくしきしふるはる
へときれ日の度指かしのきんとの所し
源氏中将をさるの御中の事てあるハやかの御あはさるらきと
しても今ししめさ給へりし　川寺よ不及以ある女日の
川寺もそても　みるへりけりえんもあさ給へさるさる
世俗の納まそきあいゑんらん女のさそかう
義云萩の露藤の露皆実方今人の性と云川字の不及ハたる
おえりある　はへ雪を指さるへしくいうつまよの花補し
いるまうともなくうせいのまりうかゝた
孟子曰七年之病求三年之艾文　橡樺七年と云てくもの末ハ
七年にかれハ我末よめるを儒者の者也の事ゝくへよいちゃ
の事つきうかろうをハ三年をても七年とても云し源氏君にし
十六才よめの人ハ今七とを頃て大個年の齢よめなかりてもはのまも
おかし知る人まとも云頃し
従てめ事ても書るて年数くもへれよ及りの縁者也七年
あつて両後与家本異へし　迷思記

或る源氏よりを七の説見と云義なれとも只七ハ大数をあけ
て今かくしもうけたりて云ひ初ゆるへきよし
義玄花ニハ種章七年の事と云し又源氏十六巣なれ
共まなひぬ人も此をも見まゐらせんとの事とて
一説文なる源氏ハ七巣の見をといふ説一かり義ノ義
学記云一年視離経辨志三年視敬業楽群五年視博習親師
七年視論学取友謂之小成九年謂之大成
やすまき云只の此取をとさゐのありし自御手ならあひんとなる源氏の初

ときゐハめてたん女なり　数奇（スキ）　挑（タハメル）　好文色まうひき
かしくあそひて若女し女かあるハ四季ゆらりぬなし
義まき云嫋し
あやまちしてらん人の名を　ときゐなめる女ハ風流色
みうるかかりあやまりつおく陶し　これをはやまりしてと
いはり女のあやまちしらん人のとハさやうれ女まちつへハ
自他のちらひのかれさる時男の名をと名をうしらつし

或抄あやまちしてとハ女のかうまくしききうつりまうひうちし
て相てらん人の名をこそらんへきならとそうらん人のハ男の事し
いましい事を　訛し
中将ましいのうるけく
此理を様とろ引あれとも　せゝしく云極の心し
以中将し前かてうるけくとあり　身十二身し
君もまうしうこえうて　源もうかりしてそおまうあんて
さうてくは　源て四中に須納言す人と物結の此を見の宗初し
いうてうり　源の初しいまもて雜のまさハまさをといてへ
ぬるくうしく得うさるまかもうらもの初て四中にハ久かりそ
おかりあうかくうらんのかの初しおかきハ次とハおかりまれとて
なかうしハまれ物の物うう
されものなをいつてうし　める通し見ゆ典上の事し　されちは
之通まの親るにされもののまに後へうらの庸後りまき子
世の中に去せてらん人のといへる庸なるかさするへて御ハ字を読し
又左傳十三成公十八年之傳云惠不一分散更故不可宜一　往同

不惠世ニ所謂白癩トモ義同シ　人悪立癩なりけるを遣悪と云り
さまこそ何哀き　如何とおもふらめとあはれ人のかなり
げにさ思しられまさかもたくひなし
あさはかへきわさしを
あれわれまさに哀とみえてこそれねあかぬ御わかれは女て哀き定めし
思れもしりつきてハ　祇園御ま哀しとまて八哀かな
諫居なりと云りんと家つ年ゆておもゆらすゑしとし　世れつきわかかねとうちの色なかか
ゐたらねやしまて人々しきるんへとても　御新もらハ恨へきす
さまらしとそてまゐて　何事恨ことくれ性のし
うきさ思されける人　久まて哀そて御かたへてまゐれて
てのつもしき人へとてゐてねさ思ゆして在つし
かそつけそまんさ思ゆそてゆつし　うハつかかく　いろ
かのてゐあひまて人へとて何やらんいろくきまさていね
あまり何んあかんとかりかへりかねてゆかりしきし
此夕顔上ハ人々人のゐかなきも恨しかやしまても御かくしそれ何給
白日くらしきとし

ゑかれ見まゐらす　此まゐ行来とのまて哀すし此男にまかへ
とまあらしゆ人なり
あやとなし　如夕顔上乃親ハ三位の中将とそらせめるよし
夕顔者まこそ色まより哀のまちに此頭中将をもおもれとよし
かゝ此けきにそそしくて　頭中将の人へくおそろもめ仰
をとらゆみねあまり御ゆりして人々まて哀そせめるまらし
此かんのみ哀かゆらう　此かんのかるまらうし
頭中将少将二条桐か乃四君しまあるれに夕顔上乃事を
よく知りてゐなれまくとたとしいとせまりし　夕顔上ぬおち
まのまゐつまて見れまるの行来まりのわりし　此ほか夕顔
ゐまは　右近つ頭人へとうかゆくるつ下まて見えてうり
後ちうきし　此女ぬと頭中将の後ほ関かしめるし
まかうまてまやあれんまま見れ　二条院哀れあらくうら
夕顔上八人たしかかいつれすと頭中将をまゐて見れ哀てこそ
つれ思見しうとしてれとを夕顔上まて頭中将の哀ある人の哀かつれ哀
てらゆらし合てまて　かとかまゐらし

ゆりそめうまれて　夕顔上の口をは中将の案して云し
おさなきものの　むかうの高砂のうし
優くこ多り　は中将の優くして語らしら称者云ひ入る様し
されそのみのてう紫はて　中将の優くしてうつき多り
下と源氏のゆかしく云ひて何ひすへるし
いまやたとなりてもなりきや　けして紫はうち返さしと
源のかへをしのりてうかりほりのね　なり
秘
優なる翻しうりてのその色の羽けたまてへ命の口まいてうへ
きなうり桐く源の四方やを夕顔そ中将まうやうに岩将の四ろ
いなりしうきしみなりうき中てうひかる秘の口ろされ
てくすうるをなりりつるかすこ大やうにうひかるう翻し又
るなるその物くうりいうくしまそもこ自ろ不理と中あまう
もうふ夕へ一又は中将の御信の大なうなる様をへてれ
みうとよく四と見て見くへし夕やの不覚なんし
矢隠 夕顔上
山里のおかろうらも秘りし不義をうけよ分きし　これ露
夕顔上の中将へつりけにのし　山賤　山勝　山下たへ見て書り

中将
頭中将　祇住寺のんハ山のの事かすろうとハ行うてまし
早ふの四し家つよすき自のそうるきやその事しなるむう
の事まゝまそて義ハうけてなり中ねをうけ四し云のさ自
物義なうりや　秘云う紀かあうましとハ此度行来すう夕顔上
の如くて一のハさやうに此頭中を俊捨てあまてすかれとゝ云ろ
云ひあましまうに　書夕顔上一うなるもき云信とひ
あくうその事て中将の御おもし見まうし
まいのうくうそかれりのうつて物云ひか
すさまいのとハあるまこあて物をいろね夕顔の端をいふ
祇住寺のうらもなれとハ夕顔上のんくせし恨つき事なき
されといろんハきつりたの四まてうひかねあし見乃癡なれ
あましう家の露まうれを　書き虫の声にきかうるハそのかさ
虫の声ふきあうしる　是は古義源しく
くし義きうれしあはれ
もしし物くるうめとそて　うかれしし付女気をさ自ぐ加くうり
末摘花 夫てこまりなへし

うつせみの物語は見しは似たる事なきさまにては何ほどの物語を限りつゝ
當時の物語の詞を見えたるいつて 爲ひの物かたりに及ぶへからん
私云もし物語めきてとも言ふへき詞甘し物語言て
みわさと後りおほくおもかしん 猶なかり長さしとふて
昔物語とも言ふは四件あるなくや

是ハ頭中将
咲まじる色ハいづれとわかねどもなほ常夏にしくものぞなき
頭中将哥也　私云是ハ夕負上にあてゝこれを撫て山
かつのかきほあるともとよみてこそ それ此哥をとりし
頭りて頭中将夕負上の家へおはしてさきの山かつの哥の
返哥とて立よれのまつし梅又夕負上の嵐吹そふ秋も来にけり
とよまれたりとて此歌に何事のおもひのなき
ときてさるにて及ひたる在所書

松
咲まじる花とハ秋の庭のさまとして常夏ハ女子とよんで云し
夕負上をなくさめていふらしたて撫てなれとハいかにもしるへき
おもふ又床の塵とよむ　なそして秋の七種の内也
寄せしとなそしこゝをハさしとほくまうちそなへにておやの心とて

さればよ衣ハうすきよそしの露をしりしハまつりの心をし
それとハさし　取くいりと家のあるに人をしのひ
ちりをそうにもつりしとゝとふさねしりともいたし家のあるに床の
鐘愛袖家草故号撫子ト艶色装ニ十年シ故同常夏　和名序家花　瞿麦　花
牛麦　大鏡裏書云滋殿ノ大后少之時容姿絶異号ニ瞿麦御寂
夌艶耳シ今改瞿麦攆ニ常夏蓋避ルレ諱ヲ也トミヘ
ちりをうへにかくしてゝいふるハ此川がもの四てゝいふるいりとて家のあるをハ
夕負上のかたの花ハなくとても床夜子南さらしと云しあまつゝの
とハさし取くしあやの四をとりてハ夕負上の人をとりをと云し
おほえつくと川秋してもいへるる翔し
祇注うちしこゝをハさし取てとハまうでハ家つましされハさし
ていけて我あるの心ありて夕負君の四をとりさし夕負の方ハ家
なさして撫子の心に表をうたしてあさにおもひら人すむ

又返夕負上
うちはらふ袖も露けき床夏のあらし吹そふ秋も来にけり
夕負上の哥也　祇注夫の床も露けきま嵐吹そへ秋も
来にけりといふる表うつし此嵐吹そふハ頭中将の心ふかきにてお

とりいらせてくりし事のをかしさ夜るてらしにおもくハいとほし
河
抜捽
てあらし吹かへてさひしさいふけ風なるらんや
日ごろしのもれ子あつかひ中にまれ交そそりくハ九月かくりなり
まあらしさてこそみるなるまらうとなんなれ
夕白の花咲たるかたに四君の月こそおもしいてせなるをもと
さりけるやうに根をあらし給なれハ抜中将をぞ心さしありし
思ふ夕かほの花なり葉しきさねらあしきさなてもみえはしめて見
おかつるるさなれハ人ならむもはつきの初よ夕白のかれはしやまより
人やまひて　文郎中将の御かり
給ひすのうちてまいりけるて　此すけ夕白きこえてまるらんや
みしてあまるへらるまて源氏君をハ夕白ハ上と見えかるありし
ちるるさ母せるそこさ浪らなりん
河令學文龍鍾　流離　白楽天
あされとおもりし　人のむしとかたしいへとし
さひまいりもなく　抜中将の夕白上まいりとなりし
見なしハ御のをうしかしいみなる人手扇にうくもあるしきりやうのとし
こしまさもとしへとそ浪
無礼してのかれなゝきをしへと浪し
四君のさかうむしいひなるまかしたる様よ抜中将の御衣
らせなめてハさやかれ所ともうしてあるける樣まあれんあると
としおほくなききれつれらやうに女かりしし人へ
あさらしこれらくなく　あまつれ事し
これてそれすなる
き事ともあらねさなれ思ひて人いひくたとさしてうらといふ文字
つまなうてつるしとさひきなくとも志そて
伊抜君の御あれ細なりまちけくてふあさひれ貝のさこさへして
むかまハ見んとひしてれ此女のつゝしとさふかなとハ人多かりしへて
象とさひりしの無益れこさひまそてあるなとし　河無益れ所思し
今やうらしきれたり　抜中将ハさん又さひまいりて事も
まつてさらし人てあるしられ女を推えしたるさひすあれまで
胸こうるしゆかしなるるてあるなんとし
人ほかなりぬむしよ　人ほかハ人ならいかりけるあしらるし
人をいなりぬハさあらせてゆかし事なりし夕白の上もまたれと

たゝかふ身を惜ゆし身なるへし　都の中ね人羽夕魚上下せよと云

これなん えらゝりつましく

えんおちなきたゝりつゝそ実の事を見し

されハ彼さりけるもの　花 弟十四段 中将の羽し

けふなちハ拵倉し女し殺され嘉もあきん八ち柞て咲合

もちかゝと寺よりも世し此ひとり十ヶいハ中将の語る事後

是より又る段ヶ羽しさる拵も拵倉し女し花にハ中将の羽を云

或抄頌とかて馬段羽ととり

弟十四段る段ヶ羽し花に中将の羽と云ハ桃し時段に取て

三種の此を一変して弄する段ヶ羽と云

おりひおくあるかくハ　拵倉し女の狼れ乃との実し

き〃ししきされとさしあひて女とあんするハよろし

くれをとれなかしよく女をハおしくきかし拵えん句を

ひとをおこりおきて理とハ此後の此して由るかとし

これ善もしめりなる　木枯の女ハ風流をそむる罷

出りし　なり見　久しくたれもふの事もし少ちかてたいちあされハ女る

めこきま世中なりとして

世中やまるかくこそくらくにくゝへくるかくへきおもん

世中とまね君かくこそくろくにくゝへくるかうへまなれ　ならし

これさ自くれまれりきとり　あれ人てい事てよ手下まをそれ

とうりそそまろうさ事をと嵜れ拵るおくハいろうにあるんと

なんもへきくさう日　可雑種　独も〃き事れなれいと

きちまやうてん女　白 大吉祥天女　生金剛最勝三住吉祥

天女ハ端厳之天女し紀しも佛れ春有るれハ得氣つまて　姫ら

りうゆんとしくましかゝかんハ見つてしかかん　し

瑠璃金山宝花光照吉祥功徳海如来　最勝王経大吉祥天女品第八　吉祥天女

有数城有国其名曰妙花福光薗在厳錺七宝宮殿堂六銖其

中在天女名摩訶室利提徳月顔回融也秋雲拂雲花姿妙艶

也春林增句五色雲上馬脳宝執出珠宝二千葉宝蓋妓楽諸天

作供養左手捧如意珠薩頷而戴宝右牽手印施元畏任頷侏

怖畏或歓喜地菩薩鎮生如来家或不動地薩摩妙遊元相門

祇洹記ハ世中の女のいつきともいへりけるかたをなりけれハ吉祥天女
かたちのうつくしきなとをいへる也これハ仏法のためたくみなる方便
にこれをもいへりとかなりおきてしるしやるへし

弘安源氏論議云　四番

同云　　左　範藤（ノリフチ）卿

吉祥天女をおもひかけんとおもへるかたちのよきをかきたるにつきて
いはれたるやうにいひなしたるにこそ

兼云　　右　兼行朝臣

この事の所あらはれたることハあまたをさしおきて法を
人をいひあらはすとも仏のよるに所かきつけけるとも
菩の道ひかりて法をかんとおもふあらはれたるにや
にかなかりける事ハなりけれハ吉祥天女をおもひかけても法
をつきたるとしても雖いふへしといひかたしとも法の
只物語のおもてにハいふかれかたにかけてもよろしきとの
四天王経云の経ニ云ク王ハ四大天王ハ各一ノ女子アリ
極好女ト云吉祥天女ハ時ニ四天ニ各一王アリ東ハ業王南ハ業光西ハ

明達ハ福田ト云此四王極好女をあつめて皆集会ものかけり
極好女忍しかりてこれかり是ニよりいはれの方界七万八
千九百里をさりて大海のほとりにそれて大海の底ニあり時
父王四方の王大海よりいてて好女ともに衆国の様をいひいへ
りこれの御説にもれなむ准し給ひ
とて此の御説よりしてまれたる用ゐられたれハ次てかきたる様し
判云所方よりも中の所のあれ

式部か所よりてかきかきあり　式部丞ハ六位の人にて蔵式部し
花鳥十五段以中将朝し　私云式部丞ハ其人をかへりかれりし
第五文遷儒業次第也　是大学生にて補して灯燭料とあたへて九年
の間蛍雪のつとめをなし此後大学寮におゐて是をかへりかれ
史記之類を学ひて其家の中にも家々ニ及第して則
文章得業生ニ補して又七年勤学其後式部省ニおゐて課
試とて上古ハ秀才と云試の二科あり秀才とハ方略とも書ハ
講の大事と云也ける献策の時同題にてかへりかへりて其極
の大事なし年を経て此獻策と云今の得業の人ニ代文章得業
生二人を秀才の名ハ始よりか給料を賜りて学問の人に此秀才ハ

方略の宣旨を蒙りて式部省にて課試をうけ及第して文人学生の
の中にすくれたる者をえらひて博士是を挙すれは大学寮におゐてこ
れをえらひ史記を読せ試みて及第して擬文章生(キモン)と
成(ナス)此人式部省にてあまたの人を試て詩賦を作らせ及第の
の人を文章生に補せ是を進士とも云式ハ御前にて勅題
を作らせ試む是を判ハ文章生に補せらるゝ後さらに方略の
宣旨を蒙りて課試をうく是を例これなき進士ハ時務策をつくり
以上も方略宣旨を蒙り帰りハ方略の試をうく文章生方略の
宣旨を蒙りて献策の例ハ当職の外にも此様を教授の海
宣旨に但せる後献策をすゝめさせ例し式ハ文章生方業
にて候して課試の例是あて式ハ文章生にとゝめて方略の試
に不及の例是あり　此段難し女忠にくし

あてなる中にも　藤式部丞の詞也
はうとうしきんと云ひめるは　花宴十六段式部丞の詞也
孫云下々下の中にはといへるは十六段藤式部丞の詞とみえたる也

とう式部中きんと云ひのくれしいふハ段の末の物語なり
とせめらるゝハ何の事とも中さんと也　急なる様体を云詞也
いうきんハお遠しや
まだ文章生に侍し時　是より藤式部丞か物語也
藤式部丞のまだわかゝりし時の事也　此物語の時ハ藤式部丞ハ
翰林学士の得業生のかしこき也　祇園云是より末の詞かしこき
彼の博士の中のすくれたるに　私　蒲ハ博士の女の事也
学問の人の身にまひよりあしきる(?)は聞つけて其にも
まつとうらしるハわかさとうちまかうんやハなとやうし
馬取の持参し女のすきなるへし
何れのきハ　女学の難し
秋花にも此波をとらへるめる　博士ハ博学にして学文ひろく学士らの人とぶ
なりかしのたゝせ
家の人をあまりしひの博士かしハ秋りしまよし
それハ式部丞のかくせわれらと　女やうにも女ハ藤式部丞の文章生し
時師匠にまいりし博士の女のあまり思ハいひよりる事と蒲ず

歎しかるし
ぶやきつけて　式部が師道のたゞしかるせし
家の前のたゞすまひをきけし　妻式部のつまひとりかんかると
文集にもいはるゝ所のことを申しかり称し二ノ道ハ文集ノ
秦中吟と申て是を帰去ま似てきかし婁入以下是を載せ
嫁娶論所乃礼といふつ女婦入門以下みてきたる事也
は
両道　富家ノ女ハ軽其夫貧家ノ女ハ孝於姑ト云心也家ハ貧家也　名ハ
花
我か二の道とはいふときけとハ白楽天の秦中吟の中の全句也
二ノ道とは貧家の女と富家の女との夫を論するにしたかふ
貧家の女ハ嫁けるの事ハ不足なきねまゝにて中事ゆけるも
縁よりハちまたをとらんせるあしまゝしき貧家の女ハ婿礼なとハ
きよくなきる所にて事なるまゝハその志をあらためたハ
婿あとと云心也是ハ将士の女貧家なりたりよりて式部にいひ
まうせ給ひし中のことくらいていふ心也
白氏文集秦中吟　婁入何ニ依て載也

天下無正聲　悦耳即為娯　人間無正色　悦目即為姝
顔色非相遠　貧富則有殊　貧為時所棄　富為時所趨
紅樓富家女　金縷繡羅襦　見人不斂手　嬌癡二八初
母兄未開口　已嫁不須臾　綠窗貧家女　寂寞二十餘
荊釵不直錢　衣上無真珠　幾回人欲聘　臨日又踟躕
主人會良媒　置酒滿玉壺　四座且勿飲　聽我歌兩途
富家女易嫁　嫁早輕其夫　貧家女難嫁　嫁晩孝於姑
聞君欲娶婦　娶婦意如何

殆し（ホトンドし）
おそくうらとけても
彼おやのふんをもかりて
此女式部か四ヶ月あかねし
此女の父将士ハ式部か師なれハありてかはし
いとま衰きまうしひとりしろと　此女の式アヶ事と思ひ入て其後かんと
こそまよけるせくそこみかて　女ゝしくかゝぬ袖し
むつくまてといひまつす　家のあと理運かる称と
まくりあまりて　此女四ヶ月何かあるもあはれの事とも思えも
あしかゝくてかひあしきりしとし

らしたれみ　私らしたまへる事にてハなほならし　孟日也
花鳥にわ勝ほかならぬ事といへるまてハなほ也
孟 前りいへる者清具見し　見給ふ事し
なりしきさいしとうちゝのまんま
見しより彼女の親のおやのそゝせしきこゝろなかりし也藤
式部の丞の親しきせハの人なりとなるに生ほゆんと女ハ物の外
なにとよくなかりしかりしきのあまハさやかに西に成なる人
なかんへの為に和歌をもあまハしやうしなりしき書む
とは物にうるせしかれぬへしましまして源氏以下おほ
やすおかれ君ちゝのの為にハいやうかなかちの物語は
ちかりしくちわしとうつとも　物式部の親し
私 女と式ハなのり式をくちわしなれとハ是ハ家世にまうせ
て何事もハ男ハ志さいとなる物し藤式部か親しきせん
川たゝ作りめれハとよみ何とおのうしとと心いつわりおほく
て見るし大事ニ男の子ハ世をきく物しとし花鳥ノ哉ニハ上へ
付て心ひそかに見れし作のこれのあめしさいかまとことなり

祇注おのことなりしれ物ハ何しれのりし事たかふき男ハ書き物し
箋 よくやみれあらしきいかめれつてよむ切りく次ノ親と見るへし
藤式部の丞のよしもよう乃或ハ家世まハいうまし或ハ一旦乃家ニ入
てもかくもいつにまいれ身ゆかすま男子かきもあれはさきもなかりの也
私云此儀いつくいつくかゝるきは後し物語し見ぬかきこゝろへきし
おりさをいかせんとて　此物語の末をききん為は以中将の
さうちやかしてて藤式部をまはしいらね給し
私 以中将の藤式部をまうしていかせんと
んきえかりし　ちのかなとハいかえかりしいかくかきあめしに
ちかめの日かりおこめてて　藤式部の物語まう給し
おこめくいおこつかなといかうてとし
まそいつく志くまつりうきかりし　物かうれまとは文語かて
まうりきうとし此それまちうそけくと面かうさうしゝてて
ものさすらよくちうよりて　いてへつきれ物しきあさし
うちをけおる　藤式部の北の常にかな見ゆ方みをあるそ物こ

しにあひ侍りたなり
あさましかりしや　常の人の物をつゝしいひかはしおこり侍り
とか申おもしきやうれしく思ひまゐらせつとおもはるやうにありし
らうたしと式部の丞のいへることし
又これ申しなりとも　是は式部の丞にはいはぬおもむき是を
ここにはけふして中後にはよし申しといふし
此所しん　博士の女しさかしきをみてかなはぬ人を云
男ノ字をさかしきとよめるし
箋云其人の身の助となりて世をすくすへき事を史記に見たりし
女のさかしき事をいひたりて　彼女の口を男女のかよひにいはま
よろしきおほしかけ口なりかなはぬ常の女のかくし心をいへる
いみ恨みてもその口にはあらぬ世のならひなどを心まて見るし
花の式部の指言はおのれにてかなはぬ事をいひけんかなはぬ
とうらみなきつゝしくともつしとて侍るなり
物をもうかりたまて　是は庭に恨みある人のおもはしく思へり
のおもひのなほしとはいひて我もこれにもかへしけんを思ひとかや
これあまよ貪欲なる人のいとゝいひて云ふかたまにかけて人を云ふよけれ
月比ふかきのやまひにたへかねて　弁
又私抄ニハ風病也　祇注箋云一月ニ腹病也　いひやうは腹病也
彼女の式部のまにへ文母をかねてつかひしといふ細し男めきくる細の様し
をし給ひのさまやうなとくし　旧　極熱の草の薬と服す延喜式云
八十種の草の薬の草中蒜ハ是極熱の草の薬也又食薬と韮菜と云
な　阿波云延喜式云八十種也
御說云蒜の名也　今案延喜式典薬寮八十種廿四種草菜と
いふをはあまたいへるは皆本草にあやうき菜種あまた草菜と云へり
蒜ハ草菜の中に是とおもへる又極熱の草と云事細し彼式にハ見え
きこえし但此服の式ニ供する韮菜の中にも蒜を供すると
自五月至九月不許と申事なり夏秋乃間にも是を供すとあれ
ハ極熱の草と云名と世俗にいひつたふるにや今の世にも申ならは
薬といふ常に是を服用せし物語に侍なりけりとも申かや
くすりのかはりに用ひしやうの事にもあり　しそ侍りし
祇注草薬ハひるといふ物し蒜の名の氣のあるもの也

廿 十五日にひかえて立て兼て用の事に心つくし
此段皆狂言なり
されあたら形見ともなれとも　まのあたりハ月来し立る事第一也れ
いひてといひて　又親ノ字と雨のありしと語り
ばしばらハ　何 新手なし
むべくもなく　義云式部か句と最讃よせしめんの句し
いひまして女しかれも立てゝ見するかたなり
いへる何ともハ　たやすれ物いひのさ句に萩式部のあまれ
ていひつんあるとも　あまれハ何としていひて
なくらけるたつらね　何としてもあらぬ袖し
何としてもや持参しまいらせん　式部れとうあまの袖などよもすれ
いらるゝやといひまん又此者よせ知ん時立より持へてとよし
句やうふつゝを　女れ妙しなりうけまいらせとつりいそ
萩式部のなや立　おうあれり女れまうりやたるし
ゆもくさんとも　萩式部れのうひなり
まりしやまもつきに　ゆくらさんもいとゝしくみまりて

とし用まへきにかあしねハ立れあのしらひの寺へもようそうの事し
言れたのまりひさく　いとくきたふようあんと女れいろを
うけくまたたのまうひさくとつて
もへなりて　無程し　生ぬのれとありぬへなりにまやうにあかひ
きへたひのもん出よりとりくへき合まり　あなし
萩式部作 あ言あとつひて　皆狂言なり
廿 何ゆの名のまひ立つれ夕暮に立つ見まくせといつくあやなれ
此者とやらん時はていつとよりあくいかし
愛来へき宵ともまくれして此者とやて後とみハまけりね
りこつをてうりやうとひたるの事し　萩ハ庭ましせうう 秋住月も
ど あなせこゝへき宵あつさうたの事れあうまりとひて立つ
此寺とうたあくあう立つまゐひつと服をろ間といふ也れと庭
アクとまへきさし夕暮とちより立つ目もくせとしある也
いうすつことの持まいや　式部か句てしけをハうこつけし
つりしつかねましとうつおりしてよるれ
まりつもか何のたもひて　あけぬとつひてといひのきへなり

色好情士女
さいて八追つきてなり
あふてのまをとしてまてぬやかへ八えか浦てなかりきてあかりし
拾 おもう立そふ中将へハえるまて浅ましとも いそのあきへきとも
さりけりなりけり世やなるかとし西国へのしまてのきハ和歌ノ義ヨキ
能治何あふりしこし
さひより くちとく 彼女こたへしきて世学てつりな
またも文ニのあるもりやうにくちとくよろしと式部語中し
まんなり
花 第十七段し
源氏乃中将のうらてこしと我式部れつうきとまいらまて
いつこ乃さうか女り 源乃此君なるのさうやうかやハよし
あくしよの須かへそし
おいてうふおかりとこそ
足畏 棹巫三峡未済苍 ト 前中宮王 拾 雄册 伊勢物語真名本 我思一車何
花 おいてうハまあやうにとていふてる染なり
弁 波てうにかうこ回なり
拾 またてにし浪寛にまあやうにとこて同思し真威と思う西めや

かま由しのんかし
むくつもとき 義云蠹ハ虫ちかきのむしあれむくしき神し
はまうしきぐくして 此判いやなるうにおほかえてかはん
うるおし也 不足の云なり
あまめかうえて 拾 深悪何ハくるしくまて世まし
あれこいつてむしとを此時そあそかてよしへまて君
好れあるあとい乃そ防日し
これよりあつつしき事ハさつひなんやとてとう
よつしき事とやせとまてうられせあるのよこそ作り
めつうしき事ハ何もしとうやて我式部れうしこゆうてやあ
まろく男と女と
弁 此段の詞し此頃の批判共てこうにて此をとかつうてる段の詞し 花 第十八段此段し右る批判なるし
義此段なりおのか上絲ノ義ヲ一変あるし
自けうふ足あるるれ事とさて世間へさんと
拾 論語云知者言未必盡 老子経云大弁如納ト
これより此者人へれとしへさしおけるあうへかうかまうへき

おりふせてもさゝハかなきし わつかにおぼえてもちたるハいとくちおし
私云 よろつの事をしりたる人のおぼえてもちらかすハこゝろくるし
さるハものしらぬ人のさかしたるやうにてひつしけれハしるまゝかなし
三史五経のみちみちしきかたを 河 三史ハ史記 漢書 後漢書
五経ハ毛詩 禮記 春秋 周易 尚書 伊行釈ニハ三史五経三千と
りきて三道ハ紀傳明経明法と云へし あきらかにさとり
とてとくるをあきらかにせんとし
花 女の男まてに三史五経をあきらかにさとりあかさんハこゝろあつく
らきやうなからんとし
弄 又一説 紫式部か身をいさめ大にへりくたりてよからぬとしてしるせる
まことにされともあらはにしらぬやうにのかれくるしき世にひろまる
をしへてハいくらわさしくよし
されとも我批判ノ詞の中にやすらいて 私云 此説紫式部か詞と於て
くるしとてもなきにしあらねハ此ノ所ハ紫式部女の
とあらん人の女といはんからに世の中にある事をしらぬハいかゝ
としけんとし紫式部か自紀(?)を以てハ史記と云文を読けるとなり

弄 女として世にある事を一向にしらてしあるましき 紫式部か女の身を
えらひ自然に知る人ハまとゝいふハ三史五経なとのしかたもいまをしる也
女事にも女の知れる物と知りたる所を事ハ女の事を見ても物知る事をしるへし
まことしきとあるましく人の世の公事をもしりてしるへきとて 私事をしるへし
耳にも目にもとまる事をしらぬハ人の心を女の子ハしりて女
みをもこにまんなとをはしりかきたる物をもみるへきことを云
されとも心にこそ 女 さるまゝにはこれか文をもとうてまつるへし
さるましき女ともち女文に
なかとおもてあかる事もまんなと云ハ真名也文字のかな(?)いろはの類
なりそのかくなかしとみ 一文字のうゝもとのもちとみえり
少さらにもなすともいはまてもあらす からへしとし
私云 書ちらしめハ字をかき過たしと申ちかしめハ真名を書
かしてこゝにゝちかひたる所ありて補し
此人のみをやう(?)なとまてにもこゝにも
此ことかみりさけれ事をいへり 弄 此ことハ文字を書て
またハよんなとのやし 私云 文字をかきてしるまてもなく 或説此人のたをやかならましかは

らさらん人とありいふことしよりハ人のさまくらすとなり
くらよそさうしとおもハさらめと
其名をも知りて思ひ居りつゝなる事とおもふに談すせきこハく発
少しゆるなり
私云うにそといふ事人の心よきハ思ひわねる事も人の見知しになりせ
こゝろゆひゝるらり　わさとめさるゝハ心よき事し
上らる孔かゆて　寿　寿後つきん人なんたくし人なるへし
寿よ母も妃わりの人く人なる　命後へきん人なんとくへし始り
冬れは向つりまてうるハおしきし
云のまゝつくれ　少年云寿をと後とおもつゝさんたけ
うらまて食見てなともうくをいまうしもるし
おりしさあら云ともはよりさるとこゝみて　少主古よりのさを作り
とうこかんて世々るいおしきし来にとは志私年をのうたみなり
まは思ましきわりし　少主云人の様絶もとゝうつゝ次に
きこなにさ時なとをよとり而るいまうしもろしと経とも迄らん
人よしも彼しなさけあし　人の寿なる後けるけんなりし也

このかなしさとをぬいはさとれ作らうきししも又宗人の教し
さら人き花含めけりし　花いぬ別れ花含る事し
五月花きよいさとき人尋ぬあしたに　五日菖　金谷園記屈原
右支載之異之　聖武天皇天平十九年五月
續云續日本紀十八天皇御南殿觀騎射走馬是日詔曰昔五
日節用菖蒲爲縵比来停此事從今而後非菖蒲縵者勿入宮中
花
五月五日之節天皇あやめのかつらとりて武徳殿にて行幸ある
内弁外弁ともに花含れにし宮門有菖蒲を献るもの女藏人後
食遠を群臣ふかうこ献りて六府騎射の事あり
續云推古天皇御宇始之同此事文久志く斯絶れ　口次第に載之
同西宮云天皇出御あやめのかつらとつけ　日節のかつらなし
給奏武徳殿におはしますれ内弁外弁謝座謝酒木御の節
會あり　宮門有菖蒲を献るを宮門有典薬を奉りて
菖蒲を机四脚をとりまて沽歌有れ惱れ前に立次に御監奏次に
御気遠を掲ふ門給花をとうて太子にまさつて女藏人花をとりて
主ても力ふ参し拝舞次に九を給ひ射太子かわらの下四千二人合集

十二人先懸的廿將裝飾馬出自馬出徐行不立一的十丈皆留次
記ス勝負馬諸大夫給酒群臣拜舞車駕還宮雅樂奏樂
私云御覽奏とハ大將御覽とて左大將ハ左馬寮右大將ハ右馬寮
を差添そ又弓場殿ハ左衛門の府下の[illegible]それにて是を又[illegible]
の事を奏せらるとなりへし[illegible]殿花見の[illegible]つりまて[illegible]
きまて[illegible]の所ハ不可及說也[illegible]西[illegible]ノ[illegible]小物へられ
[illegible]ある[illegible]のちろ[illegible]
(花)いあやめハいつや[illegible]
行のあやめも[illegible]とかめられぬる
[illegible]の寺の[illegible]回[illegible]出仕とたすとある
[illegible]まりて[illegible]の事ハ[illegible]つれぬよし
[illegible]ぬ福[illegible]けり　(花)[illegible]ぬ福[illegible]つるあや
秋の寺[illegible]とよう[illegible]と云[illegible]ぬと云[illegible]あ[illegible]若宮
[illegible]ぬハ[illegible]ぬ[illegible]又[illegible]の[illegible]は[illegible]
いてれを兩日[illegible]又[illegible]ぬと[illegible]と云ハ[illegible]
[illegible]日のあやめの[illegible]ぬ[illegible]あ[illegible]ね[illegible]つま[illegible]折[illegible]
[illegible]根[illegible]ぬといひて
(姫)[illegible]ぬ[illegible]ぬし[illegible]折[illegible]あの[illegible]ん[illegible]へ[illegible]
な[illegible]ん[illegible]へハ[illegible]寺[illegible]後[illegible]
い[illegible]ハ[illegible]ぬ　紙[illegible]同[illegible]　(弄花ニ詳也)
九月のえんに
數九仍曰重陽ト見周易　(河)九月宴月令ニ重陽ノ日兼ニ有黃花天數九秋
大哉可盡家貴長房云登高節採茱萸插頭折菊花浮テ酒ニ將攘ト
比災ヲ桓景暮而歸家內雞犬牛馬皆死長房聞之曰ク女無災
平城天皇四年九月九日幸ニ神泉苑ニ菊令文人賦詩賜物有差
寬平遺誡曰五月五日九日文人武士行事繁多ク不可怠不一俊
(花)重陽之宴ニハ　天皇南殿ニ出御ありて內弁[illegible]文人
博士とめされて[illegible]讀ノ字を[illegible]て[illegible]文[illegible]上[illegible]
[illegible]三獻ニ氷魚と[illegible]御帳の左右に茱萸の袋と[illegible]
御前に菊の花を[illegible]して[illegible]を代[illegible]宴の[illegible]
四[illegible]宜陽殿にて平座とて上下[illegible]て菊の酒[illegible]
(弄)花鳥ニ詳也次ノ詞[illegible]とことにいふ[illegible]の[illegible]へし
(箋)江次第云此儀次第之後於宜陽殿有平座　西宮勘物云承平
(河海云 九月ニ有忌月 無忌月ト[illegible] 後三條大宗 代ニ忌月ヲ)

用ユ日本ニモ忌日ハカリシ月タリシヲ天暦以後忌日ニ月ヲ用ヒトし

以後依御忌月無節會　同天暦依詔十月被行殘菊宴　式
部丞任者可預文人者大臣奏御外記藏人催坊家
私云坊家トハ内教坊也　音楽之方をまかなふ　内教坊ハ女の
楽を司ハ也　御帳の左右ニは茱萸置御前　立菊瓶　天皇出
御　置物御机　上置御硯　内弁以下如例節會　御参侶召博士　献
御料　類須太子王卿　属文者探韻　文人　次弁探韻　次取文臺置
内弁侍臣弁居講師　次講之御帳之東
是又菊ニ引物の哉之花高の説のりまて給へし
物しき詩の四季　菊花ハ〻の内し
いと由なきわつま　如　かゝれ折花に菊の家をつくらし寿　後
菊をよとまるハつきよそ事にて　菊のくれとも四つまつたるし
時菊をと折しいうりてある人まさ事し　定家の詠歌大概り
とゆ花景氣世間の盛衰をうけれ命のし云ゆらに四時ときる
かいりなる更逸よとし　かうりよも四つてさかうへし
菊の家にうろうりよせ　む　菊の云ふとりこと物て用し
さるすりても　少ゆ云云　五月五日九月九日牛にハあつん事に

まことにさてこそといふへんなれ翁し
後の世の人ハたのしくとも　祇園ニ候ひける女とも有事ハ後
の長寿をまねかりくと菊花のつきなれ時ますとりくれ一行事
とかなり皆是男女の教し
如　寿をとゝこ〻の事なとハ其後の長寿をゆゑあへきとつき〻れ時も
く〻菊花ハ四つとくれなかして後の云やよまんへの教可〻く
アントヨタウコ　あへるよそゝて　まう人のもろ事とし
菊の事に加えくハさそてなもおかゆる
花　菊の事につきそて此よりて　いとよろ詞のまろにて是不別人の
四季そてハ只翁歌ちるんハめ四季てうる人まさてみるう
祇園ホハ女ま因しく似合ぬれすとをいそう家ハ又一切を祈後折
方へま四季のて〻ひらぬハ身つきロてうりてハ〻すつハあるん
しとを〻悟くくむ〻すつの命をうくへまさているし是又人の教し
私云此義おも面らん悟くてぬまんといふる翁の相違ある
云ひけれは翁の四季てハ悟くて祈まんその命とをや相のとすおかゆる
寿　折るるとハ其に後まみ人ハたのしくとをみへまさといふ時花の

事云ひはるれつらん出てまいて云事有義集二三無常の心とと
みるとこしにふおもろうつると云とまつりと心かの羽たりあくれり
まさに花鳥ノ義を云し前後の羽まるまうつくとへし此段よくく
見ねとて七太きさ此人の事とはたり見きとかりて後切くれ行へし
如
其とかりて云事て句を切へしさまてもとありおもりそ後よりては人は
の句まてかし此説ハの趣向をとなおもへき事てし花鳥云ハ
分別なす人の心まてハ只無益なるらんいかやもとうくへきとし
されとて只用捨あるへき事すとおもふへきれ
答
此説ハ趣向をとふおもへき事ハ事とし此處ま心をみ云ハ不要の義云説とし
花鳥後ニ出ての句まうりて後其無益おれ人の心まてハ無益なり
前よりと　師説ニ但ハ無用と用捨して趣人へに便しと
義云花鳥ノ説趣へし其てかるの羽見ねつかれ心まてそ
いかなる人なとうつとうけらうう趣ニ花鳥ノ義路すとし
如云義ニ花鳥ノ義ありて深とし識て此説路さるや
まへく心ま表ていりん　弄　此羽　諸侍の数し
如
諸侍の羽し仰をつくへし

いなぬハいつまでまつらんと云　つう見つうや
君ハ源氏と人目うつハ義高なれとうけし君へ
いと白かりし　かつゆん
君ハ人のうつうれ
此事とやすみてみうくひなく云ひおもう間とし
答
前つれの心のしけ色不及あしと源の心ま云ひつうけ只今の
妙法の中にしうき事のおうねて子行まし事ねまとし子
となれとし中道をたとゆるまつるひろし　花鳥ノ説同
いろとけりたるうちまく
如　此君を心方に一定とふる無て給はん
中ニ云此一句を引　思さるしあるてきさうまうしあのあり也心
答
此君定義をもいて宗の真実の法也と定をとなれて中道実
相と云く之を中ろうてとき倫てをき物なりとて
たとぬし服とは人へし儒家の中庸の心とかられてし
中庸不偏不倚　無過不及と花地とに此まいうさ中
ヵ中し中へ中を中とて知連ハ多中行して其し色ハ失中不及
ハ未至色不及とをうれうかわし此ま過て宜を中と云し
まそくハおやりまたてと無よ　弄　おゆしま偏覚にとて　一月海る云

あやしきとは世上の人の事続き悪きのさまにみへし
からうしてまつは日の事まゐりてもなかれり
む　あらくしとしてあれ此晴なるべし
弄　森あれなれくらうし京れもれあらし御物ともあまいるなりて
日れもしきこととそう　箋同之　秘又同之
抄　永あられあるきこえ前にまへにしまうあり　あれならて
字多くうらしてといふ御よさる事し
祇園花の商れ枝の中うらの雲同しくらけしてとは前あれ
晴あより侍よやうくしても晴しらたとらし同じ事し
太との御へもいそおのしまれいまうて給ふ
おかしるのとなかこと葵上れ父大臣れ事し人のれ原
氏とりりして里侍とせしせ字なんと云ひあやおし　箋同之
大うこれあへるきさ　葵上れ侍のつまのつたれ袖し
箋　大うこれ母御侍しのまうりくしまうかり
人字多くうひと　葵上れ御し
字まやうに　箋まうとさて令るし

彼んくれなぞてるく　まさこ院の御の事し
宣くしきにかとひあえてし影し
あまり侍らりしく　箋　おめなりにて原昇和の人あれし
とけらくて　抄　げにまうまめるとそ源氏れなうれ四とは難きと字
きうくしくて　抄　きらひしくそなり
ど　葵上れ兄と中つの時ある中きひしくそしなる三位あ口て抄某
中納言君中務なしかられとてあへるを　ど　中納言君ハ源氏侍ま
下つくいのひとう一条左大臣の時の人にて中務れ君ハ其橘者なり
源氏よりひきもまうて大宮れはきうさくいふをやかのしんし
抄　此あへ葵上れ女房し源の云ひんし花あるよまし　箋同之
あれさにうられのまつる　抄　源れ院さ母し母れ時右一志りの里さ也
此文云源の里さよ志てけあれさ母し中納言君中務まかれ侍ふとる
おもとまうら侍て　抄　葵上れ父大臣れ源のつる母つれ御
おてめつしくてまきまいて
うらさけ侍つ是ハ御本丁てそて　抄　源氏れあつきにさらう
そろまうもうらこられあみさ母かれいちとれ御本丁とく

今てまし〳〵にしれをいてしてきこし
あけぬれと　抄 源氏ねたくいおもほえなれと未下れとへてたまふ
源氏あけさりとかくまかしらとけておほえなり
おりしきるくらしくろきすの袖しされをくれまらし
人てまふあかなか今てそ　花あかなし皆しくてれすらに
抄 あなり今ハあかり今し夜ル程紅下ゝてきく所もとりとう
くらくらくにはらおぼえ　源の服各まうり　ひまりまうし
いとやをうするれ御ふさまひなかや　草子私評し
うちとこれいおそさ今なれハ大臣小夜ま前めて今の服暑
ふまりつてあけまかでにらと源の御さ白旗りの中ぶきまたけ
ありまいしをいて弁ニ御末下毛ゝてとハ源氏なりしこ
れのみな程りなれハ葵上ハ下ゝとへてておほえなりし又源氏此
あなりゆをみし八大臣との間を申してく此さめとて
又あけまふてしれとぶれはとりしとふみえてをすれと
私云此御義いまてめすおノ義よりあとふり義ノ前とて
又須源とも源のうらしられて葵上下とへてておりまいれ

れ御まれやしかくらり始てら中ノしく程りしてあつきにとふ
うらのすてをし　此義　弄ノ義しめす
くらくならかりしにこよひなりし乃ん　中神し　又ハ長神し
中神し或長神両説れ　花行僚是し
天一神也　全櫃経云天一立中央為十二将定吉凶之立
中央之故号中神凡仲方古今所遠来也　見南書暦陰陽雑書安家記
件塞方不可宿云々　家栄按又永久四年十二月二日継殿
以家栄依法性寺殿仰令主進云天一方俗謂之長神也己酉日
在艮六ケ日此乙卯日在震卯五ケ日　對庚申日在巽六ケ日
鳥丙寅日在離午五ケ日　雜辛未日在坤六ケ日庚丁丑日在
乾六ケ日　龍戊子日在坎子五ケ日　亀
自癸巳至戊申十六日在天上　箋云中神ハ天一神之中央
仍中神ト云一説長神ニ方ヲ五日角ヲ六日　天ヲ二十六
日仍中長ノ義ト云義し件方古今人ゐまくすする所し初日ノ夜方
あらへあるハ次ノ夜ハいまたにと天一不日更件方可正方一辰し
假令十丈者以一丈五尺六寸ハ六分ノ正方とれ其ほかハ忌ニあらぬ

三光中神しよ南まし
内よりハ塞かりて　内裏よりも左大臣の里亭へハ中神方ふさがりし
さりしをいハいこ違ふへきよりなり　花　傍らしハさるを物しと云
初しをいハいこゝ見こてハいろといこ修け服方と云し
二条院ニておはしまさち　桐壺の更衣の里の亭ニし内裏より
九大臣の亭へハ二条院へと同方といふし
秘 花鳥河海等もさこせられ侍りしうちまて待る人ま之但思ふ末巻ニ
いひりて用る所あり　花鳥の義能々へし
弄 花鳥ニ詳し　少女巻　花鳥の院より
旧 陽成院と三条院と号ぶ脱屣の後御仕院二条以大炊御門の南
油小路以東西洞院以西し京极の名跡なし准后ある事一卷十ありきし
花 二条院陽成院よ准拠せる由河海ニ載せ侍れハさりてこそ侍らめ
と云ひすふ所もにいりしかうるとりしまゝす侍りそ所ハ桃花亭院
の以汁なりの乃つのをいてる河よ二条より同院のたちまちてこせまふ
ゐと院のことにいひるすれハてもそをまてをふ町よ二条同院のあるら
よそろくまうしや二条をとあへ色らかそて　西洞院をとよへハ　ゆるすよ

のたりせまのへきそてさそし侍り但二条をとあへ色まりし陽成院の
旨のたりとゐてらこ条ちれハ西洞院をとよこさ南まとくう
せまふと同院の古跡とうるせまゝとうのへきそやはふまて陽成
院と二条院よ定め侍をハ又人もりりすまさ事侍り先業卷ノ
二条院ハ桐壺よりまれいとみて業平の中里ハ桜宗大納言の家六条法
皇京の御すりきて六ウ条京極しられり陽成院まてハ左り侍に
為てて四よ侍をしハ花をとハいりてりか中人へきり左よ法皇院ハ大今度
の時所りまて旅ハ二条院と号しき業花物語の第三ノ巻よ見えそれハ
桐壺巻ニ里の夜侍りすりて京ふよ此所をと引義せ侍りそれハ二
条以小京極以東し六条との程へよりきを侍まちとて小路いつとまた
京極とかすりそてもいへきんや侍をハ安院の以りの院の
いこいりといハ法皇院ハあかし二条まり東洞院と京極とハ三
町をつそてさうりるつそといりんよさのこのちうひハさまりしくハ
法皇院を二条院ニハ准拠と侍りへし　少女巻云花鳥よし
義云栄花物語第三さ南りれよるてひよ云永祚元年ニ大臣ま此家
盛明親王の侍せまひりし二条院をいつりし伝りことま侍る

いと若う見えてとよろしくまもらせ給へと御後見もらうたけにいはんていふ
いとしうおぼされて来たるを思ふにいふへきものにあらす正暦元年正月
摂政家二条院にて大饗せさせ給ふ同年五月太政大臣此二条
院は物性あり西東三条院へわたらせ給ひ二条院とは申さす中にも
なりし也されは法興院と申せし七月二日大入道殿薨去此法興院に寺
として進め給ひ勅により法興院本名二条院と申しし盛明親王領
二条院天暦母后御領二条小路川東法興院二条北京極東
東家三家本号東二条天暦母后正暦二辛卯七月供養積善
寺也兼家本邸仍号法興院開白

箋 不除世継に従ふへき事不定し　勅物云法興院之本名二条院也
盛明親王之領也此後兼家公修造しとゝ其人暑(?)見えす正暦
元年也此以下前に係るへき物なし

箋 河ニ八陽盛院花ニ八法興院のやうしと哉も当流にては所也　但と
桃花蘂葉に云はれは花ノ盛ニ茂し河?菓花物語第三に法興院
と二条院と始は名付けられとあれは法興院にて給ふへし
いとなやましきにしもて　源氏の詞也

いとあつきを御休なり　御前なる人もなくうちとけて
事を例よりもたるはあつしきこしとて
紀の守にむつましきもの　紀伊守源氏の家人也
伊予介室相良ノ史　紀伊守　蔵人右近将監　新将蔵人命婦書
此三人皆うけのこまるへまつ　あとし
中河のほとりなる　中河ノ濱也　奥入云見李部王記今
箋 京極河也　古人中河住むる処いの中河のほとりに云又左行なて紀
箋 菓花物語云中川なとにすまゝ給けるなと東小坂条し
旧記云京極川二条以北号中川又東川賀茂河西川桂河中川京極川也
む 菓花物語第四云中河に花本院家をはしめて文とも多の字
まけのかれ多トとなしあらん人の住みて侍らむ所にあらむと
なりていとおもしろく作りて庭の作りさまもいとおかしく
ありける所也とありと　今案此物語の中河の家は紀伊守
の家にて庭のみやんさいなとみえて御すゝみに有ける
菓花物語とも遠からむや　箋日記し　秋日し
みな花の庭にて涼しきかけに　此詞をえて読古今之光隆

此ころ水をせき入て木陰涼しき中河の里

いとよかるへし　源の詞

なやましきに　少事ハ悪氣なとゝいふやうに

源の脈氣し前にもなやまし事とある

うしなから引入　御方なとへハおりて門より下車あるを

さはなくて牛なから引入へしとハ源の忍ひ給ふ所なれハ下車なき

しのひましきつゝあるさまなとのこゝろ

思ひしれ御方たかへなるへし　此段は源の紀伊守か家へ方違

まかりたまひし思ひしハ源の思ひのほかあまたありへしと

も 源氏君葵上の御里へ程へて久しふりにて渡り給へて方ふさかりて

思ひ外へおはしなん事はいとほしくなして紀伊守か中河の家へ渡り給ふし

如 源氏の思ひ人の方ふたかりたまハヽ自然いつくへとてもおはしますへきそれともまたさる

れなとハ御方ハえわかたとなくをさし外の内裏のさもしてさらひ

て中河の家へおハしますへかりつらんさてこそ源の

つかひ給へし　紀伊守と此段の事とを知らそなるへし

詞として書の子の趣なるへし

紀伊守仰事たまへハ　如 今案此御方へまかりて御前を仰らるゝ

うけたまはりなから立てまかて　まかりなから退し紀伊守出ん

としに申すよりなからはゝかるてかけへ退て立かへり申し

いよの守の家にの事に　紀伊守か父の家につゝしむ事ありて

宮腹の君の宮のことをなけゝるなるへし

なめけなることやはへらん　は　消しあれし

紀伊守の此詞なり

下になけくを聞給ひて　紀伊守か備忠にて云事をなけくを

その人ちかゝらんなん　源の詞

如 女ちかゝらん所こそこれまさる也されとも

それとをからん旅

紀伊守の心なかるはけなるを源の心をやりて云詞

源の心を末下の様に初んとしてこれまでもあれとの心を

けによろしきおましにも　清宜し（キヨヨロシキ 一本）

席 日本紀 御座 日莚 史記云衛叔封布茲（シンミシ）　注云 茲著席 蘆席 藁席

毎 きのかみ人をやりて しつらひよそほはせけれハ

ことを急くいそく人へやりつれ但　源の詞

如 此詞ハ紀伊守ゥ詞也 紀ハ人をとらかんられいうべきと云源の
詞を語てさやうにおもしめさんまいらするのにて正と云義也
人もしらせ侍るハ紀伊守か家ヶ方違へさせ給人をつかはし
箋云此詞諸抄紀伊守か詞といへるハおやまれり紀伊守ハ伊予守
の妻なるをもて紀伊守か継母なれはそのいそとなと源氏はこ人ちらん
こそもうしもう人々もの語と申おまさらぬ女人へ我守まゐ
らんもすき事なれは令そとひく人をもしらせやるなり末の
詞ゝ守か詞にて又とまたて人て守いまかといへるまてよし也
なり詩抄の説おやまれり 新ざりて女人への詞といへる義ほ
てとしかるかること 紀伊守か家ハ源の為にハ伯あき不し
なとにて也見にほと 蒼上父たたし
如 あやしのなとにても人の事ハなと伊予か方なし
守にハかきて見るま也 紀伊守し前よりしきおまへし西
みとといてく人々しらせ侍るハ紀伊守の侍也ともよろしくしけり
たん局の東おもてをもひ佐まつらせてうちやめ佐きつひしけ
人の家の寝殿表より東面と暇の方にすへしたもひあけさせ給

きこれひきうつし心いふは紀伊守か家の住事書の中に拙てとゞまる往下しうり
ありの内もしよりて 中河の前の当しし
かね涼しくてとここそとてあるを也見かき
如 是也夏衣あさミの往おり 給ひ寄るこ此時見もさ寄る方 老多会夏の気也
とて方に当の好りあかまをいふて六月ともとし傍かしれ 此末乃
詞に月をあらしかよつていて也ハあ五月乃末なるへきし
箋云先年六月とよ只五月の末しそこなれとかなれはあらはれと云ふ詞の
かほし当の時に何かの夏の季に入てかふ(?)
せこなふて(?)すわさといふ詞なかし
ありて 中洪乃人にし
ありとをさうそりても 又われのことなく中の体へて
ありしハいかりやさうるをてなれよさきとめまこゆるきれ
便りかうあかりあけまみ 凡信 画香 伴ノ板ハ並相接間
ありしハ紀のもし前の詞に偽とてを当たとひわかん(?) 西
おきれハいそ乏けれかと云ふ詞の義あもし給
彼中川きも(?)らいう 如 前の不定に中れ不と拙ものこ人

きこえまうさていひくへきことにこそといひし事
とは此家の主を源のさたんしてさてうちあるへし
といひけれはましきたにゆめおきの人あるましきこと
伊予守の妻にならむといへる事 紀伊守なと源氏の空蝉を語ふ
於中納言の中をさなきはを 大夫の君 帚木巻にいふ小君也 空蝉の弟也
空蝉腹伊予介妻 爰に空蝉とは父の衛門督中納言也 日本紀
はなしおもてなき　源氏はおもひける方は寝屋の東おもてされは
たちかへりて伊予守の妻なとは此おもし寝屋の西おもてよ
北しされとも源の心を何のかたに人の等かたかへりてゆかし
きぬのおとかひなかくしそして　空蝉 日本紀
暮てもかくし不たゝりきくへきとかゆめかし心みて方のこと
む 夜さり人へをさまらぬよからぬ（小袿）又まうしそさるあるまそとある
つくし給ひ其うちきぬの青きひと妻の事に見えたり
松 筆あて此女房をと御尤
其はなくしときゝ人の行に青八ぬきましてきてと云説の頗ひり
ありし夜もはなりかはねしして下のさのはね八抜引しとまのへし

又思ひてこそおきなれは青えのくてはけの一かくれ
思ひやり給なと思ふ　我さかしうあし
ことさらひかれり　は ことさらに物に似す物いふかくし
ゆかしきを何をかうまれは　女の心なる方のうとくし表方は
あけて見るめかし紀のかみのあてかいきかりとておちつき給へし
ゆく人なしと　紀伊守の心くるしらうせとし無息さる秘し
もろうて　は 勘当 世継に沙門もおりしもしてこそ
松 日本紀に贅債とうきりいきとくとをおこたし
筆 贅債し 又唯識論に贅ノ字をもつかうて用ゐる小児の妙を
とをもちて世俗に云無息の称いふ心をしるへし
ゆるしのこしよ　松 障子の紙といふは人なるへし
筆 紙のひまより見や　又世云障子の紙し又障子の下
とをみし或筆に障子の穴よりと見ゆるまたを不用し
やすみよりみて　源の立ゆかし給ふ称し
屋をうつは御ノ字の四の文ろくをよりゆめかんて
見る心とおほゆること　松 此女をして

けちすはゝやまつとひらく　伊勢守の書なりかう乱ませ
たまのまつとくりけりしとハ日霞庭のうちの母屋より西
面へさし入てのほうらむべし
うちきらめきさ　恥辞　万葉
かう神ゝなりへし　けさやかき事ハ源氏の代さし見
をとへ出る事あり　いとね事しの分し
いとハとうりまめちて　けむきの姫よしなる哉かしゝけかり
まことまふ庭んてきるの　え服の衣を葵上え面ひてあるひそ
亮らしき袖の打ふしまたハせなれ女のかにハさりく哉とし
よ浪ゝハ浪し　資し
寄にかうなとしらて
ぎれとさうへき浪まハ　如　さハあれとも浄西ひいたりきハ
あやてておもと　花　夜つるの事し
まけむとつまつく　思あやまりの何はうかを
あとなと家の思よ　かく後之門夜童よ由麁よつるかと
をとへ出るいひ分んとやく付るしいりてはりんとゆめやまり

あくきりうくしされとも此所を夜童の事ハいとねし
式部て家の姫君に権奥てゆかりし
伝 是より権君と思ふうと　女院事し　桐壺帝の弟
花 桃園式部卿　権女院の男末まに女院の如く源氏といふてこゝ
伝 桃園式卿て家の女も姫君に帝にみりよりしゆかしけ巻に
女院の立のよく後徒み事りかうこのよ　更し枝りの家臣の札
ぬ如うかれむの何りいとやし　ねゆんとも更し打りとかへ
つうハ左るまれ巻こいうつ何をとぬる也此何の方ハ如法す如くれ
事 権女院の事さる事かうし　なるへし
如 是よりさんよけ方あり　姫く子抄す付り此勅此如法の権し
姿お前あり
伝 方曲し
如 かたゆかし
室ハ方をり姫うと云う判かれ許すと正様事を如くさるし
新古方といきてなるぬし是にゆかめて後をいさしう分あかし
くけろさを申しく云をたゝけら其事をる
伝 かゝりくはゝを事けれなるまゝけ但ハやかる事とハ将信の神し

む かれり對する紹し　紫明抄云あらうなかしこと
見にろてとい物のたきなるそうくこまみとききとらふかきもん
とするうと女房のくまいこれもうしかくね事し
少云動の句　或抄御説相信ま実ありハつままやうま候
まうらしそれは翁してあいうまきをうけなきハ見けるてし
これはよりていうれ打ゆく人用意なしと云る
女 源氏のたまふなきもきこえもてし使めてくなうまる極めし
さしも女の用意ありくきへしとし人へなり
箋云莫傾聴と礼記の職なれハ源のとうゆのとなる卯むか
又莫言人之短已崔之もちいましめなれハ女房の源のてを
いつて用意なる事をそうし侍し
守らそ來て　紀ノ有仲前へ都まてし
くる指つり　餐膳なしめてはる物すといふし
さう路くけて人　焼紙し
とくうちやうとしいふそハ　旧　奥入ニ和加伊戸波止波利帳於
乎多礼太留平修保支良子万無已介世乎良以尤可奈介字

可奈令与可无安波比尤多宇加世与介　无安波比尤多宇加
世与介无　催馬楽 呂我家　我家とうけて王たちんの曲とゆうて
なにおほしれさやうにきこゆるし　源氏君れさうかくれんりてるそ
とれよりそおかしきこと由せむとたとてんとらうをしらて出あ
りれなる女ともれなくと空のすて見いかれすみ祠しめき給しき
あらしとハ餐の事し　掬紀ノ有ク何よくんとも見えうけるめ以て
けと中仰るハいうやうなる法さらみをまらしやそてよるうる人ま
ともえ給をねよししと言へなすらしいるまても催する事の我家の曲ノ詞
催する我家の寺の詞し今源氏のすわハと東紀人ま清るひ
都しをまうせしとしと見いまいまつて
松 私云おかましことと王氏をいうる源氏をと皇子の事なれハいるかハ源
源のかうす王まはそひらつれくとをかうすまて
さるかうれ　さやれんりまりしもあくハしと我の餐應曲ともそまりしまし
なかよるをとも　ゆよりれんとしもそれ候をなて
松 まつり人まさ女とをうさまとし
箋云紀ノ有些昔む寿指れとさかれて何ようあをとと云詞也

そして山海を走りても猶え尽きはさらなりいかにもあこんなきたし
村々ひあしの中を行海をとりおかれたるべし
もしつきの花おもし　和 源氏もうらに新のうて
是なれは涼しきに神の源氏なる月夜のしき
ありしの子とて　箋云紀のあるくもしさし多くの子なきには
川て魚鳥は夜るに人をも走りからめてあれともされとも前
の術のうゑを定めより書し
とうハなる屋上の前ちるに　弄　問云軍書春、伊予簾の家の屋上
もえきよし見えてらいきるの出なかんとは目へきかな
一巻もしかも人の精理にてもと或ハ地下或ハ屋上にあまさうらて
其子の童屋居しきると書屋上とあし又之地下にてとこ
伊予簾の子
私云翁人の筆によまれん只その年をもて見るへきし
箋云紀の中の事翁人の吉事の筆し
む 伊予簾を父といへるハ出書を識書門しき故にふりして
事を父と云う須下春に大家を聞といへるし此例し箋同し
あしろみて十二三なり　旧　雉姸　日本紀

仙家云あてとハなるまし時もあてへと云すあるくなるへく
箋云室町の事は奏小君と云将中納言右兵衛督なる人の子に
後にハ左兵衛佐と云伊予守の子なりとハ俗呼にちゃう一朝ニ称
称をもあらわすへし
いうまふうれ　去聞ニ源氏紀の出ニ問ひのまて
こゝまハ右兵衛督の末の子　紀の守の巻ニ弱し
あつかる人の　うつせミの源氏ニつきそて
きえなとして　弄　あしきりにほりて後をまと一須正河
但義ノ義さしと濁りてよめり
まくらしうハえましらい　まうらくまうハ速く
紀のかもなきおほる屋上あるの義も急速なるへし
らいハ屋上のましいうの事
あそれのなりや　源の翁し
はあやきらや　宮鍊の事し小君を指て姉
まくらの　旧　其人ハ翁下より御し段其人の御なし
む 随うとハ源氏あるく云ふてらし又翁下をも其人昔にしたかひ御下九
云り

如 うそつきとこひまつ露しやすきといへる不おもかし
後のおや　　　　花 継母なり
如 さいけしハ此娘ハ紀の有常まして母めて御邪ろとし
さすん御かたとやしほ　　紀の有常むすめに御かたの所なし
ふけるの紀おや　　似合しぬおやとの所し
うへすてきこえしのしをまそて　　父有常は成田へ下すなん
此のうしみるよししとちしいゝしと嘆き御てし
如 父そこおつへよりせんとやせしいてつまて作まししは
安倍の書まかしかうそて哀れてしやとし
とうれ涙れおもの　　　源のおもしやたの所のなし
あかすなて　　　紀の守朝し不忘しんすれし
河 不忘 見むは紀ノ有常おもの此外哉ハおかりし
或說無のれとあやまれり
世中といふありさのとて作りのとてそし男女ハまさる
まさね濁世なれんか女ハ濁世ハうかるありと紀の有常朝し
伊勢物語はいてつや　　源の朝

弄 乳蝦をそし作からんとし
君とこうからんか　　うしろ北おかつもしのなし
女 伊勢物語のあとそうつもとハまふとし
いとハまさくし此志とゝしそ　いくいよりの紀の有朝し
弄 源氏君の両をときすり私ゆと云し　義日そ
如 をこしけいてさそといへんハ源氏此作者まそていかつて於まり
私のとこおもの作し會尺しいへりと句を切て後一
もちてしきてとく　伊勢物語をつむとハ似合ぬ事と紀の有
をたらしめくるとしも無用とかしくし
きのとうも博ゝとうちれ　　源の朝紀の守ゆとをしめく
伊勢物語のへれそとも　あまさおもへし
おほしめそんやふ　　弄 紀伊守もすまりのなれと伊勢物
もこのとハゆかさしとし　　如 箋曰そ
此外ハいとよしまふつて　いとのめとおもて源の宣ゝ朝
いつるまそて　　　源の朝をよれ居る方を向ひのみて
箱志かやすし　　河 下屋雜会事し

黄山谷
杜牧
一生無處度

〽紀ノ守ヵ羽しありや　ハ新舎し
えや打ちあし侍りめるとまうける
つれ打つめるぬうしへの宮ひあと立へやして乳母橋し
ゐひさうて　源の御供の人々し
きのこたゐり侍と　真の東谷てたうに秘たる称面白し
思ハとけてて　守源の体ま前つかさのすゆ思すたも
いふうゐりしと
　いゐりし吟吾所の一ようにいまう思しをうらしといふらん
小戸のさうし　東おりて此少のうきかう人し
かくしの人々　うへせ之れ事し
あるきつる子乳し也　小君し
その宮所いうる　物うけありし宮様と小君とし
いうへにおいしまれそ　弟　宮様の羽まいけ長帳し
小君ハ源の御前より御りて宮様よいろくおやう侍ときと思ふ家し
これて申しゐる　を　小君ヵいへしと　是又帳し弟ノ筆
と同し是ハ宮様の五言まうりしとハ様作りるうし源のるまと

御前より御りゐれも小君ヵり思ハ羽し
宮もくとうりなりといふ　是また宮様の羽し
如うしる乳羽源氏の体寝覚へいうにちうらんとおのゝか
さよするてうれもしきとし
称する部之れ　源の御前し給ゝはいゝ　うつそれより寝られか
きうし寝お記し多かうちけなうき部し小君ま似通ひし
いまうと安所ゐり　小君しるい婦ありし姉といふし
花　宗冨ハ婦まそもあれ女とを申しに法し古今の序よて
たてきれとのえくをも照大神のことといふう天照大神ハ婦
よそまし申せるも女体ゐりゐし
ひさしにいそれかりのこゐりゐる　小君ノ羽源氏部をうに称
給めてうきうるし前るに女房申乳羽地ともやまれう
称云前よいりくよ称こしまをなといふと弟に宮様乳羽と
云小君乳五言よりなりにいふれとあれ説紙け侍り
兄そうにいふ　これまて小君の羽しみそうハ宮ノ字し記そ
の侍云也高不少つうと云より源乳御梅称をと小君乳侍るし

ともなりけるに　　うつせみの羽
いかに見まつらんゑを　　源氏より見たまへる事を称し
称しらんとしめらく　　四とめては源氏のかたの見まへず及し
花 是は源氏の君の空蝉し給て四すかたひのにて空蝉の
羽よりなきかのひきけりしとかひまで
ものはいらに　　小君し丸し
河 夕良まて不動て
女君を　うつせみ障子くちし付寄まて源の推し給て
さらしくらをならひありけまゝて　花 障子は霞屋の女屋の
南面を小面とも中とも見えてうつ障子しちらひまなとは源
氏の君の面ありて此ましとちらひまなにをいて
和 今東の源の霞下ま合かし空蝉の方は東し寄くせ
よりいきちらひなりも義にも此南義と哉く花には源は南面
の清をかれはちらひ見ゆとちら六の近一字書とかめ
如宮 此南義いつまでいつさらひあた事羽か霞屋の東
面そうひ明させりそめの此院をうひ寺うりあす似は源氏

此霞下は是んてんの東の小さし空蝉のことは小面の人は
すらりひ見ゆと云てつ此すらのつてて此障子にちら
にうとつひなはれのすゑ此少なさらし此あるちに人の空
りひまうにまを東面の少のうちの陣の障子も不審あるにや
あへうえまうや　うつせみの霞屋にと源の推量し
中将の君をいうへみて　空蝉の羽中将と最もし空蝉姿落
つゝまれて　うけをしれつくにえあり
あもしれ是のに　うつせみの女と是れ下のそんすあして
いへよしと云は源の立宮ーし見る称し
是すやまゆみ打つて　下屋ま源り下りてし
木丁をさらしくちにはつまて　中へ通りて此障子の
りに木丁を立つてけ如何　いてとはうま
あつひはけれ物を寄られは　伊予の介の家なりかりそめ
ゐよつての便にくち称されつまあ
ものひし給ゝ屏　うけとえ此寄ま是のつくまつれた
源の空をもまかすへし

さやりて　以細々許　世俗居　かて　夜こし　小蝿
いつまでもちいさき心つし　源の宮蜂のまねをわしやるし
まねをしやるまて　うつせみ源氏を女房の中ゐるとぞて
わとめつる人の　発より宮蜂は源のしのふ詞し
中将めしつきはかん　源氏君は此中将の君にて臣下は中将なれは高貴の御宮も
蛍　木月之　祇注　源氏君を少年へはうつせみの中将はいて
みえて女房をよつを少年のかく歌は御身の君中将のかてた
りしませはられをよひ給ふあはしまよりめてのみへるし
人生まぬおひのまつし　源氏宮蜂の事をおひよう
ついまさいひをよねは人生まれおひと申の名ひの色
しておいはよひよせまつてこれかしてて宮人の詞し
とまかくとおひよられをて　うつせみのあきまれゐるつし
やとおひゆまてて　まこと　つあしゐる袖し
うちつけにあつくらね　源の宮まて宮子にいて人生まぬ花
れたうしあふくれまひこしひ思ひしりまつさ御かしと
うちつけに辛あるまてうつせみのゆんとほしまてつし
蛍　うらみけなるやしふしそおひまつうめ秋はらし月のおひ
ゑふよりてこそして聡此方ゐる人もまつまてとさつ何かれなき
つ宿わつをまらうそ　ゐやれるとゐる人あるの次てと他
蛍　まうとみつて浦き　口さし　にきめんとのまつて
鬼神ともあしさ何もしき　源氏の袖し
いろの鬼神とを画つきつ人々枕し相童来のていゐる
あいうるをみてもまつしきゆさといそうなれと源氏がはす
もうたなくこに人々も　宮蜂の口かもされにあいうしん
もえさしわしよつきあるつかう何かるたとなかさて
云是いよりはまおあしてあやうつおあるつうてのなおか
かうつとえひしく　あいられさ宮蜂のえむゐあゐうそ
なひきもまかん事はゐるまつしき事とさかし
人のへ人ふつれ　うつせみの詞し
あなりしく　筆宮蝶はんし
かくうしく　うつせみの詞し

源氏のうへかくれ給ひしを口おしくおもふ人々
おかしきさまの物かく 源氏也
身をみなみな世にこもりぬ 源氏の親しかりし人々也かくれ給ふ人々もありし
とらへつけてかみ中納言の君の遺言は人々は今はあるましとて
おなしかたにはあらぬものを 源氏の御中納言とかたるかたり
いかなる所にてもうしなはれたる事はなけれとも世にあらはしてはおもひかなしと
御さしおはしめしゝ法定とも御心にかなふへき事なとさるにて同し
まかりしかく うへを源の御前にまつりて行はれし
ゆくゑしれぬ中納言の人 前かうかた人の中納言の君かい
つかふまつりし人の中納言の人々は源氏中納言の君と源氏
やとはれたり 中納言と源氏の君かたりしと 紅梅
箋云宮殿の中納言を右か人見し此中将を頼みそちかる
てらうへきものかたりし此義なし
あやしくてさかしらになむ
おもひよりぬ 中納言の源氏なりとも見
おもひはかりつゝまてし 中将の名申し

なまくらの人 つきし人のし 次の字にあらすして 談し日次ならし
これかれの人のあまさきなんは 箋云此納言に合点し
御中納言の君の日給奇特し 一条にてあらはれし中務は此
の宮経の夜昼とも皆知るへし 物ハ宮事の姿ハ人の者也
そなへてあまたにふつき 不とふ 見ゆらし
四ときのまゝて 志つひ事れは 宮まて中納言の心にかよひて
あまつまに見れとて 源氏そまして おもはしきほとは人々
式説下 もきみれとも 見ぬとさして 見ておもはしとなり
志つ人の 弄々 志つひ事まさに おほやとを
とくもなくて 無 動しうきもなかりし
それなりおもはし 箋 姫ハ殊さらに源氏の寝殿なかに見ハ也
あはれき御ものを 源の中納言のもとにて
女ハ其人の心つかひ 宮経の中将の名のりましきへ 乾斗也
いとおもしきれと 源の御中し
けにこよりそこておもひ は さりあはれて
おいとおもしきに 見よりかの殿の人申し

くすかくれぬ物からとし　京極の詞也　筆如此
私云猶いと何さましきにうつろふおもひなりとそとけり
うつさまの詞とみえてなを遠はみえまかし
おかしくこともなし　同　なし
いく度は光ひのうへきかん　あさ小深のうら浪おもて給ふへし
さりにあさくは何ほしとおもひかしまへての事なれ
いとやうかれきてうきて　私　身の定からとして
祇注云物をはさうの事ハさまひのほとりの松の日と
花かとは上﨟下﨟のきりをいつくしと不可説とあり
箋云史書の文字うへは大事也しむくり定て二更なり
うへ事なれとおもひあれつつ淡雪由うちえし花ノ筆書記とこ
としかも次へ事と　同　押立し
無理なりとつけなのさこと深くうしと京極の心にて
思ひよれは　京極と心にもしさいと深の方に
よるきりくまとしてね　箋云うつせの詞と源氏深し
て世の中を思ひしはいましまつし

うあてとそや　同　初春し
ゆくとしなかへたる　深の世上ともいとひ知りゆかへ出
なよこれのかつてのかまへきし　深れ世のあさき事と知りかへ
とひつやうすのなれたと　家は物の人
の理といひの人むすて自分かすのかへ　家にて源物よ
のかなた物しされたる咒様あまい地ふくきて
かさんかとの世をとかくきれまへ　れてのすみ詞し
うたかあれはすうて　同　深しあさみあむし又但ハ公
やあかりきつひおとさうなし
箋云割ロイスルもし物うくと深ノ字くと出来ものハ其義不叶進不可
初へシナヘトシ氾ノ又雨東の物語の西の方式部と何るあまと哉と
いつて押止の事し
私云但ノ字ハそうむしとも使しかせくいひし又序の陽し詳とも
是ハ割止ノ前に叶ひ了と云　一
とりすなかつるひ　京極の何さしりハ不理し源氏筆
をひのもしかへねと源氏の京極よ不理をいさなれのかへ詞し

うつくしき事にもひかされはし相て乃様と付て女の心を
庵のうちにかくいひかはさんと源の心をよまし
いと見くひたなき様なる事也　宣旨の心の源氏の宣旨に
乃理を付たまひて其末のこと女の口に庵かきこゝ物の上
まそは世にも少らひたき源の心にまかせたるにあらぬは
て文化の書なるに如く身を妻をも心深くかきなさんとは
またましき事と身を早下しておもひ只信おもはれ
心つきおかさき物なり源のそひまかてなきもうかへ
そひたまし女は無理なとしていらぬことを思ふ心なひ
りかすまて文源の心やりなにしておもはゝ身を早下
しておひしものふ事を打まかせて貞女の操みしるなり
さかなれともよしとひとかへ　信ありてまに源の心に
まれとも自家をと定まんよりは物思ひもあれにいはい
心つれならんいふかし　かしねまと二つにいひて
人このゝ心を庵さゝめなに　置しから蜂の術又心得ひとつ
なよかけれ心らしして　川哥二首又一首思し

与
おかけのかみなる人ゝは初句の引きにかけて物ぞ思ひける
なかなかけはなくてなく付しけりなかりけるは人にもや
つらくてもとおもとなれぬ思し　私云此哥に不及に
箋云 集者勝強といふ　少言こまよ句はふかく句と云思し
わかつらしくはあまて　女 わかいそもそもはなをいふて
箋 おもしさ思をいふ詞まうけてころへ源の心
なりとかくうとまでしき物すつもりし　源の詞
おかくなるさ思なりけりしをしりて　箋 不定の気色
一所につきさきの因縁しなれとし
女とおもひもちぬ者ひよかくれたまふらん
箋 詮本意ぬ人ゝの様に思ひ出ても曲あり一条ハ
おかれしとて世になれぬうにまかせて
うらこられて　源より心つまりの恨きてし
いとうくさきものものさゝまさね　うちとけれん事し
伊与なと書てりかそてにいとしまとし　何 奥入でかきうへを為にて
あつらし何のみちまて

秘 やせ中とおもひしかとわれからこそあはれなりけん
蜻蛉の一巻此寺にてしにけるにてこそ何かは此人も一つの物とし
箋云桂中物語の人忠女まて内侍も主上の御心ちに逢て交
殊の書とおなしと浅ましと身をうらみて又源氏の
心をうけれは一入無と悔しかりしと歌に思ひまよひし
をもしろきのことまて　蜻蛉と源の一旦にて加えりふ
若をもてなしひかりん事はかへりまし後はやうかうさ九首にて身
こそ親の詞すこに独り侍り人には家かさりかねて源をとられまんと
かんなりしはかなのうきりやと
河万 まさしかる後世の山にけ後は又ありんかすなれもかなしけ
花 後の後せとるにしてもなく侍るなれ
弄 ありしの身なる源氏の御事すゐんは此人かしいとあはれ
こるとしおかへ殿かなりやとしのもかなきかなし
箋云さきぬとぬ身なるかさきりて此時を源ありまさりひ
よし申をしおそのやとるらしとしのちせは無常れ本にひか
らりやうり根本はまうきなりの後世の山れをよりまさる詞し

此書は後世はわちのまれとひかしまと
いとかりなりうき秘の加えて　弄 うき身のこし
秘 よし後の定てうやう感しけて仏情むまれとしうま秘はうきものし
箋云文殊相具して居のも限なし　祇注の御はれたるかし
きまねうかれたそれをうくうまれとは四中にふみて秘とかい
よしいおハかんきこえけれて　よしいおうかし
河 おもれなとふれにおふてあまの苗とそれなしいひそ人のうれしに
弄 東本ミハいひそやて
如 それなとふれにおふて家の苗とかへしといひてあ本ミハ
わくとをそうにひしきおもしろきしあて詞をうへける
東史記漢書本侍もとかり　筆同て
おもしきは　うつもれおかひ人なる振し
秘云いへうちの身れものきこえまうでいかて秘ハ帝紀
此四中とりて東にまひ中は度かんれ詞の極かな侍ふは
あるは源のこさとはしきかまにえみとへきてとこうより四中此
示にをとけの段にのかりといふ子やみにいて切りしと源のお

かくても世中にと捨かたくしてハいつくと定めなき此義にまかせ
七 さ猶つくしはてなくさめ侍る事なとかくへし
十 此夜宿りをなつやといふやかなと読て但此句ハあはれなるよし
羽衣もなミたかり一夜ハくもりなくさへも甚接つまなく
てたとゆかりの貞思のかなや　此等用之　万葉集
沖まとかの衣あかつき多きと云下に此句源氏をよめる也
私云此義ノ義撲母儀と此句蝉とハ源氏一部の貞女なれハ実の
人なしと云ハ昊院と號し申されし後土御門院諱
来舎（?）と云ま此句と俟し此句の趣ハてひハをさむる九
めの又うちねておかやし時ハかうあま物をもれなかりき
きくハこれと来舎なれりとうるやかれなり
ゐとなりぬ　　月のつきおもしろくなりぬ
いまこそかゝる衣うち
む いつはれてし　いつわかれてねかましきさなれハ人の様に
人のう読よく寝られぬかとらて　 如 よくいねかね物をとし　義
御車ひきいつくよ　源氏車しける供の人にいふて

うきもいつくきて　　紀ノ方し此供の人をとふもの
女なしの御方さゝへて　紀云羽源氏御心を起して思さはらん
義云しりてしと云きかへる又上ノ段にて物あるきまはら
ともおかし次ハくて見もの
私云女なしの御方遣して来たて
夜ふかくいそせす人きさそと云し　いつ
君ハ又のつき　　源の句し
さしてくかく　句　うらとくてし
如 まちさの句し
義云四句も書はきえへれなれはしし又趣てハいつし
折れ心やすも　　中の句のまされおもハ奥のと云り花より
かも人り物をてしもれのかなを
いそうやうへき　　関書みかりしいそてはとしてうへへき
らんめやとあり
よれきうね御句のつゝきそ　　うつきされつゝきし
如 ゆうよつまかなき事ハいさへひまきましきさし

あはれさも　又源の句よハ一旅詞切よ云つすし
めつらしき句なし　箋　如此源の句篇よ宜しきている
ほころひかゝり衣とかねつ有らせん為の次第し
おもめきさらり　源の難し　箋云媚し女郎花なより
艶しおよ赤裾の女のなまめきちる花ハさなしと云ハ生ノ字し
をりもあしく咲かり　四かのくしくて
江
散る花おしたひ咲し吉原(?)すしくていふ　周章アハタヽ
如
前よをりも咲ぬとまて言に有りて吉らしく咲といふ面白し
あまたるも咲ねしゝをかしくすゝ次第に咲の衍し
源
つまさりさをとらうみとそそれ吉のあはにとらうめらぬまておもろし
辛
つま迄るをと後のすつるハかねの方をつゝてし
又句と人ありてとうしてつまさりしさ句とゝうそてとらの人出
ゝやうらさとそそれなりてみる詞よこうりの人きさし
祇
紙にとうあんへぬまさしいるゝとゝ入ていふるしつまとなきさと恨とも
ふそねとハとひ月の数ろうと実ろしと中ねよさらせんとて源の句なし
秘
実箋の字也しれあへ句の羽面白し此附実便の句を待しまゝり

そうゝ人此附実まの句とくてとこ此ハ極源氏よ色まつれ所々て貞
花比艶なりきぬし
箋
つまとなれハ実るのすゝふうしと為れ別の句をゝゝてゆき
ゝも之けぬし史の句とハ自然とさしくとくゆうの句をやさんと
此おもしろとうゝしる此附実まの女ゝ行人きに八銀
花さらしひゝよあさきれうゝ絶へうの貞女の暇さ来まて泥
おりん句の句もさ句とそのよ　うつゝきの人し
聞そしらぬ句ゆのてあしを　源の極秘此めてくゝ面さゝ
なかとも人りいてねすり
常をいてもゝくりしう　秘　平生ハ見る句に似合ぬと
伊予及をとそて　秘　伊予及りて夏まやして夜の袖の
ゆめやうめらんと
ゝめんとそゝおもそ終しく之て
ことさら
句のらさをあはくにあつて咲る史ハとりうせゐそハ袖てなれ
祇
祇源とり加さゐてもいるととやらう
秘
句のうさをなけくた縫東ならぬハ雨気をぬし

箋云男のうき稲くと顔きゐしんけてゆかりの衣のきぬなり
ようかねてこいふ男のもと藤布まで思ひきよりけり宿世の
はてしきを一とて又源氏のひけをちろつきのうつを稲えてね
経りまつてつ紀さゐと見えたすりまつれ我すり事を一て
私云箋ノ義實すれたりさし藤あ衣をゆかし
同 事しらずて御しまんし
古くあつく
弄 あやかくにゆかり 氣色なり
私 てくくあつくゆかし 箋云てしくくし候し
色つりの男のとかんてつう
同 右奥 あふさの名とふさのまでにしりとも源の実のつくとして
同 志郎果に忘れをまさらぬてれ何色つら実と見えいゆめてよ
私 あふ彼の名とて紀のは実すすのこつけようけつ衣都
のの寺ハ障子へとくその方すれハ衣ゆくけつる前九一の国
祇園ニお彼の名の方実なりのよしれうろけよ彼けつりうし
私云ハにかしれるくとハふ我 箋 私ノ筆ニ同し
私は上前ノ門奥入祇園るへにハにかしれきのとハうつき

我さんの彼の寺なうし
御なさしあて 源氏なきゐゆくれさ候し
見れつくらん 東面ハあけてむきし西ハ房女房大ハ
つきひゐるなりくし
あけて見れけし 宵ま源の立寄て物語なさとゆ
ゆしうるし 私云電蜂の方ま仔へし あけてよハ
紀ノ女の女なしの何うるし
てきあけてし 同 抄くさ 物物文し 今葉戦ノ字を
そめしたてよく古徳うて ま あけてハそめきあけてし
箋云てめきし 但てれうしあへるれとと
こさむしのうとよう 弄 障子の上よりゐこうすやと 一宿あり
私 うさハ上てあの紙より出の氣のもとし
箋云上ノ此ハ見うし 出のうをもくとしとと 箋の箋紙ノ義
不書うりしよ障子のあへきうすあり 出まりとハ上し
もきのとも 内よりれそて女房のんし
月そみりのまてえおさゐまる物うつ親さやうにかへりて

箋云先月の明らかさに月の光おぼろにて梢に影の見え
明らかならねば影を見えずとおぼつかなくとよむなり此梢の明ら
さいへど明かりのなきといふなり中々の字眼にして泥のくもりを
尤も明るなる月こそ無き心ひきと此暁の月はいとよき
ある時の儀は中々とにて　私ノ愚大略おなじ
紙面月の光おぼろなるといふ風かくあけゆくところの
月の光のかすかになれる如しに影の影はさやかに見えしる折なり
如くなれし中々なりしきて一夜中の月あかりしよりもと影うつの
さ暁月の面白かりし源氏君の立出給ふ折の気色にして此折の趣へ
見てよく思ひ出て見ん思ひ人きけし花に香月の如く月の
光のきゆるといひて程なく如箋に申しなれば程へん
弄　おもし御の月の名残も見えし心をおぼしかけた人と心を添へ見ゆ
私かんなさきの見えしもしきも
私　此所の源の心に如きつて此段は思ひし入きし趣種限なき故にし
箋云　去りの月の夜に泥むけしを思ふ人の心に思ひやるべき時はあれ
一しきりの時を恨ひ頼ていしく一つかよりおこりし宗に

人まもね渉りん　源氏の申し
もつて御らん　久しきのつくさへおきし見えしうちを
小君など召しせんとの渉らんと出つかはしべし
ふゐうらへそ　川守してあるる
前つ御つかはつて　箋　葵上の九条なれの事なり
事やうの御申しひあつきのうへさへ二条院に渡りしと云説あれど誤なし
もの紀羽みて見せつらう　ねきとて東の事は御申ひあり
まとを思ふ字子眺を方違の次くに宮様より渉りは不審のこと
彼人の世の今も御らんやうの方　宮様の思ひ乱れし様と思ひやるし
思ふれやさしては　源の御目誤ふかうかなしといふ源の縁ふ
ゆるさてなまめかしへし
中の思ひれ　思ふさまのに宮服の女なるさとは中思ひとて宮の
中なと思ひして源の御かへしつひて中の思ひやとのまつて
くあるくるあれはあつう　ころなの事なと源の御かへしいふるし
くあるあくといふ対面て有くまつくまて見え申けめてゐると云し
此かくは大夜みのと　私　此紀まで前ちと夜ふ御かの時ときらへ

二条院にかへりたまひて君しのびたまへり　箋曰し
たまひてしのびんての　源の守の娘をのたまひての
ちし中納言の娘かは　うつせみの弟小君し
前は右衛門督と云　衛門督は中納言にて将中納言を兼
右衛門督の男ありし也し
うんにて　源のちかうて御乳母とて　参りせんとし
かのうへたまひてまかりしうとにも紀伊守の娘かせしかし
いとかしこき　紀伊守の詞し　いとうつくしけなきようし
あはれなる人へり　うつせみに中宮にまいらんとし
まかりつかまつりて　源の御心すさびなし
その娘君を御供の人わたりしやりける　源の詞紀伊守を招て
そのうちの君にたまはりとて月ごし紀伊守の娘を召仕はる
かてとはいのみなり
さて伊予の　紀の守の詞
あやしおほせしも　うつせみの文をまつへまいりとおほせ
さてあらで真の御書よ　かりそめ御いぬとし
おいれのしたり　源の詞し
まことは伊予かうへし　紀伊守詞し　かてはかられて
うるはしき折りかうのうへしとすとうらて中はうて
世のおぼえて
請君擬蜂君莫擬蔓君又子成林様　白氏文集
中書云継母の継子に多に嫉の事なると云ふてそれはとて
父は継子の親に嫁さんと云かうと云ふて失なる事ある
何時の和儀の例あるし
も　まことは母にむつひぬると世のおぼえくはしと　勝秋
継母うちとくぬといふなまくあまりきとし
此子いくまでまかりてう　紀伊守の小君をつまひて参る
あそへ　前より伊予のかはりくる詞し
ところのちはあるの君をもとられぬうちへかへる
めしつかへて　源の御うちにてちくて召まうつかし
いかうとの君　うつせみとし
さる人きてこの小君の袖しとらへまいれと常に参りける
ゆへようつせみの事を源の使いとされ参りまかりし

されどいとらうたげなり　あおみつゝきれとも源はらくいひなし
あやうかうつせみの事はきまんにかやうにかきなし
たゞこまかて　空蝉と源とふかきよりいひかけしなり
中そらに小君を中だちにして
あやなかるを　小君の心に
まうけしをなかれ　小君のたちさはあきれまどひたり
兎角は何事にかゝりはまてゝとかれまじ
御文みのてきられは　小君は源の文を空蝉の方へもて行
女あさましきに　空蝉の体は子をきゝいうらしくふるまひ
おのうし　如 西法しに体はまかこしきら体し
いとおかしくて　如 萬葉のおかしさし
源し 君ハ一度と何か東をやて今まく源は目さへあいてかほと思はるゝ
笑云くもしき蕪は体来のよろこひのちもろ束やうると
まつはいつも小人つてよろこひまれわたらし
ぬる東るけまし八　私云川帯はんあるいし
何典 言しき紙をふつけてつゐのきまん笑の所にて君の心かは東をまれ

ゐんきあよりの御つきさきめてきうて
源の風情とあつしうる数されさ海て兄のまえの月ともまうてハ
きうのわうわうつ四しうちまもし方とこうる影し
けしきを見れ所し
兵ねきくせ
弄 文のの書ふさて良ゆう年ス源のうに官の事ををとおふし
如 目と箋文の書ふさて良ゆう手とつり源やう
私云文のの書の次まさきまゆう年れき宿世ととへ八源氏は
兵ひのまれはまうすし見又さきてまうねさ花あうハるいきす
夕へきれた今かひきをハ負せけまさし乞の只れるやねよく只了
小君かしされい　源よりむし空蝉れかはすとりるかの気を加し
御気うとふ　小君れうつきにはゆまうて
う所御めを　うつきれ羽し
うう覚して　小君のさるし
兎ふつくと　小君れ羽し
人やまくく　如 空蝉の人小君にはうかく漢の作きくや
ちまたよりて候て　とひきまるし

いそおよれ云まふら　空蝉の詞おもはゆき事ハいたく歟と云し

さハなあり給ひて　さらハなかりなんのひそとし

めはよふいつそふハ

如　小君詞し

涙なかしありなん

何　追従し給のきみ祢し

君めしよせて

源の小君を右手とりまのみまいらせう

しまとれまつかう

うかゝひあめて

小君ノ神し

いつらとのたまふ

源の空蝉れいすいとれおもふし

しかしかと

小君の空蝉れやさしく抱ともはし

いふかひなのことや

源の詞し

またもたまへり

源の身を入させうとし

あこハ知らしな

吉子　日本紀稚子しおもとよみ五音損あるし

如　小君をとさしてし　源のてる桑し

そのいよの翁よりハ

祇云前ニ小君ニ源ノ付具ニ申中也ニ　如此し

そのいよまうと云ひてかしみまゐる　今の人なん此くつくり　如日本

さきとひきさせ物し

うめれとしけるくらひかすそしこそ　祇注伊予守か前坊なり

先にみし人そとハ空蝉伊予守か妻になる前よりの源の君ニかく見し人そといふ

ひし人そときたちし事と小君かこのよしたてまつりしといへ

かしきるなし　たのもしけなくかしほそしとて　たゝの心とも

むつかしと思へるにて　ふつゝかなるうしろみまうけて伊予守の事とも

如　家をとかくめつうきなから小君にかくおもひせんとてなからへし

くらひかなそしとハ　扨れかいかなれとも心得へし

まろか子にてをあれよ　小君ハ源氏の子まてあまたし

このたのもし人へ　伊予守へと云年寄る者ハ行末みしかゝらんと也

ゆくさきみしかゝりなん　小君の源のわか子をさやかたくたのもし

おもしとおもひ　源の心し

かくいふかと　順徳院御抄廣人を賢木倒ちるかを云し　源の御運度し賢木倒ちるかし

されとこそいとをかしかりし　小君の事をと云し

かくかゝりもせしは　箋云数書れゆきさハいかなると

ゆきしかるうとまうしまうせくなり

とゝまらん男のおもかけ　紀守川つきて見るへし
めてきこと家ゐありさまこそ　紀守事につけてよろこふ
源氏いとにこふれ義として　男にお心を事ハいふとし
われら事も御文をひとつさる　紀守源氏の家の
主なと申す事きりつくし　うけたまはれ人申し
召ひのこともありける　夜の者ともしたる紀守の
名ハおもしたこそ時のまいらす　源の空蝉と云紀守
さんなれありさまひ　源の男ともしは行八つきて　かの君の
まいのうちに日くすつる代に　家に内にのこまうりひそかに物と
さら人まうそのいひ　紀又わたしまうしてもうらへまかせしハ中川君
方人おりてよれ方の物うかゝてまかへらし御ま方違
をおもひおもしてる様ましそてし
まらして　其似とうけたまはし
やうやれめいかゝ　江西日し
女をさる御をもこそ　小君して見よ方へ行つらハされ
おりしたりつるん　女とさられハ備しハ出り給ハかう

空よりなむせられ人をする
中ちつきよてさせんてのまかし御をれハ
うつせられ源と御女をむんてのうちつき
小君かいそいかと　小君の仰お人わくらかすとる
てうつせられちかいくるし
うこゝらかしまうると云此事の姫君をまさ
かれといひりつかの　おまおし中わの君なりへ
さらんしそ　源のんして人をくとうわうつけめてし
かうして身をう来り　小君のやもして御事をのまし
いとあさましく事もしと　小君のさうかんて
うく事しかぬん　空をされ小君よい子御し
いかしてへくさけもて　小君といひおわして人源人
かへまたを空蝉のいひさら帰る　ほこ不達（大サケ）
あまりしと身をれをし　人それ不意をへまて
いひなりて　うつせられ男国よりひてすりし
ののうちにか　うけせられ申し

此段をよみてしかるへき男と云りんの事なるへし
いとかくしれぬやうな　人からそこしれは源氏なとを人しらぬ
君程つまへの所からはなき事は男のかたをさしぬ程と
女のうちにもなかひきなくしぬよは所くねとをさくし候り
あるへ人の負心そへりたりつれてうしとし
とてもかくても　箋云女の情よは分あしきくみ心構賛心
抄 世の心ひとつ身の心構し　ものとしてもてつひ作者の
の書あまたていいろうる事はもうと補をあしくも　弄曰
もしんは心つきなく　細 老心しとても不定り身か男にぬる
うるか前世心つきあくそをとてて　若しかくねるを云候
君はいかに　源の小君りいはるるをそこ心りくるなと
おさるきを　小君し
ふかうなるよしを　不用し　抄 小君か事と不用とし
あさましく　源の詞し
御筆しきなり　源の此筆あとといふとにくしく小君のとかし
とかり　あやしくも又ありよかしへし

うめきそて　嘆息の貌也し源の詞し
たくまれ心とちてをれ源の御心をやすく悩みひめける
細 帚木の心をえてこゝにいへる但古歌は月しま事も
抄 帚木の事先是あるによりていふ是を見通はみてこゝにみえてしら
されはかなしとき人事てとも見ねは世なきとし
箋云帚木のれ全不あ小はえりてとひたく為よれは
見えしかそついなしいせりされとこしけるかれ
をして君か為か事の此あさくしとし　抄 此歌は源氏の独り
うち臥て梅のんさしこそうかれと小君よ候しとは不
をたまいのにいう詩の君かよ身さりてとはく見してあつねあし
細 そのなへやうやや又なる帚木のをてはこれとあしね君る
徳同寺抗まくまにかる事の其の中にゆて下の所りてとて
しそこ遠いこ者うそくようてこれは見えねと云なり
顕昭云信濃なる巣のそやと上ふ実る義そ　そう故よく
まてこれは帚木に似かる木の梢のとる立場てこれはそ木の
見えは又ほとおへの中に作へきりてそまてしよ施をてくてく本なり

家にてもものゝ名なり渡る原乃所の基僧判の紛なり若風土
記にも見えず伏屋にありて此帚木といふも今見る伏屋の本は
と年久しく廻りあひてたえずとも見えず伏屋の件の本は
美濃の信濃の両国の境にありて伏屋の本帚木ともいふと云説ぞあれし
なくなりしかばこの木を立たる枝ありて見るにはこれにかゝるはなし
とも云絶えずよそのものいはれじとあるはねあらましよ所の人伏屋とも
一説に杜と本中にありて一本ありしよしと　承暦の合と
師兼よりてまゐらせしに本まではいつもありしかども今その木は見えず
此寺の向し　往信て説る此寺を入たる年留者不快
変じ皆以云改不快雖不知所避而後移此寺入金葉集めす
僻案抄をなをしぬるに二川の僻を一は帚木本をなまし
其まゝいひならして其の中まで立てまたまだ見えし又は入ら
くてられぬ本ありて見えねどしこは帚に似たる本は信濃よりぞ見え
それとなくて見えにくなりけるやうにてそれはよく見えてこれは
うたがはしくさればひとつ見えしはいかにしても見えず雖たれし
無名抄に此寺あとに心に極めし物かたりし信濃のそのゝ

かの庵と云ふ所にては杜のことを全くそれは庵なく
帚に似たる木の枝にはるかに見えしかばこれはかやそ皆
常磐木ぞよかんにてゆくことはいはへ人のたるを比故にを今
向ひて陰本をも見えず陰にも中背にてさなりに見えしあとを此比見
帚木といふ本は見えしばかりなくてはかれぬもとも近づ
或説には杜の帚木に似たる木あるにまかせて見まし来り
見るにてをりて折々あかね本しるそ見ず　或又件帚木は
杜の葉頭に見えしと見えの下にゆきてこれは木なりてやれ
をとこてはゆかし此説をも先達に記し見ゆとぞ　奥義抄ノ後於遠云
ゆへしるよなけれども見ゆることひとつ見ゆる説よりし

今勘国史云仁明天皇承和二年六月勅如聞東海東山両道
河津之処或渡船数少或橋梁不備由是貢調擔夫来集河辺
累日経旬不得利渉宜毎河加増渡船二艘其價重者須正
税又造浮橋令人得通及建布施屋依橋寄造作断造開救急
摘ゝ　陽成天皇元慶四年云弘仁十二年国分寺尼売為救
百姓済度之難於越後国古志郡渡戸濱建布施屋施墾田四

十余町渡船二艘令往還之人得其徳便年代積久無人労済
屋破損日曠荒廃望請彼免越後国住五人永令預守之
女ともやハその舟よりまうくへうらん所々に見をとゝろかれ
信濃ちにハその舟にたちまちにや　俊頼卿よ
山田ちりきりてこれまてやと風吹ハおもつらひそうこそをならふ
とふの彼岸のいつれをきたれ舟ちくハ名の舟もや支ける
うちや当日しるれ
或説云信濃にハ兜をかりて舟といふれうふしと八十よろひそて
まつとおけてそれよりさうれ当る事の渡し場の跡とくれと云せ
やと書もとゝし
私云此歌の後に兼ねて見られたれ見と哉を
きこふん こしそそれ　源の親し
いふんやうをちきつきるきられとさこちおつるし
女もさいうふ　義云さいうふとハいふ字服し
近江ちうちそこく
根たらね舟をやまさる名れはきたにをかけきゆるなと
舟をやハいふしき尾し五十枚あふぬとしらうれしあさハ

そくよりてこれハうちうとゝきふかとハよわう
見ても女の眼にうつりてこかしもとふハ人よいられ九日うつ
これにいふやとも　それなる人ハそのつけつける申事
弄
舟やハいふしき河し早下ノ心をきし歩前後らし路を
うかをのくいとうここちとうて云事あまとう同しくを
来ことよあつハそのしとき世秘事ノ秘ヨ同し下ノ心ハまや
よまそつきて陣つ色つハあつけて忙せよと云し
此歩前庭るこハ名枝ことこと或とうつハ同し枝ヨ篤
来こをいふ申しきし贈答まてあへしとし小君給ふる
とめつてきちひおつくるのと云も此文をもう給ふへし
義云此贈答許物の私会し舟やハいふしき家し秘伝
の秘ちし時ありきといふ帰来しと作ら源氏に見ゆハ
きうちや信濃のその舟の舟やまさる名所こそ書けるし
人ある申しと思ふらんと　小君のあるさこなうゝあつく
とく人かれふ雲をもんと空蝉のくうしく先うつし
かとくいはましちきし文作使の人へてなうへ

をこなさせて給ひ　源しも給ハ何に無禮し
人なれバ　秘 貞信なる人の思ふハちなみと源の心もとなくおほし
なびきし心　箋云人よりまけぬよし又さぬやうなる事と
寄にもあれとも日ころハまさりぬし
少年云うつせみのつまなる身を源氏ハ思ひわすれ家と源
の思ひのまで又其事終りわりなき事に御思ひ安
易と源の状とびろ是なきとハ流んやよ身の人き嘆し
させれとおぼしてと　河 さうハさてあれと云也　花日し
如く之事にとゆきの由　河 驚しうしけるさし　小君弱不
思議なる恋人源のおもひつきさん事ハ余りきましき事とし
いと程しと程なり　小君の人中に源と思て源の御
為にのとなるとハ思へどもかくれなる恋人なりん事ハ叶ハねし
よし何うたに　源の弱きうハよし／＼小君うち流そて
こうかれもめまとえてうこつるになげきのなつかし
うきもしくめてきもしと　小君の口中し
つまなれ人なりハ　源のうつせミよりも小君と袁よ

思ひのまでさハまきらしき事なれハ中／＼といふ面白し
おかしみえ　秘 何事に御耳いとにしみつる事の無端も甚
而長く／＼此後也しそなきさむしき筆法竹なき見ん
不勘べきしとそ
秘云とてとハ紫式部か歌うひなる事と志やし
此忠あし此物語好を以てうつやうなれども人の心
あはれと人いうまの玄ふてうやうあかうハそまなしき
事しらを付て見るべき事しとそ　箋同之